

第5章 メミンゲンにおける麻織業の発展と 商人・商事会社及び輸出市場

第1節 はじめに

中世南ドイツのシュワーベン (Schwaben) 地方一帯に展開されていた麻織物業を生産的な土台として、当時周辺の中小都市の多くに数多くの商事会社が発達活動していたことは周知のところである。前章でみた都市ラーフェンスブルク (Ravensburg) を拠点としたかの「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」の存在とその活動がその典型であるが、そうした大規模商事会社の存在はごく例外的なものとしても、そのほかに数多くの商事会社が、多くは個人商人的活動にささえられていたものではあったが、中世から近世への経済的過渡期の混乱と不安定な時代を背景として、その営業活動の促進に邁進していたのであった。ラーフェンスブルク (Ravensburg) と並んで交通の要所に位置していたメミンゲン (Memmingen) にも数多くの商事会社の活躍がみとめられる。フォーリン商事会社 (Die Handelsgesellschaft der Vöhlín) はそれらの代表格である。

ところで当時の商事会社の多くは、経営形態からいえば有能な商人の活動を柱とする父子、兄弟、等々の血縁的結合体によっていたといえる。上の「大ラーフェンスブルク商事会社」のように外部からの出資にも多くを依存していたものもあったが、しかし活動の主体である商人そのものやそこに必要とされる出資金の論議がその地域に有力な貴族家族 (Geschlecht あるいは Patrizierfamilie) に大きく依存していたという点では、多くは、まさに中世的同族経営

(Familiengesellschaft) の域を出ていなかったと言わなければならない。ここに取り上げるフォーリン (Völin) 商事会社の場合もその例外ではない。中世の貴族家族出身の商人活動とそこからの出資、さらにそれら貴族間による血縁的結びつきを通しての会社組織としての経営拡大化、等々はこのフォーリン商事会社の発展のなかで随所に見つけられるものである。ただ問題は、そうした一連のドイツの中世商事会社史の時代的移行のなかで見られる、麻織物を中心とするいわば商品取扱い商業から、ウェルザー (Welser)・フッガー (Fugger) を中心とする貨幣取扱い商業への移行が、このフォーリン商事会社および後にそれと合併するウェルザー商事会社の発展のなかでどのように跡づけられるか、である。さらに、この時代のドイツの商人一般にみうけられる、土地・不動産への資本投資先の変更が、この商事会社の経営史においてどのように把握されるかである。

第2節 メミンゲン麻織物商業に関する研究史

中世都市メミンゲン (Memmingen) とそこにおける商人、あるいは商事会社の活動に関する文献はけっして少なくはない。しかし実際にそれらの文献を手にとって、あるいは目に触れることができるものははるかに限られてしまっているのが実情であると思う。手に触れることのできないものをも含めての研究文献を追ってみれば、以下の通りである。

まず研究史上の地位から言って最初に取り扱わなければならないヴェスターマン (Askan Westermann) の諸研究は別に扱うとして、時代順に紹介すれば、1875年に Brunner, Luitpold, Die Vöhlin von Frickenhausen, *Zeitschrift des historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, Augsburg, 1875年所収、が出ている。次いで Dobel, Friedrich, Beiträge zur Verfassungsgeschichte der Reichsstadt Memmingen, *Zeitschrift des historischen Vereins für Schwaben und Neuburg* Augsburg, 1876年所収、があり、1900年を過ぎると、Müller, Johann, Das spätmittelalterliche Transportwesen der Schweiz

und Tirols, *Geographische Zeitschrift*, Leipzig, 1905年所収と, Miedel, Julius, Die oberschwäbischen Reichsstädte, Ihre Entstehung und ältere Verfassung, Besprechung des gleichnamigen Werks von K.O. Müller, *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1912年所収, が出ている。さらに, Maurer による Ulrich Imholz, *Schriften des Vereins für Geschichte des Bodensees und seiner Umgebung*, 44. Bd., Friedrichshafen, 1915年所収, が発表されている。

1920年代を中心としてそれ以後, 上に述べたヴェスターマン (Askan Westermann) の諸論文が次々と発表されているが, これらを除けば, Kammerer, Immanuel と Nebinger, G. による *Die Schwäbischen Patriziergeschlechter*, Eberz und Furtenbach, Neustadt, 1955年が発表され, 1959年には Braun, Fr., Die Einführung der Zunftverfassung in Memmingen, *Memminger Geschichtsblätter*, 1959年所収が出ている。次いで, 都市メミンゲンについての概略が述べられている *Unsere Stadt Memmingen*, Verlag Bild & Druck GmbH, München 1963年, が出版されている。さらに Braun, Walder の論文 Die Vöhlin und ihr Wappen, *Spiegelschwab.*, 1966年 Nr. 5 所収が発表されている。翌年の1968年には, Rössler, Hellmuth, hrsg., *Deutsches Patriziat 1430~1740, Schriften zur Problematik der deutschen Führungsschichten in der Neuzeit*, Bd. 3. 1968年所収, が出されている。

そして, 1971年に, メミンゲンの商人および商事会社研究にとって最も重要と思われる研究著作, Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Kommissionsverlag Anton H. Konrad Verlag, 1971 が発表された。本論文が参照している多くの史実はこの研究著作によっていることをまず明らかにしなければならないが, R. アイリッヒ (Eirich) 氏によるこの問題に関する過去の数多くの研究の集大成 (ヴェスターマンの研究を含めた) は高く評価されるものであろう。そのほかに, 都市メミンゲンの歴史とメミンゲンを代表する巨商, 偉大な人物の足跡を追って編集された, Günther Bayer, *Memmingen in historischen Bildern*, Verlag Memminger Zeitung,

1983年、も研究をすすめる上で重要な史料を提供している。以上は、メミンゲンとその商業史に関する参考文献のごく一部に過ぎないものであろうが、このほかにも、当時の商業活動を扱った論文、Eirich, Raimund, Allgäuer Kaufleute im Fernhandel mit Sensen im ausgehenden Mittelalter, Verlag für Heimatpflege, Kempten, *Blätter für Heimatforschung und Heimatpflege* Nr. 81がある。

最後に、メミンゲンだけでなく当時のこの地域一帯の商業・貿易活動について大きな業績を残しているアスキャン・ヴェスターマン(Askan Westermann)の諸研究に触れておきたい。それらの研究を発表年代順に紹介すると、1908年に *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 6, Leipzig und Berlin に発表された論文、Die Zahlungseinstellung der Handelsgesellschaft der Gebrüder Zangmeister zu Memmingen 1560, からはじまって、実に30数点にのぼる業績がみとめられる。とくにメミンゲン市の市古文書館(Stadtarchiv)に保存されている歴史研究誌 *Memminger Geschichtsblätter* に発表された諸著作は、1910年代、20年代、30年代、50年代におよぶ長い研究活動の成果である。ここに煩瑣を承知であえて挙げれば次の通りである。まず、上の論文の次には1909年に、Der Rat der Reichsstadt Memmingen 1446~1552, *Archiv für Stamm-und Wappenkunde* 10, 1909年, 10頁以下所収, が出た。次いで1910年代には、*Genealogie der Familie Zangmeister*, Marburg, 1911, Die Geschichte der Zangmeister'schen Meßstiftung in Memmingen, *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1913, 129頁以下所収, Memminger Weinhandel und Weinausschank im 15. und 16. Jahrhundert, *Memminger Geschichtsblätter*, 1913, 51頁以下所収, Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingens im ausgehenden Mittelalter, *Memminger Geschichtsblätter*, Nr. 1, 5頁以下及び Nr. 3, 17頁以下所収, Zur Geschichte der Memminger Weberzunft und ihre Ereignisse im 15. und 16. Jahrhundert, *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, 1914, 385頁以下及び567頁以下所収, Das Memminger Bleichwesen in der reichsstädtischen Zeit, Sch-

wäbischer Erzähler, Memmingen 1914, 104頁以下所収, が発表されている。1920年代には, Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 2 及び Nr. 3 所収, Die Besserer-Gesellschaft zu Memmingen, *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 7 及び1921年, 7. Jg., Nr. 1 所収, Zur Memminger Geschlechtergeschichte, Die Sättelin, *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 4 及び Nr. 5 所収, Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingens im ausgehenden Mittelalter., Teil II, *Memminger Geschichtsblätter*, 1921, 7. Jg., 25頁以下所収, Die Haintzel zu Memmingen, *Memminger Geschichtsblätter*, 1922, 8. Jg., Nr. 5 所収, Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingens im ausgehenden Mittelalter, Teil III, *Memminger Geschichtsblätter*, 1922, 8. Jg., 10頁以下所収, Die Vöhlin zu Memmingen, *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., Nr. 5 及び Nr. 6 所収, Zur Memminger Handelsgeschichte, *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1924, 160頁以下所収, Besprechung des Werkes von Aloys Schulte über die Große Ravensburger Handelsgesellschaft, *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1924, 133頁以下所収, Das Bürgerrecht der Reichsstadt Memmingen, *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1926, 13頁所収, Die Zangmeister als Memminger Krämer und Großkaufleute, *Memminger Geschichtsblätter*, 1927, 13. Jg., Nr. 4 及び Nr. 5 所収, Bernhard Strigel als reichsstädtischer Bürger, *Memminger Geschichtsblätter*, 1928, 14. Jg., Nr. 2 所収, が発表された。

次いで1930年代には, 1932年に *Eberhard Zangmeister*, Memmingen, 1932, Die Besserer zu Memmingen, *Memminger Geschichtsblätter* 1932, 18. Jg., Nr. 4 及び Nr. 5 所収が出たあと, Untersuchungen zur Stebenhaberchronik in der Memminger Stadtbibliothek, *Memminger Geschichtsblätter* 1935, 17頁以下所収, Die Memminger Ammänner und Bürgermeister, *Memminger Geschichtsblätter* 1935, 20. Jg., Nr. 4 所収, Geschlechterfolge der Mem-

mingen Zangmeister-Linie, *Memminger Geschichtsblätter* 1935, 20. Jg, Nr. 2 所収, が出されている。そして次に出された Nachrichten über mittelalterliche Memminger Geschlechter, *Memminger Geschichtsblätter* 1937, 22. Jg., Nr. 3 及び Nr. 4 所収の論文は年を追って次々とその続編が発表されている。つまり, 1937年の第1回発表の後, 1938年23. Jg., Nr. 1 所収, 1939年24. Jg., Nr. 1 所収と続いた。そしてその研究はその後10年以上たった1950年代になって再び継続され, 1951年, 1952/53年, 1954/55年, 1957年に発表され, その業績が一層積み重ねられたのである。

以上, ヴェスターマン (Westermann) 氏によるメミンゲンの商人および商業活動に関する非常に貢献的な研究成果の概略を紹介したわけであるが, これらの業績のほとんどは, 1971年に発表された上に挙げた Raimund Eirich の著作, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*に吸収され, 集成化されて, 当時の史実の解明に大きな光をあてたのである。

第3節 メミンゲンの発達と麻織業の発展

南ドイツ・シュワーベン (Schwaben) 地方がバイエルン (Bayern) 州と接するボーデン (Bodensee) 湖畔の北地域には, 当時, ここで扱うメミンゲンのほかにラーフェンスブルク (Ravensburg), ロイトキルヒ (Leutkirch), イスニー (Isny), ヴァンゲン (Wangen), 等々の中小商業都市の活動がみられたが, メミンゲンととくに類似した発展を示したものは, すでに前章でもみたように¹⁾, ラーフェンスブルクであった。

すでに述べた, ラーフェンスブルクが都市としての成立基盤を8世紀以来ドイツの王族として君臨したヴェルフェ (Welfe) 家に依存したように, このメミンゲンも, 都市としての成立の基盤はこのヴェルフェ家の活動に多くを負っていた。メミンゲンは, およそ西暦1000年頃にこのヴェルフェ家の支配のもとにおかれていた²⁾。しかしその当時のメミンゲンにはまだ中世都市としての条件が整っていたわけではない。中世都市としての成立をみたのは12世紀, 都市

建設者はヴェルフ6世である³⁾。

もともと都市メミンゲンの地は、ローマ支配当時からゲルマン民族に対する防衛線にあたり、その監視塔の一部がこのメミンゲンにも残されていると伝えられている。その後、ローマ軍の撤退にともなってこの地方へのゲルマン(Germene)民族の移住がすすみ、西暦400年の頃にこの地に移り住んだアルマン(Alemanne)族の居住地の1つとしてこのメミンゲンも発達したのであった⁴⁾。さらに6世紀になって、東ゴート族の撤退の後にフランク族がアルプスの北側地域を征服しはじめ、このアルマン族の居住地メミンゲンの近郊にもフランク族の国王の居留地(Königshof)がおかれ、そのためメミンゲンがこの周辺地域の中心的存在となったのである⁵⁾。

メミンゲンの発展と結びつくことで、上に述べたヴェルフェ(Welfe)家の活動の1つに、十字軍の遠征がある。まず最初に1101年にヴェルフ4世(Welf IV)が十字軍に参加した時にこのメミンゲンをその出発の拠点にしたこと、そして次に今度は1147年にヴェルフ6世(Welf VI)が第2次十字軍に参加したときにやはりこのメミンゲンを拠点としてエルサレムへの遠征に出発したのであった⁶⁾。

史料によって証明されている都市としてのメミンゲン存在は、1090年に記されている“Mämmingen”と1128年の“Mammngin”であるから⁷⁾、やはりメミンゲンとして周知された都市としての発展は12世紀頃から急激に加速されたものと思われる。都市創設者としてみとめられているヴェルフ6世(Welf VI)の死は1191年であるが、都市創設の具体的な年代は明らかでない。しかしこの都市がほぼ基本的に創設された年代として1158年という年があげられている⁸⁾ことをみれば、この12世紀中頃までに都市としての制度、機能が整えられていたものと思われる。つまりこの都市はラーフェンスブルク(Ravensburg)(1152年に市=Marktの存在、1180年の貨幣鑄造)に匹敵する発展だけでなく、ミュンヘン(München)やランズベルク(Landsberg)にも対応できる古い歴史を擁していたことになるのである⁹⁾。

その後13世紀には、上に述べたヴェルフ6世(Welf VI)の死後支配権を引き

継いだシュタウフェン (Staufen) 家のハインリッヒ 6 世 (Heinrich VI) 以来、都市としての機能を着実に整えるに至っている。つまりこの世紀に商人および手工業者の台頭と同時に、都市の管理機構、つまり支配層がしだいに形成されてきたからである。1216年には、12名にのぼる有力市民が国王より都市高級官吏 (Ammann) として任命されている¹⁰⁾。これらのいわば都市行政を握る有力市民の中にしだいに財政的にも行政的にも恵まれた都市貴族 (Patrizier, Geschlechter) が台頭してくるのである。

中世都市において、商業・製造業の発展がその発展の中核となるものであるが、それらは行政上、都市における封建諸侯からの市場自治権の獲得（多くの場合、貨幣の支払による買い取り）や取引上の自治権取得として示されることになる。メミンゲンと同じような発展を示したラーフェンスブルクの場合、土地領主（＝封建領主）が都市領主 (Stadtherr) であった時代に上に述べた高級官吏 (Ammann) の任命などがなされ、その領主の支配のままに貴族や大商人が輩出したのであった。そしてそれらの商人階層の富裕化にささえられて都市参事会の構成や市長の選出¹¹⁾、さらにはそうした権限を持った門閥貴族集団による「門閥ツunft (Geschlechterzunft)」の結成などに至ったのである。そしてそれらのいわば大商人の活躍を通してようやく封建土地領主の政治的支配から種々の権限が買い取られ、いわば都市の自治的発展がみられたのである。ラーフェンスブルクで、都市の関税権を都市が領主から買い取ったのは1370年のことであり、貨幣鑄造権も1400年以前にはまだ封建土地領主の権限なのであった¹²⁾。

メミンゲンにおいてもほぼ同様の発展の歴史を経ていると思われる。上に述べたハインリッヒ 6 世 (Heinrich VI) の時代にすでにメミンゲンにおける自由取引、メミンゲン市場法の存在もみとめられるが¹³⁾、しかしそれはそのまま自由自治都市メミンゲンの成立を示すものではない。そこには先行する商人階層の富裕化と手工業製造業者の台頭とそれらの行政への参加が必要なのである。それを示すものの1つとして、1268年にメミンゲンではそれまでのシュタウフェン (Staufen) 家の最後の領主 (Herzog Konradins von Schwaben) の死後、

都市の支配権が再び他の有力貴族 (Reiche) の所有に移ってしまったことがあげられる¹⁴⁾。当時まだ都市メミンゲンは経済的にも独立できるような状態ではなかったといえることができる。

しかし、上にあげた都市行政に携さわる高級官吏職などに当時のメミンゲンの有力貴族、大商人が登用され、商人層を中心とした都市行政が進行するなかで、1347年には手工業製造業者を中心とする「ツunft規約」の制定も実現するに至っている¹⁵⁾。それまで別々に活動していた手工業者を11のツunft (Zunft) に統合化し¹⁶⁾、それによる都市行政への政治力の強化が目的であったとされている。そしてこれによって、従来からの門閥商人層と手工業製造業者層という2本の柱が中世都市メミンゲンの発展に大きく貢献してくるのである。この時のツunft結成に対抗して、製造業を営まない業種だけで、つまり商人を中心とした市民ツunft (Bürgerzunft)、あるいは大ツunft (Großzunft) と呼ばれる集団なども結成されて、手工業者と商人階級が2大政治集団となったのである。この商人を中心とした大ツunft集団が後に“金の獅子グループ (Gesellschaft zum Goldenen Löwen)”となり、市長はほとんどこのグループのメンバーによって独占的に世襲されるという強大な政治力を行使するのである¹⁷⁾。

中世メミンゲンにおいて抬頭し、貿易活動に従事した商人および商事会社は、中世都市としてメミンゲンが経済力を発揮してくる時代、つまり13世紀頃から15世紀末あるいは16世紀前半頃までにとくに一時代を形成したと思われる。13世紀はこの西ヨーロッパのいたるところでみられた「拡大とエネルギーな時代」の興隆のときであり、15世紀末から16世紀前半までは、次の時代への移行過程の開始の時代、とも言えるからである。ここで扱うメミンゲンを背景とした商業の発展も、ほぼこの時代の枠のなかにおいてである。

それでは、商人および商事会社が活躍した時代に、都市メミンゲンにはどのくらいの商人や商事会社の足跡が知られているのであろうか。例えば、同じ時代にスイスのザンクト・ガレン (Sankt Gallen) については、1480年頃で12の商事会社の存在が¹⁸⁾、1486年／87年には28の Firma の存在が確認され、さら

に1460年から1520年にかけては15におよぶ商事会社の名前が列挙されて、その存在と活動とが確かめられている¹⁹⁾。

そしてそれらのなかにあつて先駆的役割を演じていた会社が第3章でみたディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社であつたが、このザンクト・ガレンに限らず、広くオーバー・シュワーベン (Oberschwaben) の各地に台頭した中小都市にはほとんど例外なしに、そこを代表する有力商人・有力商事会社が発展していたのである。前章にみたラーフェンスブルクの「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」を除いても、都市コンスタンツのフンピス (Hundpiß), ムントプラート (Muntprat), モットェリ (Mötteli), 都市ケンブテン (Kempten) のフォーフト (Vogt), 等々である。これらの商事会社の後にこの後の時代に活躍するアウクスブルクの巨商のフッガー (Fugger) やウェルザー (Welser) の時代が続くのである。時代が1世紀ほど後の時代になれば、すでにみた通り1579年9月16日に始まるリヨン (Lyon) の市場帳簿に登録されている南ドイツ各都市からの企業数 (Firma) 73のうち、ニュルンベルク企業24, アウクスブルク企業35という当時の2大都市への重心の移行が完了するが、しかし、それ以前のこの地域においてもかなりの数の商人や商事会社企業が活動していたことは疑いないところなのである²⁰⁾。

そして、メミンゲンでもやはりそうしたこの都市を代表する商人あるいは商事会社が活動していた。フォーリン (Vöhlin), ゼッテリン (Sättelin) ベッセラー (Besserer), ツァングマイスター (Zangmeister) 等々の商事会社である。これらの代表的企業のほかに、上にみたようにヴェスターマン (Westermann) の研究ではさらに Schütz, Gäb (後の Funk), Steinbrecher, Ehinger, Ott, Hartlied, Wolfhardt 等の商人名が挙げられている²¹⁾。つまり、ヴェスターマン (Westermann) の研究では、商事会社として取り上げられているものは、上の Zangmeister, Besserer, Sättelin, と Welser-Vöhlin の4企業であり、それぞれの会社の活動について多くの論文が書かれているのであつたが、これが1971年に発表された R. アイリッヒ (Eirich) の研究ではさらに進んで、当

時メミンゲンに活動していた商事会社数は12企業となっている²²⁾。具体的に挙げれば、Handelsgesellschaft Vöhlin, Handelsgesellschaft der Schütz, Handelsgesellschaft der Sättelin, die Funk-Gesellschaft, die Besserer-Gesellschaft, Handelsgesellschaft des Peter Stüdlin, die Zangmeister-Gesellschaft, die Gesellschaft des David von Dettighofen und Mitverwandte, Handelsgesellschaft des Hans Ammann, des Hans Wermeister, des Ulrich Raiser, der Steinbrecherの12会社である。つまり、近隣の都市に比較してかなり活発な商事活動がこのメミンゲン (Memmingen) で展開されていたことになろう。このほか、個々の商人についても、それぞれ名前が挙げられ、それぞれの活動の状態が克明に説明されている。当時活躍していたメミンゲン出身の商人数はこの R. アイリッヒ (Eirich) の研究によればおよそ80人にのぼっている²³⁾。

ところで、上にみたメミンゲンの商事会社のうちでもその筆頭ともいべきフォーリン (Vöhlin) 商事会社は、ヴェスターマンの紹介でも明らかのように、後にアウクスブルクの巨商 Welser と合併して、フォーリン・ウェルザー (Vöhlin-Welser) 商事会社に発展していく会社である。つまり、南ドイツ全体の経済史から言えば、中世中期から末期にかけての、つまり麻織物経済圏から鉱山経営・貨幣金融取引経済への移行の途上での、ちょうど移行の過程にこの会社の存在をみることができるわけである。地理的にいっても、ラーフェンスブルク・コンスタンツなどからアウクスブルクへの経済的移行の過程であり、企業史的にみれば「大ラーフェンスブルク商事会社」から「フッガー」、 「ウェルザー」企業への移行の間である。以下、A. ヴェスターマン (Westermann) によって先駆的に発掘・集取され、R. アイリッヒ (Eirich) によってさらに総合的に集大成された研究に従って、このいわば中世南ドイツ経済圏での重要な過渡的時代を担っているフォーリン (Vöhlin) 商事会社の歴史と活動を追ってきたい。

注

- 1) また、拙稿「中世ラーフェンスブルクの商事会社と貿易活動」『桜美林エコノミッ

- クス』, 第11号, 1982年7月, 所収, 78頁以下も参照いただきたい。
- 2) Bayer, Günther, *Memmingen in historischer Bildern*, Verlag Memminger Zeitung, 1983, S. 7.
 - 3) ebenda.
 - 4) G. Bayer の説明によれば, 当時のアルマン族の居住地名の多くは, 語尾に -ingen がついているという。Bayer, Günther, a.a.O., S. 7.
 - 5) ebenda.
 - 6) *Unsere Stadt Memmingen*, hrsg. v., Landeszentrale für Heimatdienst, 1963, S. 6. 及び, Bayer, Günther, *Memmingen in historischer Bildern*, S. 7.
 - 7) *Unsere Stadt Memmingen*, S. 6.
 - 8) ebenda.
 - 9) ebenda.
 - 10) ebenda.
 - 11) ebenda.
 - 12) 拙稿, 前掲論文, 101-103頁参照。
 - 13) *Unsere Stadt Memmingen*, S. 6.
 - 14) Bayer, Günther, *Memmingen in historischer Bildern*, S. 7.
 - 15) Bayer, Günther, a.a.O., S. 7.
 - 16) それらのツunftを結成した手工業者とは, 雑貨小売商 (Krämer), 食パン製造 (Bäcker), 精肉製造 (Metzger 及び Merzler), 仕立て職 (Schneider), 大工職 (Zimmerleute), 織布匠 (Weber), 靴製造 (Schumacher), 皮革加工職 (Lederer 又は Gerber), 鍛冶職 (Schmiede), 布職 (Tuche 又は Lodner) の11業種であった。*Unsere Stadt Memmingen*, S. 6.
 - 17) ebenda.
 - 18) Peyer, H. Conrad, *Leinwandgewerbe der Stadt St. Gallen von Anfänge bis 1520*, S. 32, あるいは拙稿, 「中世都市ザンクト・ガレンの麻織業と商事会社の役割」, 『桜美林エコノミックス』, 第10号, 1981年4月, 85頁参照。
 - 19) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 57, および拙稿, 同上論文, 85-86頁参照。
 - 20) Hees, Karl, Ver, Die oberdeutschen Kaufleute in Lyon im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, XXVII, 1934, S. 237 および拙稿, 前掲論文, 92-93頁参照。
 - 21) Westermann, Askan, Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter Zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920年, 6. Jg., Nr. 4, S. 8-13 および Nr. 3, S. 16-22参照。A. ヴェスターマンにはさらに商人 Hainzel についての論文も出されている。

- 22) Eirich, Raimund, *Memmings Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 8-10.
23) Eirich, Raimund, a.a.O., S. 11-12.

第4節 フォーリン・ウェルザー商事会社の発展と 経営者の血縁的系譜

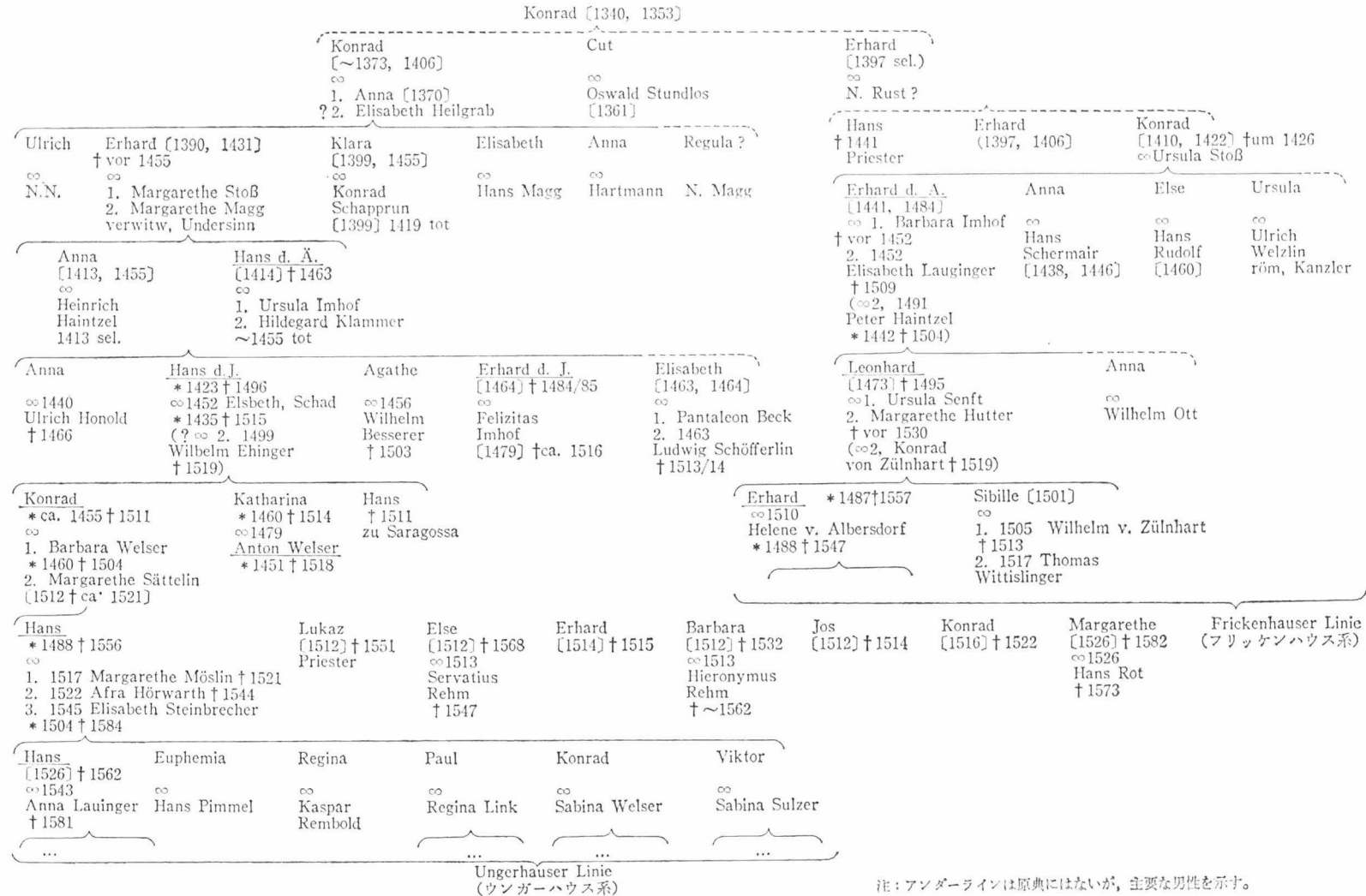
1 初代ハンス・フォーリンの時代

初代ハンス・フォーリン (Hans der Ältere, 1463年没) がフォーリン商事会社を代表する最初の大商人である。没年となった1463年には会社の代表経営者 (Oberhaupt) であり、同時に1442年にはメミンゲンの市長にも選ばれたことのある有力市民であった。歴代のフォーリン (Vöhlin) 家を代表し、事実上のフォーリン (Vöhlin) 商事会社の創設者としての評価を受けている¹⁾。

この初代ハンス・フォーリン (Hans Vöhlin) に至るまでの歴史は、それよりも百数十年もさかのぼって14世紀前半期から見るることができる。歴史上最初の記述としてみとめられているものは1340年のものである。スイスのザンクト・ガレン出身の家族として知られたこの最初の人物は1384年から86年の間に死亡し、その息子カール・フォーリン (Karl Vöhlin) は金細工師であったが、この人物も1396～98年の間以後史料からは消息が断たれている。その後フォーリン (Vöhlin) の名は、15世紀後半になってようやくアウクスブルク (Augsburg) に登場していることが確認されている²⁾。しかし、この系譜からはフォーリン商事会社 (Handelsgesellschaft Vöhlin) への直接的なつながりは今のところ確認されていない。

そのほか、1373年よりも前に、Cuntz Vöhlin という人物名がメミンゲンで塩関税納入リストに記載されている³⁾ ことから、フォーリン (Vöhlin) の系譜のいずれかの出身の人物が塩取引に従事していたことをうかがうことができる。このことは後段でみるように、当時のメミンゲンが塩取引上重要な地点に位置ししかもこの塩商品が当時の商業活動においてかなり重要な位置を占めていた

図 5-1 フォーリン家系図



注：アンダーラインは原典にはないが、主要な男性を示す。

出典：Raimund Eirich, *Memminger Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 174, 原図のまま掲載。

ことなどからみて、フォーリン商事会社前史を形成する重要な意義を持つが、しかしこの人物も、これから扱うフォーリン（Vöhlin）の系譜への直接的な結びつきはほとんど明らかではない。

フォーリン商事会社（Handelsgesellschaft Vöhlin）の経営史と直接結びつく系譜は、図5-1に示されているように、2つの家系つまり Vöhlin in Frickenhauser と Vöhlin in Ungerhauser である。この2家系は15世紀初頭にまでさかのぼって明らかにされ、16世紀初頭まで共同して商事会社の経営に参加している⁹⁾。したがって歴史上フォーリン（Vöhlin）商事会社を代表する人物とは、ほとんどこの2つの家系のいずれかからの出身の商人を示す、ということになるのである。

そのフォーリン（Vöhlin）商事会社の存在と活動が史料に証明されるのはようやく1453年になってからのことである。しかし商業活動自体はるかそれ以前に実施されていたことは間違いない。初代ハンス（Hans）につづく後出の初代エアハート（Erhard）が1453年にすでにニュルンベルクで活躍していることがその理由の1つである⁹⁾。いずれにしても15世紀中頃である。しかし、このハンス（Hans）の登場までに存在した人物の活動や「会社」との結びつき、等々については残念ながら明らかにすることはできない。おそらく A. ヴェスターマン（Westermann）や R. アイリッヒ（Eirich）も史料のなかにそれを説明する史実を見い出せなかったのであろうが、「会社」創設についても、同様に、まだほとんど推量の域を出ていないと言わざるをえない段階である。

したがって、会社創立の年代は、R. アイリッヒの推測にたよるほかはないが、15世紀初頭から中頃にかけて、つまり1430年代か40年代の初頭である⁹⁾。したがってそれ以後数十年にわたってそのまま Hans der Ältere、つまり初代ハンスが代表経営者であったわけである。

ところでこの初代ハンスの時代に、フォーリン（Vöhlin）商事会社はどのような歴史を示しているのであろうか。貿易活動地域や取扱った商品の種類の分析は後段におくとして、主として人的な結合などを追えば以下の通りである。一般的に初代ハンスの時代にすでに会社は、ラーフェンスブルクに拠点をおく

例の「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」と競合関係にあったことが、その時代の次のような史実からうかがえる⁷⁾。例えば、ハンス (Hans) がニュルンベルクで活動し、会社の存在が明らかにされた1453年の数年後の1456年にウィーン (Wien) に会社独自の支店が設立されている⁸⁾。このウィーン (Wien) には「大ラーフェンスブルク商事会社」の支店が設置されさらにハンスが活動していたニュルンベルクにも支店がおかれていた⁹⁾。したがって、このフォーリン (Vöhlin) 商事会社が上の「大ラーフェンスブルク商事会社」とかなり対抗していたことは疑いないのである。初代ハンスの時代のこの会社での活動については残念ながらそれ以上あまり知られていない。

ハンス (Hans der Ältere) 個人についての活動や財産状態をみると次の通りである。ハンスは後の注 (6) で述べた通り1414年～1419年に登場しているが、1422年当時におけるハンス (Hans) の財産は格別に大きなものではなかったと記されている。彼の納税額 (Steuerquote) は、わずか2～4 プフント・ヘラー (Pfund Heller) であった¹⁰⁾。しかし1450年の彼に対する課税は、財産5,623フローリン (fl.) に対してなされているから、税額そのものは明らかでないが、かなりの高額納税者になっていたものと思われる。この時に同時に課税されていたのは、同名の息子の、Hans der Jüngere, つまりⅡ代目ハンスが1,982フローリン (fl.) の財産に課税され、さらにⅡ代目ハンスの弟で、しかも兄のハンス以上に会社の活動に貢献し、父親の初代ハンスの後、会社に重要な働きをなした Erhard Vöhlin der Jüngere, つまりⅡ代目エアハートが8,690フローリン (fl.) の財産に対して課税されている¹¹⁾。つまりこの時にはすでにⅡ代目エアハート (Erhard) の方が会社創設者の初代ハンス (Hans) より多額の財産を所有していたことになるのである。さらに付け加えておけば、この時に初代ハンスの姉で、後に述べる Heinrich Hainzel と2度目の結婚をする、当時は未亡人となっていたアナ・フォーリン (Anna Vöhlin) も6,473フローリン (fl.) という高額の財産に課税されている¹²⁾。おそらくこれらの多くの血縁者の財産のほとんどは商事会社経営のために投資されていたはずだと推測されて

いる。

さらに、1462年度を対象とした課税記録が1463年のメミンゲン都市史料に見出しされており、これによって初代ハンス (Hans) の活動が裏付けられている。そこに扱われているものはワイン取引税であるが、このフォーリン (Vöhlin) 家関係でみると、初代ハンス (Hans der Ältere) が11プフント (Pfund)、上に紹介した次男のエアハート (Erhard der Jüngere) が14プフント (Pfund) の税金を納めている¹³⁾。これに明らかなように、1463年に死亡するまで、初代ハンスは商業活動に従事していたわけで、しかも血縁者のなかから本人をもうわまわる大商人が輩出しつつあったことも、この会社の活動がかなり活発化していたことを示している。

初代ハンス (Hans der Ältere) の後継者は、Erhard der Ältere、つまり初代エアハート (Frickenhauser 系 Vöhlin 家出身) であるが¹⁴⁾、しかし第Ⅱ世代に入る以前から会社にとって重要な人物がかなり外部から加わっていたことも、会社の発展にとって欠かせない要因であった。つまり、フォーリン (Vöhlin) 家が他の巨商・貴族 (Geschlechter, Patrizier) と婚姻関係を通して結びついたことや、従業員として会社に重要な貢献をした人物の台頭などである。すでに述べた初代ハンス (Hans) の姉のアナ (Anna) の2度目の夫は Heinrich Hainzel といい、彼は15世紀末にはこの地方では大都市にあたるウルム (Ulm) において、この会社を代表する指導的地位についている¹⁵⁾。この Hainzel 家との結びつきはほかでもみられ、初代ハンスの後継者となった初代エアハートの2度目の妻エリザベート (Elisabeth Lauginger) が夫のエアハートの死後再婚した相手がペーター・ハインツェル (Peter Hainzel) であり、上のハインリッヒ (Heinrich) の甥にあたる人物であった。この Peter も Heinrich と同じく会社の活動に深くかかわっている。1478年にはウィーン (Wien) に会社の商用のために滞在しており、1486年にはボヘミア (Böhmen) 地方で、Budweis の南、Krumau の近くで Veit Bogner と Niklas Branntweiner という人物によって誘拐され、120フローリン (fl.) の身代金を支払って釈放された、という記事が伝えられている¹⁶⁾。

そのほか、初代ハンス (Hans) の時代に活躍した人物にベッセラー (Wilhelm Besserer) とウルリッヒ・シェアマイヤー (Ulrich Scheirmair) がいる。W. ベッセラー (Wilhelm Besserer) は、初代ハンスの次女アガテ (Agathe) と1456年に結婚した人物で、1462年の段階では、3,000フローリン (fl.) の出資金を擁した出資社員として記録されており、ウルムを拠点に活動していた¹⁷⁾。この W. ベッセラー (Wilhelm Besserer) はこの時すでにウルムの都市貴族 (Patriziat) 階級に属していたが、やはりメミンゲンで商事会社を設立してフォーリン (Vöhlin) 会社のライバルとして活動していたベッセラー (Besserer) 家の1員でもあった。上に述べた、やはりウルムの貴族であった Hainzel 家の Peter と結婚した Ursula Besserer は Wilhelm の姪に当たっている。つまり後段でますます明らかになるように、当時の大商人・都市貴族はかなり相互の血縁的な結びつきを通して互いに結びついていたわけである。同様に、ウルムの都市貴族のメンバーであった Ulrich Scheirmair もフォーリン (Vöhlin) 会社との結びつきをもっていた。彼は、フォーリン (Vöhlin) 会社のウルムの支店長として活動しており、1469年には42プント (Pfund), 1499年には93プント (Pfund) 3シリング (β.) の税を支払っている¹⁸⁾。

このほかにも、各地の都市間あるいは同一の都市内における商人あるいは都市貴族間の血縁的な結びつきが、すでに初代ハンス (Hans) 以前の時代からなされていた。例えばフォーリン (Vöhlin) 家の家系図でも明らかのように、最も古いコンラート (Konrad) の子供でフリッケンハウス (Frickenhaus) 系の初代となった Erhard の妻 N. Rust はおそらく近隣都市ケンプテン (Kempten) 出身の都市貴族 Rist の出と推測されているし、ウンガーハウス (Ungerhaus) 系の初代コンラート (Konrad) の子供 Erhard は最初の妻が Margarethe Stoß であったが、その後再婚した相手は Margarethe Magg であり、彼女はメミンゲンでも大商人に属する Magg 家の出身であった。しかもこの両家の結びつきはそれだけにとどまらずに、彼の妹の Elisabeth はこの Margarethe の弟と、さらに末の妹の Regula はもう1人の Magg 家出身の人物と結婚するという、二重の結びつきをなしているものであった¹⁹⁾。この Ungerhaus 系の

Konrad の息子 Erhard の長男として、ここに扱っている初代ハンスが登場したのである。

ところでこの初代ハンスには妹アナ (Anna) がおり、上に述べた通りウルムの都市貴族 Haintzel 家に嫁いで、大商人との結びつきを濃くしていたのであったが、ハンス自らもその傾向を強める結婚を経験している。最初の妻は、イムホフ (Imhof) 家出身の Ursula であった。この Imhof 家は上の Haintzel 家と並んで、メミンゲンでも有力な商人であり都市貴族 (Geschlechter) であった。Imhof はもともとアウクスブルク出身であり、ニュルンベルクにも移住して活動する巨商であった。Imhof 家出身の商人が直接このフォーリン (Vöhlin) 商事会社で活動していたかどうかについてはきわめて疑わしいとされているが²⁰⁾、いずれにしてもフォーリン (Vöhlin) 家とイムホフ (Imhof) 家との結びつきは少なくともこの初代ハンスの時代にまでさかのぼれるのである。

初代ハンスの次の妻は Hidegard Klammer であるが、この Klammer 家は、商人というよりも行政府 (Ministerialität) 関係者を出している家系であった。しかしフォーリン (Vöhlin) 家とは商業取引を通しての血族関係になった家系である²¹⁾。

以上のように、メミンゲンの Vöhlin 商事会社が設立され、その活動が次第に発展に向った初代ハンスの時代は、フォーリン家の家系からみても、その系図が歴史に登場してからほぼ2~3代目にあたる時代であった。そしていわばこの創業期の時代に、フォーリン家は他のさまざまな有力貴族との結びつきを強めたのであった。R. アイリッヒ (Eirich) によれば²²⁾、フォーリン家と血縁関係となった有力家族は、イムホフ (Imhof)、ベッセラー (Besserer)、ハインツェル (Haintzel)、ディーター (Diether)、シェアマイアー (Schermair)、クラマー (Klammer) などであり、さらに Besserer のようにそれらの多くが会社への出資者となっていたのである。初代ハンスはそうしたいわば恵まれた環境のなかで、着々と自らの社会的地位をも高めていった。1437年には都市社会施設管理者となり、1441年には大商人ツunft・マイスター (Großzunftmeister) になり、1442年にはメミンゲン市長 (Bürgermeister) となってい

る。その後上に述べたように、1463年に会社の代表経営者として死亡するまで活躍していたことになるのである。

当時、「会社」として重要な人物はけっしてこの初代ハンス (Hans) だけであったわけではない。しかし、フォーリン商事会社の創成期にその発展の基盤ともなる他の大商人との結びつき、社会的名声の高揚、等々の面でこの初代ハンス (Hans) の功績は高く評価されなければならないであろう。そして彼の時代に、すでに少なくとも「会社」の営業勢力圏はメミンゲンだけでなく、ウルムや、さらにはニュルンベルク、ウィーンなどにまで伸張したのである。

注

- 1) フォーリン商事会社の創立者という指摘は Günther Bayer による説明では明確に Hans の名が示されているが、A. Westermann と R. Eirich では、おそらく創立者であろう、あるいは創立者に間違いない、という表現にとどまっている。Westermann, Askan, Memminger Handel und Handelsgesellschaft, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 19.
- 2) Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 119. フォーリン家の St. Gallen からメミンゲンへの移住は14世紀のうちであった。Bayer, Günther, *Memmingen in historischen Bildern*, 1983 S. 17.
- 3) Bayer, Günther, a.a.O., S. 120.
- 4) Bayer, Günther, a.a.O., S. 122.
- 5) ebenda.
- 6) この初代ハンスがはじめて史料に登場するのは1414年である。そのときには都市メミンゲンから年々39 Pfund・Heller の年金を受け取り、さらに1419年には大商人専用サロン (Geschlechtertrinkstube) の勘定帳に名前が印されている。Eirich, R., a.a.O., S. 123. 会社創設の推測についても同じく、123ページ参照。
- 7) Eirich, R., a.a.O., S. 123.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 122.
- 9) 拙稿、「中世ラーフェンスブルクの商事会社と貿易活動」、『桜美林エコノミックス』第11号, 108頁参照。
- 10) Eirich, R., a.a.O., S. 142.
- 11) ebenda.
- 12) ebenda.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 125.

- 14) ebenda.
- 15) ebenda.
- 16) Eirich, R., a.a.O., S. 280.
- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 125. ただし, W. Besserer とフォーリン会社との結びつきはさらに数十年前にさかのぼる。すでに1440年より彼はフォーリン会社の従業員として, 入社している。Westermann, Askan, Memminger Handel und Handelsgesellschaft, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 20.
- 18) Eirich, R., a.a.O., S. 125.
- 19) Westermann, Askan, a.a.O., S. 20.
- 20) Eirich, R., a.a.O., S. 155.
- 21) Eirich, R., a.a.O., S. 288.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 142.

2 初代エアハート・フォーリンの時代

初代ハンス (Hans der Ältere) ・フォーリン (Vöhlin) の死後, フォーリン商事会社の代表には, 1462年から1465年の間メミンゲンの大商人ツunft (Großzunft) に属していた¹⁾, 近隣都市ケンブテン (Kempten) 出身の Bernhard Ossenbrey なる人物がなったとも記されてもいるが²⁾, しかし「会社」の第Ⅱ世代として実際に初代のハンスを引き継いだ者はフリッケンハウザー (Frickenhauser) 系のエアハート (Erhard Vöhlin der Ältere), つまり初代エアハートであった。彼はフォーリン家系図 (前項参照) でも明らかな通り³⁾, 初代ハンスの属しているウンガーハウス (Ungerhauser) 系ではなく Frickenhauser 系フォーリン (Vöhlin) の血をひき, 初代ハンス (Hans) と同じく会社の設立以来長い間, 商業活動に従事していた⁴⁾。ハンス (Hans) を引き継ぐ前の1453年にすでにニュルンベルクで会社の取引に従事していたし, さらにそれ以前の1441年には“大商人サロン (Geschlechtertrinkstube)”の勘定帳簿にその名前が記入されていた⁵⁾。そのことはすでに当時, 商人として大きな名声を得ていたことを意味する。ニュルンベルクでは彼は会社の支店長 (Faktor) の地位にあった。1459年にはメミンゲンの市長にも任命されている⁶⁾。

初代ハンス (Hans) が結婚を通して他の巨商や都市貴族との結合を深めてい

ったと同様に、この初代エアハート (Erhard) 自身もその傾向を示している。最初の妻は、バーバラ・イムホフ (Barbara Imhof) である。Imhof 家とはすでに初代ハンスが最初の妻 Ursula Imhof と結婚した時以来、結びつきがあったのであるが、初代エアハートの妻 Barbara は、1441年以來メミンゲンの都市貴族商人に加えられていた Balthasar Imhof の妹であった点で、この結びつきは一層強いものとなった⁷⁾。さらに1452年に Barbara が死ぬと、再婚の相手にはエリザベート (Elisabeth Lauginger) がなっている。彼女はアウクスブルク (Augsburg) の都市貴族 (Geschlecht) Lauginger の出身である。この Lauginger 家も各都市の大商人の家柄との血縁が深く、フッガー (Fugger) やウェルザー (Welser)、ヘッヒステーター (Höchstätter)、ハインツェル (Hainzel) などと婚姻関係で結ばれている商人貴族である⁸⁾。つまり初代エアハート (Erhard) も、当時の商業界に君臨する大商人家族、Imhof と Lauginger の両方に結びついてその活動を促進させていたのであった。

他の商人家族や貴族家族との血縁による結びつきは、初代エアハートの妹のアナ (Anna) にもみることができる。妹の Anna は Hans Schermair と結婚したのであったが、Hans の兄の Ulrich Schermair はフォーリン会社のウルムにおける支店長 (Faktor) として活躍していた人物であった。つまり Anna を通して Ulrich Schermair とエアハートは義兄弟であったことになる⁹⁾。そして、この Ulrich Schermair も上に述べた Wilhelm Besserer や Heinrich Haintzel と同様にウルムの有力な貴族家族の一員なのであった¹⁰⁾。

初代エアハート (Erhard) の商人としての活動は、15世紀後半期におけるニュルンベルクでの貨幣取引の事実がある¹¹⁾。つまりこの時代フォーリン (Vöhlin) は金融業務 (Bankier) としても活躍していたことになる。ただそうした商業活動の一方で、このエアハート (Erhard) がかなりの資本を土地・家屋の不動産所有に投資していたことも事実である。たとえば1450年の彼の課税対象財産額は8,690フローリン (fl.) で、フォーリン (Vöhlin) 家最大の富裕者であった¹²⁾。その中にどれだけの不動産部分が含まれていたかは明らかではないが、これ以後会社の利益の増加に比例して土地への投資が増加しているのであ

る。つまり、1460年から64年の間に6,065フローリン (fl.) 以上が土地に投下されており、しかもその大部分は会社による商業活動の利益からなのであった¹⁵³⁾。その一例として、1460年に購入された、フリッケンハウゼン (Frickenhausen) 村におけるフォーリン (Vöhlin) 家の城館 (Schloß) がある。この館は、このエアハート I が1460年に娘婿の Hans Diether と義兄弟の娘である Ursula Rudolf からおよそ3,200フローリン (fl.) で買い入れたものである¹⁴⁾。さらに1462年にも Hans Welzlin なる人物から1,200フローリン (fl.) で Vöhringen という地域の土地を買い入れている。この人物は、国王庁の高級官吏 (Kaiserlicher Kanzler) であり、しかもエアハート I の妹の夫 Ulrich とほぼ同一人物とみられている Ulrich Welzlin の兄弟であったから¹⁵⁾、エアハート (Erhard) I は機会をみては土地所有に傾倒していったわけである。

こうした土地・不動産への投資はそのあとも一層すすめられている。翌年の1463年には再び Vöhringen の土地を222フローリン (fl.) で買い入れているし、1471年には、Kirchberg の領主 (Herzog) から、その Vöhringen の土地拡張分1,300フローリン (fl.) を支払って買い入れている¹⁶⁾。さらに1480年、81年にも、2、3の分散した土地を購入し16フローリン (fl.) を支出している。さらにこれらとは別に、1464年から74年にかけて少なくとも1,453.5フローリン (fl.) 及び45フローリン (fl.) を土地購入のために支出している¹⁷⁾、1465年には、フォーリン (Vöhlin) 会社への負債の支払いのために加わった Dankelsried なる人物と共同でなされた、Rechberg なる土地の買い入れもなされている¹⁸⁾。初代エアハート (Erhard) の政治面における活動について R. アイリッヒ (Erich) はあまり詳細な報告を行っていない。上に述べたように1459年にメミンゲンの市長に就任して以来、死亡する1484年の数年前までこの職にあったとだけ記されているが、A. ヴェスターマン (Westermann) の説明では、1450年に最初に都市参事会 (Rat) に席を占めてから、1479年の5月迄、1456年だけを除いたすべての年にこの都市の高官の地位に就いていた¹⁹⁾。13人裁判官 (Dreizehner) のメンバーに10回、都市高級司官 (Stadtammann) に4回と14年間を司法関係 (Gerichtsdienste) に貢献し、その残りの年月を行政官として、

しかもその長である市長 (Bürgermeister) には6回にわたって、つまり1459年、1463年、1465年、1468年、1471年、1477年に就任していたのである²⁰⁾。したがって、フォーリン (Vöhlin) 家の代々の商人のなかでもきわめて政治的に偉大なる功績を残した人物であったと言わなければならないであろう。とくに前任者のハンス (Hans) が活躍中にはその同僚として、ハンス (Hans) の死後はそのままフォーリン (Vöhlin) 家の活動をささえた中心人物なのであった。

注

- 1) この Großzunft には Vöhlin 家の商人だけでなく、Besserer など大商人の多くが属していた。Westermann, Ascan, Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 19.
- 2) Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 124.
- 3) Eirich, Raimund, a.a.O., S. 125.
- 4) 初代エアハートがかなりの資産を有する、しかもかなり早くからの有力株主社員 (Teilhaber) であったことは、ヴェスターマンによっても確かめられている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., Nr. 6, S. 42.
- 5) Eirich, R., a.a.O., S. 124.
- 6) ebenda.
- 7) Eirich, R., a.a.O., S. 125. 同じ Imhof 家ではあっても、初代ハンスの妻 Ursula と初代エアハートの妻 Barbara とは直接的な結びつきはない。しかしこの両方の Imhof 家とも他の大商人との血縁的つながりを持っている。Eirich, R., a.a.O., S. 156.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 160.
- 9) Ulrich Schermair は 1469年に42プント、1499年に93プント9シリングの税金を納めている。Eirich, R., a.a.O., S. 125.
- 10) ebenda.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 126.
- 12) ebenda.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 127.
- 14) Eirich, R., a.a.O., S. 126. さらに A. ヴェスターマンによれば、この館の売りの主の Hans Rudolf は近隣都市 Kempten の市民であり、購入されたものは建物だ

けでなく、Daxberg 近郊 Seebach の館やその所有に付随した諸権利、さらに Frickenhausen 村での Veit 教会と Moritz 教会の領主権とが含まれているものであった。Westermann, A., Die Vöhl in zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 42.

15) Eirich, R., a.a.O., S. 126.

16) ebenda.

17) ebenda.

18) ebenda.

19) Westermann, A., Die Vöhl in zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 42.

20) ebenda.

3 第2代ハンス・フォーリンの時代

上にみたエアハート (Erhard) の前の初代ハンス (Hans der Ältere) の長男がこのⅡ代目ハンス (Hans) (以下ハンスⅡ) である。R. アイリッヒ (Eirich) の説明によれば、初代ハンスの1463年の死後このハンスⅡがフォーリン商社会を代表したともあるが、別の個所では会社の指導者 (Leiter) に登用されたのは、初代エアハートの死後であったとの説明があり¹⁾、初代ハンスの後には上にみた初代エアハートの時代となり、その後がこのⅡ代目のハンスの時代であったと考えることが妥当であろうと思われる。

このハンス (Hans) Ⅱが史料に登場したのは1450年で、その時に1,892フローリン (fl.) の財産に課税されている²⁾。そして翌年の1451年には Elisabeth Schad と結婚した。彼女もやはり貴族の出身で、その家族はメミンゲンからさほど遠くないビベラッハ (Biberach) の町の有力貴族 (Patrizier) であった³⁾。当時の彼女の結婚に際しての持参財産には、馬100頭、持参金1,000フローリン (fl.)、さらに後に親からの相続金600フローリン (fl.) が計上されているから⁴⁾、やはりここでも有力な貴族間の血縁的な結びつきの例を確認することができる。

その後1454年以来このハンス (Hans) Ⅱは大ツunft (Großzunft=商人ツunft) のメンバー (Geselle) として活躍しており、さらに1460年にはこの都市の公的な役職に就任し、13人裁判官 (Dreizehner Gericht) の1人となっ

ている。ハンス (Hans) II の高官就任はこの後1470～72年、1477年にもつづき、やはり彼がメミンゲンにおいて社会的にかなり重要な人物であったことがうかがわれる⁵⁾。

ハンス (Hans) II は死亡する1496年まで、商業活動に従事していた。それは、フォーリン (Vöhlin) 商事会社への呼称が彼の死の直前まで“die Gesellschaft, die des Hans Vöhllins (ハンス・フォーリンの会社)”として印されていることにも示されている⁶⁾が、同時に彼の活動が各地において確認されていることにも由来する。例えば、当時南ドイツでは重要な大市取引が開催されていたノルトリンゲン (Nördlingen) の大市にその足跡が印されている。もともとフォーリン (Vöhlin) 家の商人はかなり以前からこの大市取引に参加していたことは確かなのであるが、しかしノルトリンゲン (Nördlingen) のメッセ (Messe) のそれ以前の史料 (Messe-standbüchlein) にその名が見出されているわけではない⁷⁾。ノルトリンゲン (Nördlingen) の大市に関する研究として名高い Heinrich Steinmeyer の著作によれば、登場しているのは Hans Vöhlin で1469年のメッセである⁸⁾。この Hans は当然ながらハンス II のことである。

後に述べるように、フォーリン (Vöhlin) 商事会社はほぼ1470年代頃より会社の隆盛期に入るが、この時代は同世代にそれだけ有能な商人がほかにも活躍していたことを意味する。フォーリン (Vöhlin) 家の家系図にみえるように、ハンス (Hans) II の弟の第2代エアハート (Erhard) などはその代表である。そうした同族の商人の活動に支えられて、ハンス (Hans) II は少なくとも12年間、1496年に死亡するまで会社の代表なのであった⁹⁾。

ハンス (Hans) II の活動は商業活動だけでなく、会社が1490年以降経営に着手した鉾山経営にもその活動が知られている¹⁰⁾が、それらは、フォーリン (Vöhlin) 家の商人と当時の国王 (Habsburg 家) との関係がかなり緊密であり、また政治的にもかなりの活動をなしていたことを意味している。たとえば、1483年にハンス (Hans) II は都市メミンゲンの要請によってインスブルック (Innsbruck) のシギスムント侯 (Herzog Sigismund) のところに使者として遣わされているし¹¹⁾、1486年にはシュワーベン (Schwaben) 都市同盟の準備

会議にメミンゲンの都市代表として出席している¹²⁾。さらに国王とのとりわけ身近な関係は、1485年にフリードリッヒ (Friedrich) III世がメミンゲンを訪問したときに、Elisabeth Lauginger の屋敷へ、つまり初代エアハート (Erhard) の未亡人の屋敷に宿泊していった事実にも示されている。このとき皇帝は350頭の馬を保有していたといい、R. アイリッヒの推測では、メミンゲンの滞在はその馬の取引のためであったろうとされている¹³⁾。

ハンス (Hans) II が1496年に死んだ後、妻の Elisabeth Schad はさらにその後20年の間活躍し、死亡したのは1515年のことである¹⁴⁾。このハンス II の死後フォーリン (Vöhlin) 会社の指導権はハンス II の息子のコンラート (Konrad) とコンラートの妹の夫アントン・ウェルザー (Anton Welser) の手に移って、新しい時代に入るわけであるが、その前にハンス II と同時代の代表的商人でありかつ実の弟でもあったエアハート (Erhard der Jüngere=エアハート II) の活躍にも触れておきたい。

エアハート (Erhard) II は、兄ハンス (Hans) II と共に会社の営業メンバーとして活躍した。とくに妹 Agathe と結婚した、つまり義兄弟にあたる Wilhelm Besserer が死亡した (1503年) あとの活躍が注目されている¹⁵⁾。アウクスブルク (Augsburg) 出身の Felizitas Imhof と結婚し、フォーリン (Vöhlin) 家としては、初代エアハート、初代ハンスに次ぐ有力貴族 Imhof 家との血縁者となった¹⁶⁾。彼はメミンゲンに滞在してフォーリン (Vöhlin) 会社の活動に従事しており、1464年に貴族商人用居酒屋のメンバーとしての証明がその“大商人サロン”の勘定書 (Abrechnungsbüchern der Geschlechtertrinkstube) で確認されている¹⁷⁾。Felizitas Imhof との結婚はこの時代であった。彼女は、初代ハンス (Hans der Ältere) の妻 Ursula Imhof の姪にあたっている。

この Felizitas の兄の Andreas Imhof がフォーリン (Vöhlin) 会社のケルン (Köln) の支店長としての地位にあったことから、しかも彼女の父親のコンラート (Konrad) がメミンゲンの Antoniter Präceptor と交友関係を結んでいることなどから¹⁸⁾、両家のつながりはけっして血縁的なものばかりではなかったことになる。

エアハート (Erhard) II は政治面でも頭角を表し、1467年以後種々の政治的地位に就いている。1467年以来数年間は13人裁判官メンバー (Dreizehner) となり、同時に都市参事会メンバー (Ratsherr) でもあったが、さらに1472年には市長にもなっている¹⁹⁾。彼が市長の時代は、メミンゲン都市内のツunft (Zunft) と大商人層 (Geschlecht) との対立のあった時代であった。その後1485年にエアハート II が死亡すると同時に、彼の妻 Felizitas は出身地のアウクスブルクに隠退したか²⁰⁾、しかしその2年後の1487年にはアウクスブルクの納税者リストに彼女の名が掲載されており、彼女が何らかの活動をなしていた事を推測させるものとなっている。いずれにしても、彼女が、メミンゲン出身のフォーリン (Vöhlin) 家の名を名のるアウクスブルク在住の最初の人物、ということになった²¹⁾。

それではこの第II代ハンス (Hans) (ハンス II) と第II代エアハート (Erhard) (エアハート II) の時代のフォーリン (Vöhlin) 商事会社の活動をどのように跡づけることができるであろうか。ハンス II の時代の会社の営業状態を示すものに、当時メミンゲンの都市当局がフォーリン会社から徴収していた関税額 (Zoll) がある。1488年に徴収した額は、102プフント・ヘラー (Pfund Heller) であった²²⁾。そして商品売買だけでなく、貨幣取引を行っていた例として、1488年に、ヴェルテンベルク (Württemberg) 伯 (Grafen) に対して信用貸付を行っていたこと、さらにこの信用貸付がアントワープ (Antwerpen) とウルム (Ulm) を経由して清算されたこと、等々がわかっている²³⁾。さらにこの時代のウルムには、Ludwig Reihing および Heinrich Hainzel が「会社」の代表者となっていた。この Heinrich とは、初代エアハートの再婚の相手となった Elisabeth Lauginger がエアハートの死後、1491年に再婚した相手 Peter Hainzel の兄弟である²⁴⁾。したがってこのことも、Hainzel 家の人々とフォーリン (Vöhlin) 家の人々が会社の活動を通してかなり密接に結びついていたことを示すものとなる。このウルムで活躍した Hainzel がアントワープ (Antwerpen) との貨幣取引に従事していたことも報告されているし、また、1488年に会社の代表として48.5フローリン (fl.) を領収したことも伝えら

れている²⁵⁾。

ウルムの支店にはこの時代会社のために活動していた Hainzel のほかに、上にみた Ludwig Reihing がいたが、そのような支店経営を中心とする営業活動が会社の一般的な活動方法であった。アントワープにも商品を送っているが、それもそうした活動の一環であるといえる。そしてこの Ludwig Reihing も 1487年に Veronika Imhof と結婚している²⁶⁾。つまりフォーリン (Vöhlin) 家の商人がかなり深く関わっているイムホフ (Imhof) 家との結びつきは、それだけ会社をめぐる商人間相互の結びつきを深くしていることを示すものである。そしてさらにそれ以前の1479年には、この世代の次の代にあたるハンス (Hans) II の子供達の時代に大きな力を与えるウェルザー (Welser) 家との結びつきを実現していた。ハンス II の娘カタリーナ (Katharina) とアントン・ウェルザー (Anton Welser) との結婚である。この結びつきは後でみるように、その後のフォーリン (Vöhlin) 会社に大きな貢献をなすものとなる。ウェルザーとフォーリンとの血縁的な結びつきは、そのほかに2組の婚姻関係の成立が認められるが²⁷⁾、いずれにしてもハンス II, エアハート II の次のコンラート (Konrad) の世代にこの中心的結合が強力に展開されることとなっていくのである。

フォーリン (Vöhlin) 商事会社のこの時代 (1470~90年頃) の足跡はかなり広い範囲でみとめられる²⁸⁾。1478年にはイタリア (Italien) での活動が証明されている。おそらくベニス (Venedig) での取引であろうと推測されている。1480年にはスペイン (Spanien) で、ザラゴッサ (Saragossa) とヴァレンシア (Valencia) での活動が伝えられており、さらにこの頃までに北ヨーロッパ地域への進出もなされたとみられている²⁹⁾。

1483年にはケルン (Köln) での取引が記録されている。それによれば、Heine Van Haelen なるケルンの人物がハンス II の時代のフォーリン会社のウルム産の商品 (Fardel) 11個をベルゲン・オブ・ソーム (Bergen op Zoom) の地まで運びこんでいる。そしてそれはおそらくフランダース (Flandern) の港に送られたものであったろうとみられている³⁰⁾。

そのほか、ローマでの会社の活動の一つとして、メミンゲン出身の Dr. Veit Mahler なる人物がローマの法王庁 (Kanzlei) に35.5ドゥカーテン (Dukaten) の支払いのために出向していることが報告されているし、さらにアントワープでも貨幣取引を行なっている³¹⁾。

そのほかこのイタリア方面ではさらに、1488年と1490年にミラノの領主 (Herzog von Mailand) がフォーリン (Vöhlin) 会社に対して通行証を発行している³²⁾。また、1493年にはベニス (Venedig) の総督がフォーリン (Vöhlin) 会社を、ミラノの領主の Ludovico Maro に対して、長年にわたって商業活動に従事している会社として、推薦している事実もある。上の通行証にはフォーリン (Vöhlin) 会社の商人として Stebacher と Velzer なる人物名も登場している³³⁾。ベニス (Venedig) の当時のフォーリン会社の支店長は Hans Stebenhaber であったから、おそらくこの2人の人物名は Stebenhaber と Welser であろうと推測されているが³⁴⁾、いずれにしても後段でみるように会社のミラノやベニスでの活動をよく示すものである。さらに1494年には Peter Stüdlin と Anton Besserer の名前もあがっている³⁵⁾。そのほかミラノ (Mailand) では、都市ミラノの貨幣鑄造 (Mailänder Münze) をめぐった取引も行なっている。たとえば1492年にはミラノの支店長 Anton Fungler がミラノ領主の貨幣鑄造所長に債務の支払いを要求している³⁶⁾。またそれ以前からミラノ周辺地域からはフォーリン (Vöhlin) 会社はビロードなど布製品も買い入れていた。そのほかマインツ大司教のもとで、会社の布 (Gewand) 2 バレン (Ballen) が盗難にあったことが伝えられており、当時会社がマインツ (Mainz) でも活動していたことが示されている³⁷⁾。

そのほかフォーリン (Vöhlin) 会社の活動は、オーストリア (Österreich)³⁸⁾ やスイス (Schweiz) の各地でも展開されていたが、それらの足跡の多くは1490年代に入った、この次のコンラート (Konrad) の世代に属するものが多い。1490年以降は、とくにオーストリア (Österreich) のチロル (Tirol) の銀山での活動が活発化し、会社が金融業と同時に鉱山経営にも進出していたことを裏付けている³⁹⁾。

このハンス (Hans) II の時代に活躍した商人は、上にあげた弟のエアハート (Erhard) II のほかに Frickenhauser 系の初代エアハートの息子レオンハート (Leonhard) もいた。レオンハート (Leonhard) は、1473年に初めて史料にその名が確認され、1476年には上にもみた“大商人サロン”の勘定簿 (Abrechnungsliste der Gesellschaft zum Goldenen Löwen) に名前が載せられていることから⁴⁰⁾、この時にはかなりの地位と名声とを博していたことが想像できる。彼はこの大商人のグループに1495年に彼が死ぬまで所属していた。

レオンハート (Leonhard) は Ursula Senft と結婚している。それははやくとも1479年より前ではなかったとみられているが⁴¹⁾、その後彼女が死んだ後、1490年に Margarethe Hutter と再婚している。この Margarethe Hutter も上にみた例と同様に、大商人・貴族の家系の出身で、妹は Jörg Besserer なる人物つまりベッセラー (Besserer) 会社の創設者、と結婚しており、父親の Jörg Hutter もニュルンベルクで商人として活躍していた人物であった⁴²⁾。つまりここでも、フォーリン (Vöhlin) 会社はメミンゲンでも有力な Besserer 会社との血縁的なつながりをなしていたことになる。ただレオンハート自身は公的な役職にもつかず、1479/82年に「13人裁判官」の1人に就任していただいだけであった⁴³⁾。しかも彼は、1494年にはアウクスブルクに移住、その他で市民権を得ておおよそ1年間を過ごしてまもなく他界したから、晩年はフォーリン (Vöhlin) 会社の活動にはほとんど何らの役割も演じていなかったといえる。ただ彼の義理の母親の Elisabeth Lauginger は上にみたようにメミンゲンでも有力な貴族であり、アントン・ウェルザー (Anton Welser) とII代目ハンス・フォーリン (Hans Vöhlin) の後見人として1491年には Peter Hainzel von Schwet と結婚して、やがてアウクスブルクに移住したため、フォーリン家とアウクスブルクとの結びつきがこれで一層促進されることとなった。レオンハートも、彼のアウクスブルクでの後見人、Anton Lauginger の隣に住居をかまえていた⁴⁴⁾。

レオンハート (Leonhard) の死は、上にみたように1495年と推測されているが、その理由は、アウクスブルクの徴税者リストにも、メミンゲンの“大商人

サロン”の勘定書リストの上からもその名前が消えているためであるが⁴⁵⁾、未亡人となった Margarethe は1497年の「大商人サロン勘定書リスト」にその名前が確認され、レオンハート (Leonhard) の死後その席を継いでいることがうかがわれる⁴⁶⁾。なお、この Margarethe は、1500年になると Konrad von Zünhart という騎士身分の人物と結婚する。

このハンス (Hans) II の前時代にフォーリン (Vöhlin) 会社に貢献した人物としてヴィルヘルム・ベッセラー (Wilhelm Besserer) がいたが、この人物の息子がすでにこの時代にフォーリン会社に働いていた事が明らかとなっている。上にみた1488年のマインツの大司教の2パレンの布の盗難の記述によってである。そして同時にこの時代にそれまで活躍したハンス (Hans) II の義理の弟であったこの Wilhelm Besserer はしだいに会社から遠のき、1492年には自分の出資金 (Einlage) 3,000フォーリン (fl.) を引き出すことを会社に通告、それをめぐって会社との対立が生じたことなども伝えられている⁴⁷⁾。対立の結果、W. Besserer の会社からの脱退は実際に行なわれているが、しかし上に述べた彼の息子がどのくらい後まで会社で活動をつづけていたかについては明らかではない⁴⁸⁾。

以上のように、ハンス (Hans) II の時代には、弟のエアハート (Erhard) II やレオンハート (Leonhard)、さらに義理の弟の W. Besserer などが活躍していた時代であった。すでにみたようにメミンゲンの市長職はこの時代、エアハート I とエアハート II によってほぼ独占的に交互に世襲されていたとって間違いはない。中世都市の商人貴族支配の典型的姿とも言える時代であった。そして、このハンス (Hans) II の死亡した90年代にフォーリン (Vöhlin) 商事会社は、人的にも営業分野においても一段と新しい時代をむかえることになる。そしてそれを継いだものはハンス (Hans) II の息子コンラート (Konrad) なのである。

注

- 1) Eirich, R., *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 129.
- 2) Eirich, R., a.a.O., S. 128.

- 3) ヴェスターマンの論文では, Schad との結婚の年は1451年となっている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 38.
- 4) Eirich, R., a.a.O., S. 128.
- 5) Eirich, R., a.a.O., S. 128 および Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 38.
- 6) Eirich, R., a.a.O., S. 128.
- 7) ebenda.
- 8) Steinmeyer, Heinrich, *Die Entstehung und Entwicklung der Nördlinger Pfingstmesse im Spätmittelalter mit einem Ausblick ins 19. Jahrhundert*, Inaugural-Dissertation zur Universität München, 1960, S. 90. このハンスⅡの入市への登場は, Nördlingen の Stadtarchiv, Messestandbüchlein 1469年に見出されている。この南ドイツの通商上重要な位置にあったノルトリンゲンの入市は1219年に開始され, 15世紀には隆盛をほこっていた。Zipperer, G.A., *Nördlingen*, Verlag F. Steinmeier, 1979, S. 52-54.
- 9) Eirich, R., a.a.O., S. 137.
- 10) フォーリン会社が進出した地域はオーストリア・チロルの銀山であった。そこにハンスⅡの名前が印されている。Eirich, R., a.a.O., S. 131.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 129 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S.38.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 129. ヴェスターマンの説明では, その会議の開かれた場所は Eßlingen であった。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 38.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 129.
- 14) この Elisabeth Schad は Hans Ⅱの死後, 1499年頃に Wilhelm Ehinger と結婚したことが不確実ながら伝えられているが, この Wilhelm Ehinger は, R. アイリッヒ (Eirich) による Ehinger 家系図にも示されていない人物であるが, ウェルザー企業と遠く西インド諸島まで足跡を印し, 15-16世紀にメミンゲンでも大きな活躍をなした Ehinger 家出身の一員に間違いない人物であろうと思う。Eirich, R., a.a.O., S. 170 及び, 拙稿「中世コンスタンツの貿易商人エーインガーについて」『桜美林エコノミックス』第9号, 1980年, 95ページ以下参照。
- 15) Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 2, S. 20.
- 16) Eirich, R., a.a.O., S. 156.

- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 127.
- 18) ebenda.
- 19) Eirich, R., a.a.O., S. 127. ヴェスターマンの論文にはより詳しい報告がなされている。彼が市長職にあったのは5回, 1472年, 74, 76, 78, 80年であった。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 36.
- 20) Eirich, R., a.a.O., S. 128.
- 21) ebenda.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 129.
- 23) ebenda.
- 24) ebenda.
- 25) Eirich, R., a.a.O., S. 130.
- 26) Eirich, R., a.a.O., S. 156.
- 27) Eirich, R., a.a.O., S. 162.
- 28) Eirich, R., a.a.O., S. 129 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37.
- 29) Eirich, R., a.a.O., S. 129.
- 30) ebenda.
- 31) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37 及び Eirich, R., a.a.O., S. 130.
- 32) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37.
- 33) Eirich, R., a.a.O., S. 131.
- 34) Eirich, R., a.a.O., S. 130.
- 35) Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3., S. 17.
- 36) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37.
- 37) Eirich, R., a.a.O., S. 131.
- 38) ヴェスターマンの論文には, オーストリア・リンツでの大市にもメミンゲンの商人が多数参加していたとある。Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 12.
- 39) Eirich, R., a.a.O., S. 131. ただしヴェスターマンの説明でも, このチロルの鉞

山への会社の介入も詳細についてはほとんど明らかにされていない。ただ、このチロルへの介入がフォーリン会社の貨幣取引の大きな刺激となったことは間違いないと述べている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37.

- 40) Eirich, R., a.a.O., S. 137.
- 41) ebenda.
- 42) ebenda.
- 43) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 6, 9. Jg., S. 43.
- 44) このアウクスブルクへの移転にあたって、レオンハートは40フローリン (fl.) の税をアウクスブルクに支払っている。市民権の取得のためであると思われる。Eirich, R., a.a.O., S. 138.
- 45) Eirich, R., a.a.O., S. 138 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 43.
- 46) Eirich, R., a.a.O., S. 138.
- 47) Eirich, a.a.O., S. 131 および158-159及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, 9. Jg., S. 37.
- 48) Eirich, R., a.a.O., S. 131.

4 コンラート・フォーリンの時代

1496年にハンス (Hans) II が死んだ後、フォーリン (Vöhlin) 商事会社の指導権は、息子のコンラート (Konrad Vöhlin) に移った。コンラート (Konrad) は不確実ながら1455年生れであるから、この時およそ41歳であったが、この時代会社の実際の運営は彼のほかに、彼の妹 Katharina の夫つまり彼にとっては義理の弟にあたるアントン・ウェルザー (Anton Welser) があたっていた¹⁾。つまり、メミンゲンの代表的商人家族とアウクスブルクの巨商ウェルザー (Welser) との共同の会社経営が事実上、このコンラート (Konrad) の時代に実現したのである。アントン・ウェルザーの誕生年は1451年であるから、コンラート (Konrad) よりも4歳年上であった。この2人が1490年代以後の会社の発展の中枢となったのである。

コンラート (Konrad) は1455年頃に生まれ、R. アイリッヒ (Eirich) によるフォーリン家系図で見れば、Anton Welser の妹の Barbara Welser と結

婚した。この結婚の年は明らかではないが、子供の年などからみて1480年前後と思われる。それにしても、フォーリン (Vöhlin) とウェルザー (Welser) の兄妹同士が結婚したのである。商取引と血縁のかたい結びつきを示すものである²⁾。ただ、この結婚と企業との結びつきを重視して、すでに1473年にウェルザー (Welser) との企業合併、つまりウェルザー・フォーリン会社 (Kompanie) が設立されたという Nübling による説は、R. アイリッヒによってむしろ否定的にみられており³⁾、その可能性はうすいが、しかし、それぞれ商業取引に活動していたことだけは間違いないであろう。そして、上にも再三引用されている「大商人サロンの勘定書リスト」にこのコンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) の名前はようやく1487年に初めて登場し⁴⁾、以来定期的ないわば常連として名を連ねているので、ようやくこの頃にメミンゲンにおいての彼の社会的名声も定着してきたように思われる。その後メミンゲン市の公的な地位にも就任し、1495年をかわきりに、1497年には市参事会メンバー (Ratherr), 1502年には市長職 (Bürgermeister) にも就任する。しかもこの市長職にはその後1511年の没年まで何回も選出されている⁵⁾。そのほか、シュワーベン (Schwaben) 都市同盟の同盟会議 (Bundesrat) にメミンゲン市代表として出席する、という経歴も有している。

ところで、R. アイリッヒ (Eirich) の作成したフォーリン家系図でみれば明らかのように、コンラートの妹の Katharina がアントン・ウェルザーと結婚したのは1479年のことであった。そして、ウェルザー企業との合併はそれからおよそ20年後、1490年代の末であるとみられている。上にみた1473年を両企業の合併の年とみた説は A. ヴェスターマン (Westermann) によっても完全に否定されている。ヴェスターマンは、この Vöhlin と Welser の合併の年を1498年と明記し⁶⁾、この年にフォーリン (Vöhlin) 企業がアントン・ウェルザーとルカ・ウェルザーの兄弟がアウクスブルク (Augsburg) に設立したウェルザー (Welser) 企業に合併 (Fusion) したとしている。これによって、1497年には少なくとも Vöhlin-Welser 会社となっていたとする R. アイリッヒの説明⁷⁾を否定するわけではないにしても、つまり1498年以前の「会社」の合併

の可能性を否定するわけではないにしても、アントン・ウェルザーは結婚後およそ20年後にこの両企業の合併にふみ切ったことになる。1497年にはフォーリン・ウェルザー企業となるべき本店がそれまでのメミンゲンからアウクスブルク (Augsburg) に移されている⁸⁾。これによってメミンゲンの地位が急速に後退したわけではないにせよ、この会社にとって大きな転換期となったことは間違いない。

コンラート (Konrad) はしかし会社の本店の移動にもかかわらず、メミンゲンに留まって活動していた。メミンゲンの拠点は R. アイリッヒによればただの支店とは区別され、そこでの責任者として活動していたのが、会社全体の長 (Leiter) であるこのコンラート (Konrad) とアントン・ウェルザーの2人そのままであった⁹⁾。

当時のコンラート (Konrad) 自身の活動と会社の営業などについてはあまり詳しいことは明らかでないが、コンラート (Konrad) がバルトロメイス・マイ (Bartholomäus May) と一緒にマキシミリアン (Maximilian) I 世の戴冠式に際してイタリアのミラノ (Mailand) に滞在していたし¹⁰⁾、そのほか上にみたように、父親のハンスⅡやさらにアントン・ウェルザーと共にオーストリアのチロル (Tirol) の銀山経営にもたずさわっていた。その証明されている年代は1492年である¹¹⁾。これらの銀山経営の取引先はミラノやコンスタンツ (Konstanz)、スイスのベルン (Bern) などの貨幣鑄造都市であった。

もともとフォーリン (Vöhlin) 家の出身地はスイスであったから、スイス各地でも取引が行なわれていた。主としてフライブルク (Freiburg im Üchtland) 産の布製品を各地に販売したのである。1491年頃に、フライブルク (Freiburg im Üchtland) からイタリアのベニス (Venedig) に白地布 (Weiße Tücher) を年々2,000~4,000反 (Stück) 売却していた。しかも、この取引は1520年代まで続いている。フォーリンとウェルザー両者が、最初のうちはそれぞれ単独で、合併後は共同して、独占的に行なっていた取引であった¹²⁾。

ウェルザー (Welser) とフォーリン (Vöhlin) はしばしばツルザッハ (Zur-sach) の大市でも取引を行なっていた。1501年には50反 (Tücher) の布を供給

している¹³⁾。会社のフライブルク (Freiburg im Üchtland) の支店がこの大市において活動し、布だけでなく皮革 (Leder) や毛皮 (Fellen) などを扱っていた。さらに、合併後のフォーリン・ウェルザー (Vöhlin・Welser) 会社がフライブルク (Freiburg im Üchtland) 市民にフランス南部サヴォイ (Savoien) 地方産の毛皮を売却している事実もある¹⁴⁾。

さらに、1490年代にはフォーリン (Vöhlin) 会社はスイスのベルン (Bern) にも足跡を残している。上にみたバルトロモイス・マイ (Bartholomäus May) をこの都市で会社の代表 (Vertreter) 及び株主社員 (Teilhaber) として獲得し、しかも都市当局に資金を融通した¹⁵⁾。この人物は、フォーリン (Vöhlin) 会社に経営参加する以前は鉱山取引 (Bergbaugeschäfte) を行なっており、さらに食塩なども商っていた。サヴォイ (Savoien) 地方など南フランスが主たる活動範囲であった。この人物の参加によって、フォーリン (Vöhlin) 会社はリヨン (Lyon)、ジュネーヴ (Genf)、ミラノ (Mailand) などでの取引で一層の業績をあげたのであった¹⁶⁾。

そのほか1490年代にフォーリン (Vöhlin) 会社は、スイスのバーゼル (Basel) でリーハー会社 (Riehergesellschaft) と取引を行なっている。1491年のことである。さらにこのバーゼル (Basel) のイルミ会社 (Irmigesellschaft) を巡ってフォーリン (Vöhlin) とウェルザー (Welser) とがイタリアのミラノでいみ合ったことなども伝えられており¹⁷⁾、バーゼルでの活動が裏付けられるものとなっている。

ドイツ国内では、ニュルンベルクにはやくから会社の支店が設置されており、会社にとってかなり重要な役割を果たしていた。とくに15世紀末期の90年代における活動は注目されている。たとえば、1492年の会社の支店長は Bernhard Walter といい、メミンゲン市の出身者であった。この人物は、1480年代には支店長としてこのニュルンベルクでの取引に従事していた。ただ、この1492年には、Bernhard Walter と、彼と同等の権限が与えられて営業に従事していた人物であった Heinbrand Herer とが、Georg Peck なる人物に対して620 フローリン (fl.) もの負債を負っていたことが報告されている¹⁸⁾。

そのほかニュルンベルクでは1493年に Jakob Welser が結婚し、その結果彼は10年間、ニュルンベルクでの滞在が義務付けられることになった¹⁹⁾。彼はその間数回、会社のニュルンベルク支店長を務めたが、1494年には本人自身の責任による、つまり会社のものではない取引も行なっている。したがってなかば独立した商人としての性格も有していたと言える。この結婚の相手は Ehrentraut Thumer で、この間に立っていわゆる縁を結んだ人物が Christoph Scheuerl で、後にフォーリン (Vöhlin) 会社に入って活動した。Jakob の妻 Ehrentraut の出た家族 Thumer はニュルンベルク在住の家族で、この結婚を機会にフォーリン・ウェルザーのニュルンベルクとの結びつきも一段と深まったように思われる。結婚に際して10年間の滞在義務が課せられたが、それはニュルンベルク市自体が Jakob をそれだけ必要としていたことからであったとも考えられる。1493年の結婚式に際して、ニュルンベルク市当局が市庁舎の建物と式を饗宴する人々とを提供していることは²⁰⁾そのことを物語るものであろう。そしてさらにこの時代に、フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) はこのニュルンベルクで、当時の大商人貴族の一つであるイムホフ (Imhof) 家との結びつきを実現したと推測することができる。つまり当時ニュルンベルクの市民権を得ていた Jakob Imhof との取引の開始である²¹⁾。

いずれにしても、当時ニュルンベルクで会社の活動に従事していた中心人物は Jakob Welser と Bernhard Walter であった。上にみたように1482年には支店長となっていた Walter はハンス (Hans) II, エアハート (Erhard) II の2人からほぼ全権を委任されて活動していた。当時の取引の一つに、1482年にプラハ (Prag) の商人で当時は Pilsen に滞在していた Hans Venediger なる人物に、麻布 (Leinwand) 15反 (Stück) を 65フローリン (fl.) 10シリング (β.) で売却した、記事がある²²⁾。これらははもともとハンス II あるいはエアハート II 以前の時代に属するものであろうが、コンラート (Konrad) の時代に入ってから Walter はフォーリン (Vöhlin) 会社の全権委任支店長 (Procuratorfaktor) となって活動している²³⁾。彼の実の弟の Hieronymus Walter もライプツヒ (Leipzig) の支店長として活躍しており、兄弟で会社の発展に

貢献していたことになる。

ニュルンベルクのフォーリン・ウェルザー会社が扱っていた商品の大部分は繊維品であった。上にみたベルンハート・ワルター (Bernhard Walter) が活躍していた頃には、年々馬15~20頭分の積荷の布 (Saum Gewand) をこの都市に持ち込んでいる²⁴⁾。このニュルンベルク支店はワルター (Walter) の死後、1504年に Jakob Sattler が後継者となって活動しており、更に1507年には上にみた Christoph Scheuerl が活動している。この Christoph Scheuerl は、結婚を仲介した Jakob Welser と親交のあった人物で、もともとは、イタリアのベニス (Venedig) で活動していた。この人物はフォーリン・ウェルザー会社に入る前は、Bianca Maria Sforza なる企業で会計及びコック長 (Zahl und Küchenmeister) として働いていた。1500年当時の彼の財産は1万4,000フローリン (fl.) と算定されている。したがって個人としてもかなりの財産家であったことは間違いない²⁵⁾。そして年々彼はフォーリン・ウェルザー会社から100フローリン (fl.) を受け取り、さらに支店の運営資金として年に500フローリン (fl.) を会社から受け取っていた。商用として、北のダンチッヒ (Danzig) やシュレージエン (Schlesien) にまでも赴いている²⁶⁾。つまり彼は、このニュルンベルクでは、この支店の経理長であり、出納長であり支店長であるといった、1人で何役もこなさなければならない中心人物であり、おそらくこれが当時の商事会社の支店経営の実際の姿を示していると思われる。1493年には、“メミンゲン商事会社”の代表者としてザクセン公爵 (Herzog von Sachsen) の負債2,000フローリン (fl.) を肩代りしているという記事から²⁷⁾、当時すでにフォーリン (Vöhlin) 会社に入って活動していたことがうかがえる。彼は自分の住居を会社の事務所 (Schreibstube) として使用していたから、まさにほとんど1人で経営していたことになるろう。

この Christoph Scheuerl がニュルンベルクの支店長として登場するのは1507年であるとすでに上でみたが、しかしニュルンベルクでの彼の活躍は1493年の Jakob Welser と Ehrentraut Thumer との結婚のとりもちでも理解できるようにかなり早い時期からであったことに間違いない。C. Scheuerl 自身、3

人の見習い商人, Jakob Sailer, Christoph Oheym, Paulus Pfister なる人物を自分の住居に住み込ませて教育していた。彼が支店長になる前, 上にみた Bernhard Walter の死後, Jakob Sattler が支店長として後を継ぎ, 1507年に彼がその地位に着いたのである。Scheuerl の活躍の結果であるかどうか, 直接的な関係は不明であるが, 1511年当時, このニュルンベルクにおいて商品を扱う商人・商事会社のなかで, このフォーリン・ウェルザー (Vöhlin-Welser) 会社に並ぶものはなかった, とまで言われている²⁸⁾。

そしてかつて C. Scheuerl が活動していたベニスでは, 1494年以来, Hans Pfister とルカス・レーム (Lukas Rehm) の2人の人物が見習い社員 (Lehrlinge) として活動し, しかも彼らの上には支店長として Hans Stebenhaber と Hans Lauginger の2人が活動していた²⁹⁾。つまりベニスではかなり多数の人員が配置されていたことになる。これは, 当時の南ドイツ各都市の商業にとっていかにベニスが重要であったかを示すものであろう。試みに, 1508年のベニスの, 例のドイツ商館 (Fondaco dei Tedeschi) のリストには Konrad Vöhlin と Anton Welser の名前が記されており会社の活動を裏付けている。そして, そこに見えるフォーリン・ウェルザー会社の本店居住地 (Sitz) はすでにアウクスブルクとなっている³⁰⁾。

このベニス支店において, このコンラート (Konrad) の時代に活躍していた人物として上の Lukas Rehm がいる。上にみたように1494年以来, 見習い商人として Hans Stebenhaber と Hans Lauginger の指導のもとに活動していたが, この人物は実は上の Anton Welser の甥にあたり, R. アイリッヒ (Eirich) の掲げる Welser の家系図では, Anton の妹の Magdalena の2度目の夫となっている。また, ルカス・レーム (Lukas Rehm) の父親はフォーリン・ウェルザー会社への出資金4,500フローリン (fl.) を彼のために残してもいる。1496年のことである³¹⁾。Lukas Rehm 本人は, 3カ月間の研修のあと, 1498年にはミラノに派遣され, Anton Lauginger に会社の社員としての教育をうけ, さらにその後 Narziß Lauginger のもとで修業するためにフランスのリヨンに渡っている。それらの地はいずれもフォーリン・ウェルザー (Vöhlin

Welser) 会社の重要な営業地域となったところである。

コンラート (Konrad) の時代に活躍した人物としてもっとも重要なのは、フォーリンとウェルザーの結合の中心人物であったアントン・ウェルザー (Anton Welser) である。すでに上に述べたようにこの人物は、ハンス (Hans) II の娘 Katharina を妻とし (1479年), フォーリン (Vöhlin) 商事会社をその当時としては最も注目すべき世界的貿易企業にまで仕上げた人物である。フォーリン会社とウェルザー会社との合併 (Fusion), つまりそれまで活動していたフォーリン商事会社と Anton Welser の父親の Lukas Welser と彼の兄弟とがアウクスブルクで設立していた Welser 会社とが共同経営に入る上での一方の中心人物なのであった。

アントン・ウェルザー (Anton Welser) はすでにこの両会社の合併前からメミンゲンで活躍し、メミンゲンの市民権を得て会社の活動に従事していた³²⁾。メミンゲンでは市参事会メンバー (Ratsherr) や高級官吏 (Stadtammann) などの要職に任じられていた。

1498年の合併の前々年の1496年にハンス (Hans) II が死亡し、その後の経営権を継いだのがコンラート・フォーリンとこのアントン・ウェルザーの2人であったが、合併後の2人の関係は、1451年生れで年上の Anton の方に指導権が強く移っていった。それは Anton がメミンゲンでの経営経験も豊富であったこと、メミンゲンの“大商人サロン”の勘定書リストにも名を連ねており³³⁾、しかもメミンゲンの市民として残ってもいたことなどからもわかる通りメミンゲンでの活躍が高く評価された結果であったとも言える。すでに合併前にこの Anton Welser はチロルの銀山経営でも1490年と1492年にハンス (Hans) II 及びコンラート・フォーリンと並んで活躍していたし³⁴⁾、スイスのパーゼルでもその地の Rieher 会社に対してフォーリン (Vöhlin) 会社を代表してもいた。さらに上にみた末の弟の Jakob Welser も1493年の結婚後一層会社の活動に深く関係したため、ここに Welser 兄弟がそろってフォーリン (Vöhlin) 会社で活躍していたことになるのである。そして、1494/95年の Welser 兄弟の父親である Lukas Welser の死と1496年のコンラート (Konrad) の父親で

あるハンス (Hans) II の死亡の後、アントン (Anton) はアウクスブルクの父の遺産を受け継ぎ、その結果1496年には彼はアウクスブルクの納税者リストに載り³⁵⁾、一方のコンラート (Konrad) はハンス II の後を継いで、結局、この2人が「会社」の経営権を握ったのであった。アントン (Anton) は1496年つまりハンス II の死亡した年に、後を継いだそのアウクスブルクを離れてそれから15年以上もの長い間メミンゲンにとどまってそこで活動していた。しかし、アントン・ウェルザーの活動はけっしてメミンゲンだけに留まっていたわけではない。むしろこれ以後この会社の活動がしだいにメミンゲンからアウクスブルクへ中心移動するにつれて彼のアウクスブルクとの関係も一層強力なものとなった。1498年の両会社の合併は、こうしたアントン (Anton) のメミンゲンとアウクスブルク両都市にまたがる活動の結果であったとも考えられる。アウクスブルク市に対してアントンの妻が年々32フローリン (fl.) もの納付金 (Schmiergeld) を12年間にわたって支払わなければならなかったのも³⁶⁾、こうした両市にまたがった活動に、しかもメミンゲン市民として活動しながらアウクスブルク市でも立場を良く保っておくためであったと考えられる。Anton の子供達は皆アウクスブルクの市民であり、また、彼自身も年々アウクスブルク市への納税額を増加している。すなわち、1498年には2.5フローリン (fl.)、1509年42.5フローリン (fl.)、1512年155 $\frac{3}{4}$ フローリン ((fl.)、1516年133 $\frac{3}{4}$ フローリン (fl.) である³⁷⁾。そして、この1512年頃には、すでに上で1508年にもそうであったが、フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の本拠地は完全にアウクスブルクに定着しているのである。

以上のように、コンラート (Konrad) の時代にフォーリン (Vöhlin) 商事会社は、アウクスブルクで活動していたウェルザー (Welser) との合併を実現したのである。その詳細について説明できる史料に恵まれているわけではないが、コンラートとアントンそれぞれがそれまでの経営者に代って代表となり、とくにフォーリン (Vöhlin) 会社に入っていたアントン (Anton) が父・兄弟の経営するウェルザー企業の経営を引き継ぐことを通して両企業の合併は完成したと言える。ただ、そのほかには合併に関する手がかりはほとんど残されていない

いと言わなければならない³⁸⁾。わずかにフォーリン・ウェルザー会社の商標のデザインのみが確認されているにすぎないのである。

最後にコンラート (Konrad) 自身について、2,3触れておきたい。彼も、「会社」の営業活動だけに専念したわけではなく土地・不動産への投資に手を染めている。1503年にはメミンゲン市から、6,400フローリン (fl.) を支払って Ungerhausen の土地を取得し、そしてそこに小さな館 (Schlößen) を構築している³⁹⁾。さらに1504年にアントン (Anton) の実の妹である妻 Barbara が死ぬと、メミンゲンではフォーリン家と並び称される貴族商人の Sättelin 家の娘 Margarethe と結婚、血縁的結びつきを強めている。このほか、会社がアウクスブルクに移転した後はとくに、メミンゲンとアウクスブルク間の商用も多くなり、1508年には会社の契約書作成の際に、1509年には“石弓競技”に際して、アウクスブルクを訪れ、後者の時には10フローリン (fl.) を賞金として獲得したりもしている⁴⁰⁾。また、1508年にはフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市を訪れ、20フローリン (fl.) の旅費を支払わせている。さらに1510年には、ドイツ皇帝から先買い入れた Ungerhausen の領地の高級裁判権 (Hochgerichtsbarkeit) をも手に入れている⁴¹⁾。この件に対しては、都市メミンゲンからの抗議も認められなかったと記述されている⁴²⁾。また、1511年6月7日のコンラート (Konrad) の死後、後妻であった Margarethe はさらに十年余の余生を送り、1513年には Amendingen と Steinheim の地にそれぞれ屋敷を買い入れ、1,270フローリン (fl.) を支払っている⁴³⁾。

すでに上にみたベニスの支店で活躍していた Lukas Rehm は、その商用日記によって有名であるが⁴⁴⁾、その記録に明らかな通り、彼はヨーロッパ各地で活動しており、各地でこの次の世代を継ぐ若い商人への指導も行っていた。その活動の詳細は後段にも触れるが、いずれにしても、アントン・ウェルザー (Anton Welser) とコンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) のこの時代がいわばフォーリン (Vöhlin) 会社にとっての最盛期に間違いなく、これ以後はフォーリン (Vöhlin) 家の商人は、コンラート (Konrad) の死後なお1518年まで活躍したアントン・ウェルザーの影響もあって、遠く海外新世界へも進出

するウェルザー (Welser) の前に、しだいに後退していくのである。

注

- 1) ただし、このアントン・ウェルザーはいわゆるフッガー (Fugger) ・ウェルザー (Welser) 時代のアントン・ウェルザーではない。R. アイリッヒの家系図によって明らかにされているが、1518年に創設されたウェルザー商会の創設者バルトロモイス (Bartholomäus) とアントン (Anton) の兄弟はここで述べるアントン・ウェルザーの息子にあたる。Eirich, R., *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 162.
- 2) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 3) Eirich, R., a.a.O., S. 139.
- 4) ebenda.
- 5) Westermann によれば、コンラートが市長職にあったのは、1502年、1504年、1506年、1508年、1510年の5回におよんでいる。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 6) Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter* 1920, Nr. 3, S. 19.
- 7) Eirich, R., a.a.O., S. 139.
- 8) ebenda.
- 9) ebenda.
- 10) ebenda.
- 11) ebenda.
- 12) ebenda.
- 13) ebenda.
- 14) ebenda.
- 15) ebenda.
- 16) ebenda.
- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 133.
- 18) ebenda.
- 19) ebenda.
- 20) ebenda.
- 21) アイリッヒの掲げるイムホフ家の家系図の上ではこの Jakob Imhof を見出すことはできない。もともとメミンゲンあるいはフォーリン会社との結びつきの濃いイムホフは、メミンゲンの“大ツunft”や後の“金の獅子クラブ (Gesellschaft zum Goldenen Löwen)”のメンバーとなっており、しかもメミンゲンの市民権も取得し

- ていた Balthaser Imhof が中心であった。Eirich, R., a.a.O., S. 285.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 133.
- 23) ebenda. このほか彼は後に Albert Dürer とも親交をもっていたこと、さらに Veit Stoß なる人物とも親交を重ね、彼の“Adam と Eva”がフォーリン・ウェルザー会社によって取得され、リスボンの宮廷 (Lissaboner Hof) に収められたことなど、が伝えられている。Eirich, R., a.a.O., S. 134.
- 24) ebenda.
- 25) ebenda.
- 26) ebenda.
- 27) ebenda.
- 28) Eirich, R., a.a.O., S. 134. また、こうしたニュルンベルク支店の活躍は北のライプツヒヒの大都市でも示されている。この大都市には、1508年にニュルンベルクのフォーリン会社の支店長として Jeronimus Walter が訪問している。Fischer, Gerhard, *Aus Zwei Jahrhunderten Leipziger Handelsgeschichte, 1470-1650*, Kommissionsverlag von Felix Meiner, Leipzig, 1929. S. 19.
- 29) Eirich, R., a.a.O., S. 135.
- 30) 1508年のドイツ商館は新しく建て換えられたばかりのもので、この時にもフォーリン・ウェルザー会社は、会社独自の事務所 (Kammer) を商館内に所有していたが、もともと1490年代初頭以来、フォーリン会社は独自の事務所を所有していた。商館リストとは、商館内に事務所を所有している所有者リストのことである。Eirich, R., a.a.O., S. 135.
- 31) ebenda.
- 32) ハンスⅡは1480年にこの Anton Welser の市民権取得のために、市民権取得税 11フローリン (fl.) を支払っている。Eirich, R., a.a.O., S. 140.
- 33) Eirich, R., a.a.O., S. 141.
- 34) ebenda.
- 35) ebenda.
- 36) ebenda.
- 37) Eirich, R., a.a.O., S. 143.
- 38) Westermann A., のフォーリンに関する2点の論文のうちすでに上で参照した「Memminger Handel und Handelsgesellschaften」においてはこの両企業の合併について年代とその形式について示されているが、「Die Vöhlin zu Memmingen」においては Fusion (合併) の言葉すら示されていない。そこでは、Welser と Vöhlin 会社の結合について、結婚を通じての血縁的結びつきの過程で Vöhlin-Welser 企業の成立を説明するに留まっている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen,

- in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 39) Eirich, R., a.a.O., S. 139. 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 40) Eirich, R., a.a.O., S. 139.
- 41) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 42) Eirich, R., a.a.O., S. 139.
- 43) ebenda.
- 44) Eirich, R., a.a.O., S. 135.

5 コンラート・フォーリンの次世代¹⁾

コンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) が1511年に没し、その数年後の1518年にアントン・ウェルザー (Anton Welser) も死んで、フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社は一つの新しい時代に入ることとなった。ただこれからの時代、つまり1520年頃からの時代にフォーリン・ウェルザー会社がどのような発展と経緯をたどったのかについてはほとんど明らかではない。一体、それまで継続してきたフォーリン・ウェルザー会社がいつ頃までこのままの形態で進み、それがいつ頃解消されたのか、等々について、残念ながらそれを明らかにすることはできない。明らかなのは、16世紀に入ると、ウェルザー (Welser) 企業の方だけが急激に新世界の各地にまで進出を開始しているという事実だけである。いわゆるフッガー (Fugger)・ウェルザー (Welser) に代表される南ドイツ企業の発展の時代の中枢を担う企業人がこの一族から輩出したのである。今、コンラート (Konrad) 及びアントン (Anton) の次の世代の商人を追ってみれば以下のようにみることができる。

コンラート (Konrad) の子供は、R. アイリッヒの掲げる家系図でみれば8人を数えるが、そのうち商人としての活動を行なっているものは長男のハンス (Hans) である²⁾。いわばハンスⅢと呼ぶことができる。このハンスⅢは Ungerhauser 系フォーリン (Vöhlin) の家系であるが、Frickenhauser 系フォーリンの出であった初代エアハート (Erhard) の長男のレオンハート (Leonhard) も後継者に恵まれ、長男のエアハートが商業活動に従事していた。こ

の人物をエアハートⅢと呼ぶことができよう。したがって、コンラート・フォーリン及びアントン・ウェルザーの次世代とはこのハンスⅢとエアハートⅢの2人、さらにウェルザー家のアントンの後継者と言うことができる。

ハンスⅢについて伝えられていることは多くはないが、A. ヴェスターマンの論文によれば、若い時から商業活動に従事し、フォーリン・ウェルザー会社の社員となっていた。そして時代は明らかでないが、スペインのザラゴッサ (Saragossa) の支店長としても活躍していた³⁾。そして1511年6月11日に行なわれた父親のコンラートの葬儀 (Besignis) に参列したルカス・レーム (Lukas Rehm) が、その葬儀にひきつづいてリヨン (Lyon) に出向き、そこでこのハンスⅢの会計報告書を検討したという事実のなかに⁴⁾、その活動が確認される。ハンスⅢはその後父のコンラートを継いでメミンゲンで会社の活動に従事するが、これらは、まだコンラートの他の子供、つまりハンスⅢの兄弟は誰もまだ成人には達していない時である。

次にハンスⅢが史料に登場するのは1517年である。この年にハンスⅢは市参事会 (Ratgeb) に選出され、1519年にも再び同じ地位についている⁵⁾。

さらにハンスⅢは1521年のメミンゲンの納税者リストにその名が示されている。当時フォーリン・ウェルザー会社が存在していたとしてもその本店は15世紀末以来アウクスブルクにあったはずであるが、それにもかかわらずメミンゲンで第2位の高額納税者にランクされている。税額は75プフント (Pfund) 7シリング (Schilling) 11ヘラー (Heller)、その税額から算定される財産額は、1万340から2万680フローリン (fl.) に当たるものであった⁶⁾。この時ハンスⅢの弟のコンラート (Konrad) も同じく課税されており、53プフント (Pfund) 2シリング (Schilling) を支払い、第6位となっている⁷⁾。したがってこのコンラート (Konrad) もおそらく商業活動に従事していたことが考えられる。このほかにも残りの兄弟姉妹の支払った税額は28プフント (Pfund) 17シリング (Schilling) 8ヘラー (Heller) におよび、この Ungerhauser 系フォーリン家の課税対象財産額は、2万1,690フローリンから4万3,310フローリン (fl.) という大きな額に見積られているのである⁸⁾。

そのほか、ハンスⅢを含めたコンラートの子供達の経歴はほとんど明らかでない。R. アイリッヒによれば多くが若いうちに死亡し、そのこともあって次第に「会社」はウェルザー (Welser) の色彩が濃いものとなっていくた。ただ1511年の父親コンラートの死後、1512/13年のメミンゲンの“大商人サロン”のリストには、1512年に、Lukas, Barbara, Hans, Jos, Elisabeth の兄弟姉妹の名前が掲載されている⁹⁾。そしてこのうち Jos は、1514年に未婚のままで死亡し、Erhard も1515年に死亡、そして1516年以来大商人リストに数えられていた Konrad も1522年には死亡してしまっただのである。そして1551年まで生存していたルカス (Lukas) は僧職についていたが、メミンゲンが宗教改革を受け入れた後、1531年以後公職からは退き、そのまま1551年6月初めに死亡したとみられている¹⁰⁾。また、ハンスⅢの妹である Barbara と Else については、それぞれ遠縁の Hieronymus Rehm と Servatius Rehm と結婚したという以外のことは不明であるが、末の妹の Margarethe も、1526年に Hans Rot と結婚している。この人物はメミンゲンでもかなり有力な商人としてリストに名前が載せられている¹¹⁾。この Hans Rot はもともとウルムの市民で、後の1536年7月に、Frauenmühle (Memmingen 近郊) の地を Hans Ehinger なる人物に売却した。この買主はこの時にはアウクスブルクに住んでいる人物であった。そして Hans Rot の弟の Konrad はウェルザー一家出身の娘と結婚するという血縁的な結びつきをもっていた。この2人とも後にはアウクスブルクの貴族 (Patriziat) として受け入れられている。そして、この Rot 家は、もともとフォーリン商事会社への出資者 (Teilhaber) の1人でもあった¹²⁾。

上にも述べたように、1511年のコンラート・フォーリンの死後、父親の遺産は、フォーリン・ウェルザー会社の経営分も含めて、1488年生れのハンス (Hans) Ⅲに相続されている。そしてその後ハンスⅢは、もっぱらアウクスブルクに本店のある Welser 会社の発展の方に全力を注いでいる¹³⁾。その後のメミンゲンの活動でも、専らウェルザー (Welser) の名前の下でなされたように思われる。

ハンスⅢの兄弟たちは、不動産の管理にも精を出し、Ungerhausen の土地は従来通り所有されていた。弟の Lukas が管理していたものである。さらに

この兄弟は1532年に、シュワーベン (Schwaben) 都市同盟に対して、Ungerhausen とその周辺の家屋敷に対する農民戦争による損害の賠償として80フローリン (fl.) もの額を請求してもいる¹⁴⁾。さらにこの時代に土地所有への投資もかなりなされていた。1546年には Günztal における Gottenau の土地を1万8,300フローリン (fl.) で、メミンゲンの貴族 Hans Ehinger から買い取っている¹⁵⁾。

また、シュマルカルデン (Schmalkalden) 戦争に際してはフォーリン (Vöhlin) 家の各商人はカール (Karl) 5 世に忠誠をつくし、皇帝側についていたが、この時代 Hans III は同名の息子であるいわば Hans IV, さらに Anton Welser の子供達、つまり Bartholomäus Welser, Christoph Welser, 父と同名の息子 Anton Welser, さらに Leonhard Welser らと共にアウクスブルク都市当局の許可を得た上で、ボーデン湖湖畔の Arbon の地に避難していた¹⁶⁾。この記事から、ハンス III がいまだ Welser の各商人と共同して商業活動に従事していたことがわかるが、すでにこの頃になるまでに、R. アイリッヒ (Eirich) や A. ヴェスターマン (Westermann) の表現からはフォーリン・ウェルザー会社という今迄の表現は全く姿を消しているといつてよいと思う。そこにみえるのは専らアウクスブルクの Welser 会社という表現ばかりである。少なくとも R. アイリッヒの表現のなかには、1511年のコンラート (Konrad) の死後、フォーリン・ウェルザー会社という表現は見い出されない。したがってこれ以後の会社の名称はアウクスブルクのウェルザー (Welser) 企業とみななければならないと思う。つまり、1511年のコンラートの死をもって、フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の解体とみなすか、あるいは詳細は不明であるが後にみる1518年のウェルザー (Welser) 会社の設立をもって解体したかのいずれかであろう。いずれにしてもコンラートの死後、早くからフォーリン・ウェルザー会社で活動していたハンス III が父の仕事を継いで、その年にリヨンよりメミンゲンにもどったのである。そして、その数年後の1517年に上でみたようにメミンゲンの参事会メンバー (Rat) に選出されたのであった。この時にはこのハンス III はウェルザー会社の出資社員 (Teilhaber) であったと記

されている。そしてそこにフォーリンの名はすでに消えているのである¹⁷⁾。

フォーリン (Vöhlin) 家系図に示されているように、ハンスⅢは1517年には Margarethe Möslin と結婚、1521年の彼女の死後、1522年に Afra Hörwarth と結婚、さらに彼女の死後1545年に Elisabeth Steinbrecher と結婚した。前者は2人ともメミンゲンの都市貴族 (Patriziar) の出身であった。Elisabeth は同じくメミンゲンの貴族 (Geschlecht) であった Hans Furtenbach と結婚していたが、彼の死後、HansⅢと再婚している。この Hans Furtenbach は詳しいことは不明であるが、1518年になされたというアウクスブルクの Welser 会社の設立に加わった人物でもあった¹⁸⁾。したがってここにも、会社の活動を通しての血縁関係の成立をみるることができる。1517年と1519年に市参事会メンバーであったハンス (Hans) Ⅲは、その後、メミンゲンの宗教改革運動に耐えかねて、と想像されているが、1526～1527年の頃にメミンゲンの市民権を放棄し、アウクスブルクへ移住している。メミンゲンの例の“大商人サロン”勘定書リストに、半額納入者として彼の名前が記録されているのは¹⁹⁾、こうした移籍者への配慮とも考えられる。

ハンスⅢの活動実績を示すものに、メミンゲン市の納税記録を参考にすることができる。すでに上にみたように1521年にハンス (Hans) Ⅲは、75プフント (Pfund) 7シリング (Schilling) 11ヘラー (Heller) の税金を支払い、高額納税者リストの第2位にランクされていたが、これが、1537年には280フローリン (fl.) に上昇、さらに1545年には660フローリン (fl.) とかなり急激に増加している²⁰⁾。このことは、ハンス (Hans) Ⅲの活動によって、急激な資本蓄積がなされたことを意味するものである。

すでに1526～27年にアウクスブルクに移住したハンスⅢは、ようやく1538年になってからであるがアウクスブルク市から貴族商人グループ (Geschlechter Gesellschaft) への入会が承認され²¹⁾、アウクスブルクの大商人の1人として認められるに至っている。

これ以後、1556年に死亡するまで、ハンス (Hans) Ⅲには注目するような活動の記録は残されていない。むしろハンス (Hans) Ⅲの長男で、父と同名のい

わばハンス (Hans) IV について, Welser 会社での活動や, 父がメミンゲンを退去した後のメミンゲンでの1533年以來の“大商人サロン”の勘定書リストへの登場などが明らかとなっているが, さらに1543年のアウクスブルクの貴族 Anna Lauginger との結婚のことなども伝えられているが²²⁾, それらはいずれもかつてのフォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の時代を離れているものと理解すべきであろう。

このハンス (Hans) IV が1543年に Anna との結婚を通してアウクスブルクの市民権を得, さらに父親のハンス III がそれよりはるか以前にアウクスブルクに去り, さらに1544年には, 自分の息子であるハンス IV のメミンゲンの市民権をも放棄させるに至って²³⁾, フォーリン (Vöhlin) 家とメミンゲンとの結びつきは一層希薄になったと言わざるをえない。そしてそれだけアウクスブルクの重要性が上昇するのである。

メミンゲンからアウクスブルクへの重心の移行は, そのままこの時代の会社の営業活動が Welser 中心に移行したことを意味する。つまりこれ以後, 16世紀中頃のアウクスブルクの Welser 会社とさらにニュルンベルクに設立された Welser 会社の躍進の前に, メミンゲンのフォーリン会社関係者はしだいにその影響力を少なくしていったと思われる。アウクスブルクの Welser 会社がなおメミンゲンの支店を維持して, たとえば1527年には Hans Ehinger なる人物を支店長におき²⁴⁾, さらに1529年と1535年にはラード (Schmalz) の取引に参加し, 1535年にはメミンゲン都市当局が Welser 会社から40ツェントナー (Zentner) のラードを買い入れた²⁵⁾, 等々はいずれも Welser 会社の発展を示すものである。

このようにアウクスブルクの Welser 会社はその前時代と同様にメミンゲンでも活動を継続しているが, とくにこの時代になると, ドイツ国内はもとよりヨーロッパ各地, さらに西インド, 新世界への進出も行なわれて²⁶⁾, いわゆる南ドイツ大商業資本のフッガー (Fugger) 時代の一翼を担うことになるのである。

フリッケンハウス (Frickenhaus) 系のエアハート (Erhard) III (レオンハ

ートの長男)とその子供についても、ここで触れておきたい。上のべたレオンハート (Leonhard) にはエアハート (エアハートⅢとする) と Sibille とがいた。Sibille の方がはやく結婚し、Wilhelm Züllnhart なる騎士身分の人物と結婚し、数年後の夫の死後、1517年に Thomas Wittislinger なる人物と再婚している²⁷⁾。一方のエアハートⅢは、1510年6月初旬に1488年生れの Helena von Albersdorf、つまり Pfalz=Neuburg の市参事会 (Rat) メンバー Ulrich Albersdorf の娘と結婚、都市メミンゲンとの関係を断つてはいなかったが、しかし1520年にはもはやメミンゲンの市民としての活動は全くなされていなかった²⁸⁾。したがってこのエアハート (Erhard) Ⅲについては、商人としての活動は全くなされていないといって間違いはないであろう。実際、彼の関心は商業取引よりもむしろ土地への投資であった。たとえば1512年にはプファルツの領主 (Pfalzgraf) である Friedrich von Neuburg から8,000フローリン (fl.) の代価で、Gundelfingen の地の領主権を譲渡されている。さらに1520年にも3万4,000フローリン (fl.) の代価を支払って、Gundelfingen の Schweickhart 侯から Ilertissen の土地を、司法権及びそれに付随的な権利を含んだ領主権を買い取っている²⁹⁾。そのほか1524年にもエアハート (Erhard) Ⅲはアウクスブルクの市民、Hans Paumgartner なる人物から1万5,100フローリン (fl.) の代価を支払って Neuburger (an der Kammel) の領主権を買い取っている。その後の活動についても、エアハートⅢと商業活動を結びつけるものは何一つ見出されないのである。

エアハート (Erhard) Ⅲは上にみたように、1510年に Helena von Albersdorf と結婚したが、Helena はエアハートⅢ自身より10年はやい1547年に死亡している。2人の子供は4人であった。マリアは1534年に Konz von Knöringen なる人物と結婚し、その後まもなく騎士身分の Riegerr von Westernach と再婚している。次のアンナは1537年に Angelberg の地の Hans Wilhelm von Rietheim と結婚、末の妹のマーガレータは1541年に Wilhelm Adelman von Adelmansfelden と結婚、1594年に死亡している。さらに息子の Hans Christoph は、1553年に Veronika von Freiberg と結婚、1576年に死亡する。そ

してこの Hans Christopf の3人の息子が、この Frickenhauser 系フォーリン (Vöhlin) の血縁をさらに引き継いでいくのであるが³⁰⁾、そこにはもはや従前の商人貴族としての活動はみられないのである。

以上のように、フォーリン (Vöhlin) 家の商人達は、ウェルザー (Welser) 企業の発展の中にいわば埋没していったとすることができるであろう。上にみたレオンハート (Leonhard) からエアハート (Erhard) Ⅲに続く、フォーリン家の2大支柱の1つの Frickenhauser 系は、16世紀のうちに Illertissen と Neuburg に居を構え、そののちおよそ200年の歴史を経て1770年までその存在が確かめられているし³¹⁾、Ungerhauser 系の方も、16世紀後半にもう一度メミンゲンにもどり、さらに17世紀中頃までその活動が確認されてもいるが³²⁾、それらはいずれも商業活動の面からは遠くはなれたものに終始していたと思われる。

注

- 1) 前項では、コンラート・フォーリン、アントン・ウェルザーの次の時代に、フリッケンハウス系のレオンハートをおいたが、レオンハートはハンスⅡの時代で扱ったため、本項ではコンラートの次世代のハンスⅢに的をしぼっている。
- 2) Westermann, A., の論文には、このハンスⅢの子供達のことがかかなり綿密に記されている。Jos と Erhard が若くして世を去り、その後 Konrad も1522年には死去している。このコンラートについては後に述べるように徴税簿からもその存在が知られている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39-40.
- 3) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 40.
- 4) Eirich, R., *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 139. ただこのリヨンでの2人の活動の前に、1503年の4月に Lukas Rehm がサラゴッサを訪れ、ハンスⅢに会った記録も残っている。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 40.
- 5) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 40.
- 6) Eirich, R., a.a.O., S. 144.
- 7) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*,

- 1923, Nr. 5, S. 40.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 144.
- 9) Eirich, R., a.a.O., S. 167.
- 10) Eirich, R., a.a.O., S. 168 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 40.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 168. Else が結婚した Servatius Rehm は、1542年の史料にその名前が出ているウルムの市民であり、さらに Ungerhausen の村の共同所有者でもあった。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 168. 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 39.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 169.
- 14) ebenda.
- 15) ebenda.
- 16) ebenda.
- 17) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 41.
- 18) Eirich, R., a.a.O., S. 168.
- 19) Eirich, R., a.a.O., S. 168. 及び Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 41.
- 20) ヴェスターマンによれば、この1521年にハンスⅢよりも多くの納税額を支払ったものは、フォーリンとならんでメミンゲンの有力商人であった Zangmeister 家の Eberhart Zangmeister であった。そしてハンスの納税額の大きさから、「会社」の利益と活動の大きさが推測されているのである。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 41. 及び Eirich, R., a.a.O., S. 168.
- 21) Eirich, R., a.a.O., S. 168. ところで Westermann, A. の記述では、1538年にアウクスブルクの貴族商人に受け入れられたハンスは、1562年死亡とあり、コンラートの息子のハンスと孫のハンスとの混同がみられている。R. アイリッヒによれば、1538年にアウクスブルクの貴族商人に受け入れられたのはコンラートの息子のハンスⅢであり、その死亡年は1556年である。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 41.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 169.
- 23) ebenda.
- 24) この Hans を含めたエーインガーについては、Müller, J., Die Ehinger von

- Konstanz, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, N.F., XX. Bd., 1905, S. 19 以下, 及び拙稿「中世コンスタンツの貿易商人, エーインガーについて」, 『桜美林エコノミックス』第9号, 1980年3月, 95ページ以下も参照されたい。
- 25) Eirich, R., a.a.O., S. 170.
- 26) たとえば, Ehinger の家系に属する商人 Hans Ehinger の弟の Heinrich と Georg は, Welser 会社の社員として Venezuela で活動しているし, Welser の Santo Domingo 島への鉱山労働者の供給 (Leipzig 支店が取り扱い, ハンブルク, アントワープ経由でセビリヤに送る) などにもこの Hans Ehinger が関係している。さらにメミンゲン出身の Jörg Koch や Jörg Hochemuth なる人物もスペインや西インドで活躍している。Eirich, R., a.a.O., S. 170-171. 及び, Häbler, Konrad, Welser und Ehinger in Venezuela, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, Jg., 21, 1894, S. 66-86 等, 参照。
- 27) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 43 及び Eirich, R., a.a.O., S. 174.
- 28) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 43. 1510年の結婚式に際してメミンゲン都市当局は都市の奏楽隊を提供している。その当時はかなり親密な関係が保たれていたとみれるであろう。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 43.
- 29) Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 43.
- 30) Westermann, A., a.a.O., S. 44.
- 31) Westermann, A., a.a.O., S. 44. しかしアイリッヒの説明では19世紀までその血縁はたどられている。Eirich, R., a.a.O., S. 173.
- 32) ヴェスターマンの説明では, ハンスⅢのひ孫で, Ungerhausen 系のフォーリン家は止絶えたとある。Westermann, A., Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1923, Nr. 5, S. 41.

第5節 フォーリン・ウェルザー商事会社の貿易活動と輸出市場

すでにフォーリン (Vöhlin) 会社あるいはフォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の経営者の系譜の項でも述べた通り, 会社にはいくつかの重

要な活動拠点が存在していた。それらの重要地域の色別はそこで会社がどのような活動をなしていたかによって可能となるが、さし当っては会社がどのような地域に支店を設置していたか、によって知ることができるであろう。上に述べてきたなかで支店の設置が明らかとなっているのは、以下の諸都市である(図5-2参照)。ドイツ国内では、近いところからみるとウルム(Ulm)、ニュルンベルク(Nürnberg)、アウクスブルク(Augsburg)、カウフボイレン(Kaufbeuren)、ラーフェンスブルク(Ravensburg)、レーゲンスブルク(Regensburg)¹⁾、ノルトリンゲン(Nördlingen)の各都市に、さらにマインツ(Mainz)、ケルン(Köln)、アーヘン(Aachen)、ライプツヒ(Leipzig)の各都市にも支店がおかれていた。メミンゲン(Memmingen)では、15世紀末に本店がアウクスブルクに移ってから支店として扱われていたが、特別重要な拠点として扱われていたことは疑いない。

これらドイツ各地の都市を経由して、会社の営業活動が東西南北の各地域に拡張されていた。例えば、ウルム(Ulm)やニュルンベルクの支店を経由して、ウィーン(Wien)やウィーナー・ノイシュタット(Wiener Neustadt)の支店へ、さらにはオーストリア・チロル(Tirol)のリンツ(Linz)やザルツブルク(Salzburg)²⁾の支店にも営業圏が拡大されていた。

ライン(Rhein)川流域からイギリスへの通商路上にはノルトリンゲンやケルンの支店が拠点となってそのままアントワープ(Antwerpen)の支店へと伸びていた。

さらにメミンゲンの本店から地中海・イタリア地域にむかっては、スイスのフライブルク(Freiburg im Üchtland)、ベルン(Bern)に支店がおかれ、さらにジュネーヴ(Genf)、リヨン(Lyon)、コモ(Como)³⁾、ミラノ(Mailand)、ベニス(Venedig)の各地にも支店がおかれて、この地域の活動を活発に促進していた。ローマ(Rom)にも支店が設置されており、また、会社の業務を代理する人物も任命されており、会社のローマでの活動を裏付けている。さらにAquilaにも支店が置かれていた。

南フランスからスペイン・ポルトガル地域にも各地に支店が設置されていた。

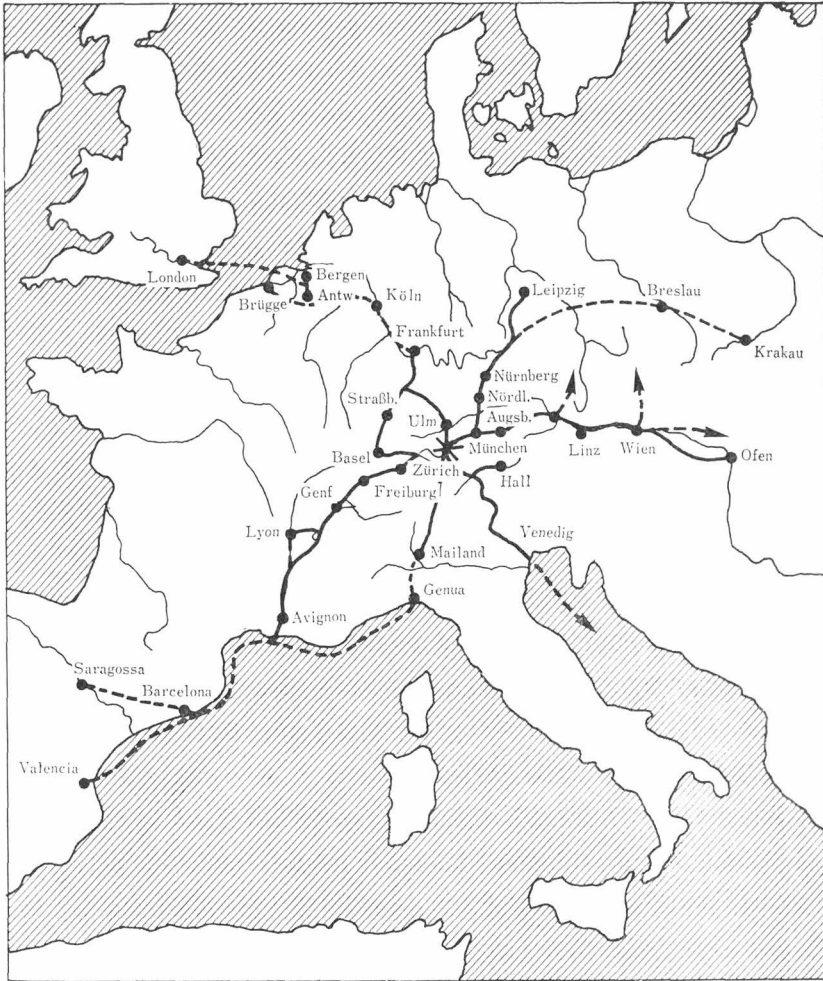
図 5-2 フォーリン・ウェルザー商事会社の活動地域
 (年号は、確認されている最も古い取引年代を示す)



- ▲ フォーリン商事会社の1498年以前の支店
- △ フォーリン・ウェルザー商事会社の支店で、フォーリン会社時代の関係が強いもの

出典：Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 147.

図 5-3 中世都市イスニーにおける麻織物輸出市場



出典：Isny 1365-1965, 600 Jahre Freie Reichsstadt, hrsg. v. der Stadt Isny, 卷末。

上に述べたリヨンの支店の延長には、スペインのサラゴッサ (Saragossa)、図 5-2には記入されていないがアルビゴイス (Albigois)、マデイラ (Madeira) にも支店が置かれていた。さらに、これは16世紀に入ってからであるが、ポル

トガルのリスボン (Lissabon) にも新しく支店が開設されている。これはアントワープ支店の開設とともに、16世紀初頭の西ヨーロッパ貿易構造の転換に対応した営業活動の拡大とみることもできるが、しかしそれ以前にもその周辺地域において取引がなされていたことを示すものにもなっている。

以上はフォーリン (Vöhlin) 会社が設置した支店の所在都市である。このほか支店が設置されていたかいないか確証のない都市 (たとえば Gadiz など)⁴⁾ もあるため、ここに述べる支店設置地域だけが会社にとっての営業範囲であったとはけっして断定できないが、一応その存在によって活動の範囲を知るのはできよう。こうしてみると、やはり会社にとっての重要な営業地域としては、この時代にラーフェンスブルクその他の南ドイツの都市に発展した数多くの商事会社とほぼ同様に、まず地中海・イタリア商業圏と、その延長ともいえる南フランス・スペイン地域に目をむける必要があるであろう。そして次にはメミンゲンからみて東地域にあたる東ヨーロッパおよびその南と北、つまり東南のオーストリア・ハンガリー方面と東北のライプツヒヒ方面、さらに南のイタリアとドイツを南北に貫くライン川中・下流のオランダ・イギリスへの通商路、などである。参考までに、このメミンゲンの近効に位置しやはり南ドイツ麻織物経済圏の主要都市の1つに数えられるイスニー (Isny) の麻織物輸出市場を挙げておきたいと思う。メミンゲン産の麻織物もそれと同様にヨーロッパ各地に販売されていたはずである (図 5-3 参照)。

これらメミンゲンを中心として四方にむかって伸びる通商圏のいずれから発展し始めたのかについても興味のあるところであるが、その点には深く立ち入らないで、それぞれの地域における会社の活動の跡を追っていきたいと思う。

1 イタリア・地中海地域

メミンゲンからアルプス (Alpen) 越えてイタリア・地中海商業圏への通商は、当時 Memmingen—Kempten—Rentte—Fernpaß—Inntal—Innsbruck—ブレナー (Brenner) 峠か、その途中から Landeck—Reischenscheideck—Vintschgau—Bozen—Etschtal—Trient—Sugauertal—Bazzano—Venedig へ

とつづく通商路が使われていた⁵⁾。この通商路は A. ヴェスターマンの説明であるが、同時に別の個所で、メミンゲンの商人がイタリア・Lombardei 地方との通商に用いた道として、Memmingen—Leutkirch—Wangen—Lindau—Bodensee—Chur—, そこから東は、Rabiosatal—Tiesenkasten—Albula—ゼプティマー (Septimer) 峠—Chiavenna—Commo—Mailand へ、Chur から西よりの道は、Reintal—Splügen 峠を越えて、Chiavenna に出てそこから Mailand へつづくという通商路も示されている⁶⁾。これらの通商路を今、正確に跡づけることはできないが、一部この地域に該当する地図を参考までにあげておきたい (図 5-4)。

フォーリン (Vöhlin) 商事会社がその活動を開始する以前のこの南ドイツ・イタリア間における商業取引は、すでに中世盛期の13~14世紀以来知られているところであるが、メミンゲンとベニスとの具体的な取引については、14世紀末、1398年にメミンゲンの商人 Hans Stüdlin の名が知られており、さらに1411年と1432年に南ドイツの9都市がベニスとの取引を行っていた事が確認されている⁷⁾。そしてフォーリン (Vöhlin) 会社との関係は、1478年頃のものが最初のものとして確認されている⁸⁾。それ以後1489年にも取引の証拠があり、この時代にフォーリン会社が Lagnen の地に代表を送っていた事がわかっている⁹⁾。そして1490年代に入るとこのベニスにはフォーリン (Vöhlin) 会社の支店が開設されるまでになっている。つまり1494年にフォーリン (Vöhlin) が独自の支店 (Faktorei) を所有していたとの記述である¹⁰⁾。さらに1493年に会社がベニスに出向いていたという事実もある¹¹⁾。

1490年代のフォーリン会社のベニスでの活動は、フォーリン会社に所属する商人・従業員の活動によっても裏付けられる。1494年以後のベニスの支店における見習い商人 (Lehrlinge) は Hans Pfister であったし、支店経営に携わったのは上にもすでにみたように Hans Stebenhaber と Hans Lauginger の2人であった¹²⁾。そしてこの時代にはさらに1496年に Anton Welsler と Konrad Vöhlin の2人がアウクスブルクの商人として皇帝マキシミリアン (Maximilian) からベニスの総督 (Dogen) への手紙の中に紹介されているという上に

みた事実もあった。これもこの間の活動をよく物語るものであるといえる。

南ドイツ各地の都市とイタリア・ベニスとの商業取引にとって欠くべからざる役割を演じていたものに、ベニスにおける有名なドイツ商館 (Fondaco dei Tedeschi)¹³⁾の存在があったが、1496年の記録に、フォーリン商事会社所有の事務所 (Kammer) がこの商館内に存在していた事実は、会社の活動を直接物語るものである¹⁴⁾。このドイツ商館内に会社独自の出張所の存在が確認されているのは、1496年が最初であるが、そのほか1505年と1508年にも、ドイツ商館内に出店を構えているドイツ商人リストのなかに、フォーリン (Vöhlín) 商事会社の名がみとめられている¹⁵⁾。このことから、すでにフォーリン・ウェルザー商事会社となった後の時代に、このベニスとの取引も一層拡大していたものと推測できる。

このベニスでの会社の取引商品の主たるものは、他の南ドイツ諸都市の商事会社の取引商品とほぼ同じように、シュワーベン (Schwaben) やスイス (Schweiz) 各地で織布された麻布を中心とする布織維製品 (Textilerzeugnisse) であった。ベニスはこれらの布製品の販売市場として位置づけられていた¹⁶⁾。そしてその見返り輸入品として重要であったものは、香辛料 (Gewürze) と東邦の物産 (Kolonialwaren) であった。このことも、フォーリン (Vöhlín) 商事会社が他の南ドイツ商人とほとんど同種類の商業取引に従事していたことを物語っている¹⁷⁾。

ベニスと並んで重要な都市となったミラノとの取引も記録されている。A. ヴェスターマン (Westermann) の論文でも、ミラノはベニスやジェノアと並んで説明されているし、ベニスと同じく1490年代の取引が R. アイリッヒ (Eirich) によっても説明されている¹⁸⁾。そして、上にもみたようにこの都市にも支店が設置されていた。1492年には Anton Funcker が支店長であり、1498年にも誰が支店長であったかが記録されているという¹⁹⁾。そしてこの1498年には、ミラノの領主 (Herzog) がフォーリン (Vöhlín) 会社のために通行証 (Passierschein) を発行していたこともすでに上でみた通りである。さらにミラノとの取引で重要なことは、1490年代以降フォーリン会社が進出したオーストリ

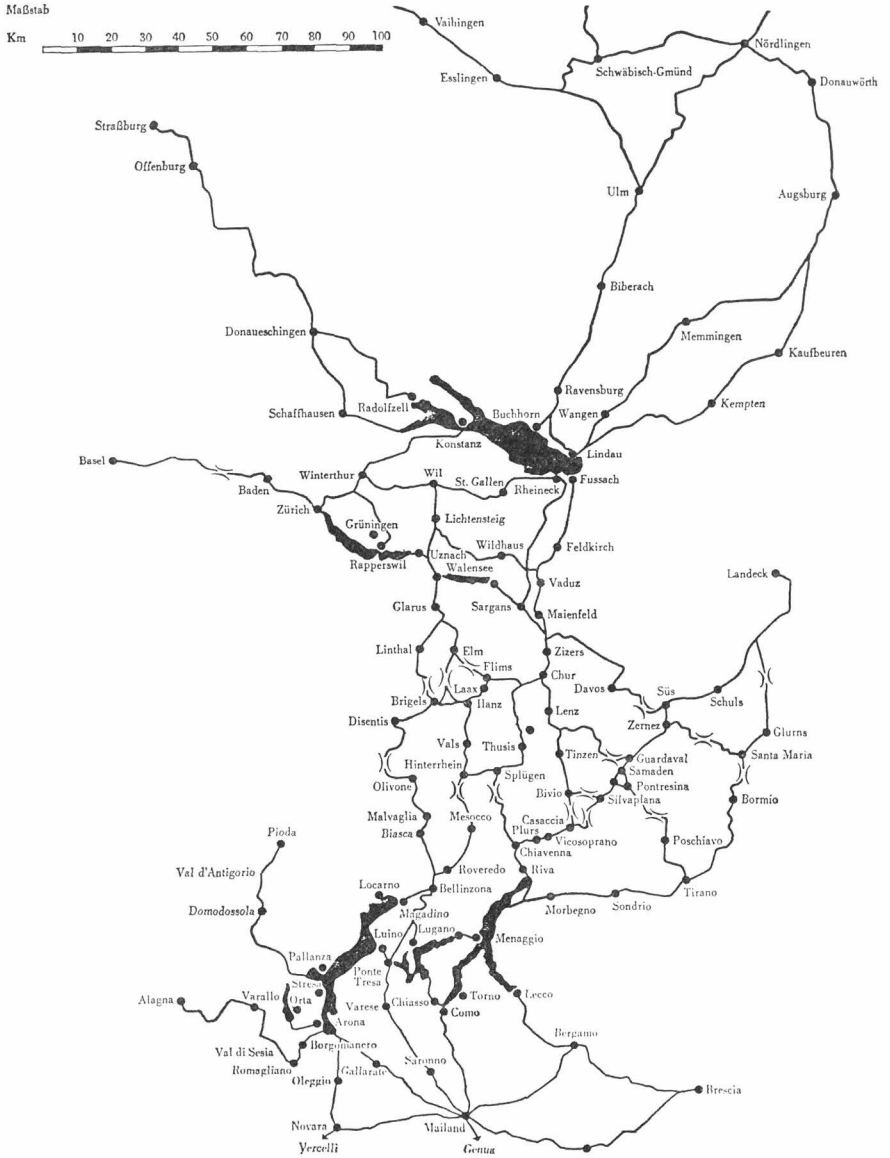
ア・チロルでの銀山経営にあたって、掘り出した銀の販売先にこのミラノなどがあてられていたことである²⁰⁾。こうした銀の供給、販売は、それらの都市が貨幣を鑄造していたためであったが、ミラノのほかにベルン、コンスタンツなどにも供給されていた²¹⁾。

このほかこのミラノにおける会社の活動は、この都市で1496年に行なわれた皇帝マキシミリアン (Maximilian) の戴冠式に会社の代表的商人 Bartholomäus May が Konrad Vöhlin とともに出席していた事で、これによってミラノとの取引関係がかなり大きかったことを知ることができる。さらにミラノの領主 (Herzog) を媒介としたスイスでの取引がなされていたことも伝えられている²²⁾。

ローマにおいては、図 5-2 では支店の開設と、さらに会社の代理人が活躍していた事も明らかであるが、そのほかにメミンゲン出身の聖職者によるローマでの会社にかかわる取引への参加、協力もあって²³⁾、少なからぬ活動がなされていたことが考えられる。とくにローマ法王庁と会社との取引関係、とくにローマ法王庁への送金、納金業務に関するフォーリン (Vöhlin) 会社の活動は、史料に明らかにされている最初のものとしては、1488年になされたものが残っている²⁴⁾。そしてその後もその活動範囲は拡大されたとあるので、他のイタリア都市でもみられるように1490年代に入ってから活動はこのローマにおいてもかなり活発化していたことが予想される。すでに上でみたように、ローマにおける会社の活動は、かの Anton Welser の息子であり、したがって会社にとっても重要な血縁者であった Christoph Welser がこのローマで学んでいたばかりでなく、学位を取得し、その後、法王の家族の1人としての縁戚関係を結ぶことによって一層強まることになった²⁵⁾。会社の重要な商人であるルカス・レーム (Lukas Rehm) との会合もこのローマで行なわれている。それは1500年のことである²⁶⁾。

以上、ベニスやミラノ、ローマなどにおける会社の活動の足跡であるが、イタリア地域に共通してみられた取引内容は、上にみた南ドイツ産布製品のこの地域への輸出と、地中海・アジア物産の南ドイツへの輸入という構成であっ

図 5-4 プントナー峠 (Bündner Pässe) 越えのアルプス通商路



出典：Schnyder, W., *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter*, I. Bd. 巻末。

たが²⁷⁾、そのほかに、南ドイツ麻織業、木綿業、ファスチアン (Barchent) 業に必要な原材料が地中海地域から搬入されるための取引も行なわれていた。例えば、原料用 Baumwolle (木綿) がベニスやジェノア経由で輸入されているし、原料羊毛 (Wolle) が Tortosa から仕入れられてもいる²⁸⁾。フォーリン・ウェルザー会社がこの原料羊毛を、同じく南ドイツを代表する「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」から買入れている例もあるが²⁹⁾、いずれにしてもそうした原材料が南ドイツに輸入されていたことは事実である。さらに南ドイツの近隣都市ケンプテン (Kempten) 産の麻布 (Leinwand) や同じ近隣のイスニー (Isny) 産ファスチアン織布 (Barchent) がジェノアの大市に持ち込まれたり、ベニスでの販売だけでなくベニスを經由してレバント (Leband) 貿易、アジア貿易 (Orient) にも進出していたことも明らかである³⁰⁾。

以上のようにイタリア・地中海商業圏においてのフォーリン (Vöhlin) 会社の得意とする営業活動は繊維製品の販売 (Tuchgeschäft) であったが、それは、この南ドイツーイタリア間の途上に位置したスイスの各都市における活動の記録においてもみとめられるものである。たとえば、フライブルク (Freiburg im Üchtland) においても、フォーリン会社は、1491年以来、無地 (weiß) と正方形布 (gevierten Tüchern) の生産すべてを支配して買い集めた³¹⁾、ほどの活動を行なっている。さらにスイスの国境よりイタリアに入った、やはりこの商業通商圏の途上に位置するコモ (Como) においても、会社は毛織業における間屋制前貸形態 (Verlagssystem) の支配を通して毛織物生産者を営業下においていた³²⁾。もともとこのコモ (Como) にも会社の支店がおかれていた。その支店長が1498年に死亡した記事が伝えられていることや、又1499年頃には Abruzzen 地方との取引が盛んとなり、とくに会社にとって重要なサフラン (Safran) の仕入が頻繁に行なわれたことなどがわかっている³³⁾。

また上にのべたフライブルク (Freiburg im Üchtland) にも支店が設置されており、そこを拠点にして、ツウルザッハ (Zursach) の大市取引にも参加していたことが明らかである。このフライブルク (Freiburg im Üchtland) の支

店は、上の繊維製品の仕入れだけでなく、フォーリン会社にとっては主要商品ではなかったものの布製品と並んで頻繁に取引された毛皮製品の仕入れにとっても重要であった。つまりフォーリン会社はこの支店を介して、スイス各地の毛皮・皮なめし業者と取引を行なったのである³⁴⁾。このフライブルクの他には、上にみたようにベルンにも支店が設置され、1495年頃にその存在が確かめられる活動を行なっている。さらにイタリアの南部 Terradi Bari では、1498年以前にすでにこの会社の取引が行なわれていたことが図5-2に示されている。

このほか、フランスのリヨン (Lyon) も会社にとっては重要な拠点であったが、この都市での会社の活動は後段の南フランス・スペイン商業圏の項で扱いたいと思う。

以上、フォーリン (Vöhlin) 商事会社のこの地域での取引は、取扱商品としてはその第1に南ドイツ各地の繊維製品、特に麻を中心とした布と、その見返りとしてイタリア商人の手を経由したアジアの物産、とくに香辛料、さらにイタリア・スイスの一部から仕入れられたサフラン (Safran) 等々にその大半をみることができる。オーストリア・チロルへの進出にもなって進んだ鉱山・貨幣取引はこの後16世紀のフッガー (Fugger) 時代の到来を予想させる³⁵⁾。しかも扱われた商品が、鉄、銀、銅、金鋼砂 (Schmirgel) と多く、とくにメミンゲン産大カマ (Sense) などが重要であった³⁶⁾。このほか、会社にとって重要な商品としての砂糖の存在も見過がせない。砂糖・香辛料・サフランが会社にとっての主要三大輸入商品であったからである³⁷⁾。

また、会社にとって重要な人物であったルカス・レーム (Lukas Rehm) の日記を通して伝えられている活動からも、会社にとってこの地域の商業圏がいかに重要であったかを見ることができるといえる。例えば、1500年以後彼はかなり大規模な旅行を行なっているが、そのなかで、スイスのジュネーヴ (Genf)、ベルン、フライブルク (Freiburg im Üchtand) を訪れて会社関係の会計帖簿を監査して歩いているし³⁸⁾、1511年にはすでに上にみたコンラート (Konrad) の葬儀に参列した後にリヨンでもハンス (Hans) Ⅲの会計帳簿を監査している。この日記のほか、1511年にスイスの Chur 附近で、フォーリン会社、フンピス

(Humpis) 会社, ベッセラー (Besserer) 会社所有の木綿 (Baumwolle) の運搬にあたって会社と運送人との間に争いが生じ, 裁判問題にもなっているが³⁹⁾, このことも, フォーリン (Vöhlin) 会社だけでなくフンピス (大ラーフェンスブルク会社) やベッセラー (Besserer) 会社がこのスイスで活動していたことをよく示すものとなっている。そのほか, 1509年には地中海の船便での会社の商品輸送のさいに海賊に会い, 後にその海賊が捕えられ, 商品はマルセイユに転送されてはいるものの, 商品の返還には1516年までの7年を要した⁴⁰⁾, ことなどが会社のこの地域での活動を示すものとなっている。

注

- 1) アイリッヒの図5-2には近郊都市カウフボイレン, ラーフェンスブルク, レーゲンスブルクの支店は記入されていないが, 図5-2以外の都市にもかなり支店は存在していた。上の3都市のうちカウフボイレンの支店は確認されているし, のこり2都市の支店存在は疑わしいが, その可能性は否定できないという本文の説明があるため, 加えた。Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Anton H. Konrad Verlag, 1971, S. 153.
- 2) ザルツブルクの支店も図5-2には記されていないが, 本文中にはこの都市に支店が存在していたことが明らかである。Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 3) コモも図5-2には記載されていないが, その支店の存在は確かである。Eirich, R., a.a.O., S. 146.
- 4) Eirich, R., a.a.O., S. 153
- 5) Westermann, Ascan, *Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 13.
- 6) Westermann, A., a.a.O., S. 18.
- 7) Westermann, A., a.a.O., S. 13.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 129.
- 9) Eirich, R., a.a.O., S. 145.
- 10) ebenda.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 130.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 134-135.
- 13) Westermann, A., a.a.O., S. 13.
- 14) Eirich, R., a.a.O., S. 145.

- 15) Westermann, A., a.a.O., S. 13. 及び Eirich, R., a.a.O., S. 135.
- 16) たとえばメミンゲンでもフォーリン会社に並ぶ活動を示しているベッセラー商事会社の例でも、各地との取引にあたって売却していたものがこの地域産の麻や木綿を材料とする布製品であったことは、そのニュルンベルク支店によるボヘミアやポーランド方面からの金属鉱石 (Erzen) の買付のさいにも示されている。Westermann, A., Die Besserer-Gesellschaft zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 7, S. 54.
- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 135.
- 18) Eirich, R., a.a.O., S. 133.
- 19) Eirich, R., a.a.O., S. 145及び165.
- 20) Eirich, R., a.a.O., S. 148-9. また当時のミラノは鉄製品の生産でも発展しており、針と釘の製造では他の都市と比較にならず、南ドイツの南事会社とそれを取引していた。Schnyder, Werner, *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter*, Schulthess Polygraphischer Verlag, Zürich, 1973, I. Bd., S. 56.
- 21) Eirich, R., a.a.O., S. 149. さらにこのミラノにおける金属 (Metall) 製品は絹製品と同様に南ドイツ商人の重要な取引商品であった。Westermann, A., *Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, 6. Jg., Nr. 3, S. 18.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 23) Eirich, R., a.a.O., S. 145.
- 24) ebenda.
- 25) Eirich, R., a.a.O., S. 136.
- 26) ebenda.
- 27) ペニス、ジェノアからフォーリン会社が輸入していたものはとくに Ingwer (ショウガ) と Pfeffer (コショウ) であって、たとえば1495年、1496年にはドイツのケルンに大量に運び込まれていた。Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 28) Eirich, R., a.a.O., S. 148.
- 29) ebenda.
- 30) このことは、上にみた南ドイツとイタリアとの仲継地となっていた Bündner Pässe (図 5-4 参照) 地方の商品流通にも明白に示されている。Schnyder, Werner, a.a.O., S. 53.
- 31) Eirich, R., a.a.O., S. 148.
- 32) ebenda.
- 33) このことも、Bündner Pässe 地方に集まる南ドイツ商人がこの地域をサフランの重要な供給基地としていたとする Schnyder の説明の裏付けとなっている。Schn-

- yder, Werner, a.a.O., S. 57 及び Eirich, R., a.a.O., S. 146.
- 34) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 35) たとえばミラノではすでに1472年にフッガーが商館 (Fondaco) を建設している。Schnyder, W., a.a.O., S. 81.
- 36) とくにメミンゲン産の大カマ (Sense) については上に挙げた Eirich, R., の論文 (Allgäuer Kaufleute im Fernhandel mit Sensen im ausgehenden Mittelalter, Verlag für Heimatpflege, Kempten) のほか, Schnyder によっても取り上げられている。Schnyder, W., a.a.O., S. 50.
- 37) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 38) Eirich, R., a.a.O., S. 154.
- 39) ebenda
- 40) ebenda

2 スペイン・ポルトガル, 南フランス地域

イタリア・地中海商業圏とならんで重要であったのはこのスペイン (Spanien) 及び南フランスとの貿易であつた。とくに16世紀初頭にポルトガルのリスボン (Lissabon) が突然ともいふべき急激さでヨーロッパ貿易界に登場するにいたつて, その重要性は不動のものとなつた。

フォーリン (Vöhlin) 会社にとって, この方面での重要な都市はフランスのリヨン (Lyon) とスペインのサラゴッサ (Saragossa=Zaragoza), さらにポルトガルのリスボンであつた。まず, 支店が設置されていたリヨンには1495年よりも少なくとも数年前から取引が開始されていたこと, さらに1496年のリヨンの大市取引でウルム (Ulm) 出身の Färber-Ehinger 商事会社の Wolf-Färber に支払契約をなしていたこと, がわかっている¹⁾。このリヨンの重要性は地理的な重要性と大市取引の開催による重要性とによつている。後にみるように会社の重要人物であつたルカス・レーム (Lukas Rehm) の商用日記にこのリヨンへの訪問がいかにも多く繰り返されているか, によつてもこの重要性が認められる。A. ヴェスターマン (Westermann) によるリヨンの重要性の説明は, スペインからのサフランの供給・仲継地に求められているが, それもリヨンの地理的位置にもとづくものであつた²⁾。

さらに、サラゴッサ (Saragossa) にも会社の支店が設置され、リスボンにも、バスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) のインドからの帰還後数年を経ないうちに支店開設を実現している。しかし、当時の南ドイツ周辺の商業都市に存在していた商事会社の多くがスペインでの活動の拠点としていたバルセロナ (Barcelona) には、今迄のところ、フォーリン (Vöhlin) 商事会社の活動の跡がほとんど見られないでいる。このことがいかなる事情によるものか、他の商事会社との関係でみなければならぬが、しかしそのことがこのフォーリン会社の活動にとってこの地域の重要性を減ずるものであることはもちろんないと思う。

R. アイリッヒの説明では、フォーリン (Vöhlin) 会社のスペインへの進出はおよそ1480年頃であったとされている。しかし、上にみたサラゴッサ (Saragossa) の支店長に就任していた者で名前が明らかなのはようやくコンラート (Konrad) の長男ハンス (Hans) (1556年没) の時であった。したがって彼以前に前任者がいたとしても、おそらく1480年代より前にまでさかのぼった取引をみることはできないであろう。しかし、その1480年頃のスペインへの進出は、このサラゴッサとの取引であったろうとだけは推測されている³⁾。しかもこのサラゴッサに設置されたフォーリン (Vöhlin) 会社の支店は、1498年にその存在が確認されているのが最初であって、それ以前から存在していた可能性は否定されないものの、けっして1480年代からかなりの取引がなされていた事を意味するものではない。しかもこの支店は、後にフォーリン・ウェルザー会社の所有となったものであって、設立当初は、メミンゲン出身の別の商事会社所属の支店であったものを、後でフォーリン (Vöhlin) が買い取ったものなのであった⁴⁾。したがって、フォーリン (Vöhlin) のサラゴッサ (Saragossa) への進出は、他のメミンゲン出身の商人に対してかなり遅れての進出であったことになろう⁵⁾。

上にみたサラゴッサへの進出にみるように、フォーリン (Vöhlin) のこの地域への進出が拡大したのは、ほぼフォーリン・ウェルザーの合併後であったとみることができる。つまり本店がアウクスブルクに移転した後、

そのアウクスブルクを拠点としてスペイン各地へ、さらにそこからポルトガル (Portugal) へ、さらに海外の各地へと進出を開始したのである⁶⁾。海外への進出の事情については、Konrad Häbler によるウェルザー (Welser) 企業の海外活動に関する説明もあるが⁷⁾、それ以前の事情については、会社にとって重要な役割を果たしたルカス・レーム (Lukas Rehm) のヨーロッパ各地への商用日記の記述によってその概略を知ることができる。彼は 1500年にまず、Avignon, Paris⁸⁾, Rouen, Monlins, Brügge, Tours, Blois を通り、さらにリヨンから Albigeois へと向っている。この Albigeois への商用は第1にサフラン (Safran) の買付けであった。この地で1498年から支店長となっていた Narziß Langinge に会っている。彼はルカス・レームがそれ以前に指導を受けたことのある知友であった⁹⁾。その後彼の旅行は、ジュネーヴ、ベルン、フライブルク (im Üchtland) にまでつづき、それぞれの都市での会社の営業監査の任務に従事したのであった¹⁰⁾。

ルカス・レーム (Lukas Rehm) はその後1501年にはアウクスブルクに滞在したあと1502年には再び商用の旅に出ている。スイスと Savoyen 地方へ、さらに上にみた Albigeois にも再び足を運んでいる。この年に彼はスペインのサラゴッサでサフラン取引を行い、さらに Simon Seitz と Scipio Löwenstein の2人の人物と共同して、このサラゴッサの支店の営業を引き継ぐ、という足跡を残している。このサラゴッサ支店の経営人事の交替の理由も明らかである。それは翌年の1503年にポルトガルのリスボン (Lissabon) に支店を開設する準備のためであった。つまり1502年にこのサラゴッサ支店に勤務していた人物をリスボンに派遣したからであった¹¹⁾。

サラゴッサとの取引の状態を物語るものに、1500年にはフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市にフォーリン会社によるスペインからのサフラン (Safran) の供給は一切なかった、というものがある¹²⁾。これはフォーリン会社のサフラン取引がそれほど活発でなかった事を示すことにもなるが、しかしそれはそのほかの供給地たとえばイタリアのサフラン (Safran) の供給がそれだけ潤沢であったとも考えられるし¹³⁾、あるいは実際にスペインからのサフラ

ンが供給が減少していたことを示すものであるのかもしれない。

1503年になると、スペイン・ヴァレンシア (Valencia) 地方での為替業務がなされている。さらに、上述の Simon Seitz は、ポルトガル国王との契約締結に成功し、ポルトガルにおけるドイツ商人、とくにフォーリン・ウェルザー商人への特別な優遇条件を獲得することをも実現している¹⁴⁾。リスボンにフォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の支店が創設されたのもこの時である。

フォーリン・ウェルザー会社のリスボン支店が会社にとっていかに重要であったか、ベニスに代って一時代を画するリスボンの東洋貿易にいかに南ドイツの商人が大きな関心を寄せたかをみれば容易に想像のつくところであるが、その後の会社の動向はそれを端的に物語っている。まず、1503年の8月にこのリスボンに滞在していた上に述べたルカス・レーム (Lukas Rehm) は、1504年にはポルトガル国王と契約を結んで、ドイツ及びジェノアの商人のアジア通商のための直接航海の許可をとりつけるのに成功した。このドイツ及びジェノア商人による東インド取引への直接参加については、すでに多くの指摘によって明らかなように¹⁵⁾、1505年に実施されたものであったが、フォーリン・ウェルザー会社は他の商人に先んじて、最も多額の資本参加を行なったという¹⁶⁾。その出資額は20,000 Cruzados であった。したがって当然、取引担当者としてフォーリン・ウェルザー会社に関連した人物の参加もなされている。Lech 川沿いの町、Vils 出身の商人 Balthasar Sprenger が会社の代表参加者であった¹⁷⁾。

このドイツ商人など外国商人による東インドへの直接取引は、周知のように第1回目のこの航海に際しては150%という高額の利益をあげる事に成功した¹⁸⁾。しかしその後行なわれた直接取引は種々の理由から大きな損失を被り、フォーリン・ウェルザー会社は手をひかざるを得なくなっている¹⁹⁾。しかし、これに示されるように、リスボンの東インド貿易への優位性は不動のものとなり、イタリア・ベニスの昔日の面影を失わせ、その後アントワープがリスボンに代って浮上するまで²⁰⁾、ヨーロッパ側の中心となったのである。したがって

フォーリン・ウェルザー会社のリスボン支店がいかに重要であったか、になるのであるが、それは当時この支店に6人の専従者 (Gehilfen) が勤務していたことだけによっても、知ることができよう²¹⁾。上にみたベニスの支店ですら2~3名の専従者であったことをおもえば、かなりの力の入れ方であったと言える。

フォーリン・ウェルザー会社だけでなく南ドイツ一帯の商社会社や商人のこの方面への進出は、さらにアフリカ大陸やその周辺の島々にまで達している。それは、上に述べたルカス・レームの商用旅行が Madeira や Azoren の島々、さらに Verde 岬 (Cap Verde) にまで伸張している事にも示されている。それらは R. アイリッヒ (Eirich) の説明ではいずれも会社の砂糖取引のためであった²²⁾。会社はこの取引にもかなりの力を入れていた。それは Palma の地に砂糖プランテーション農場を所有していたことにも示されている²³⁾。

ルカス・レームの商用旅行は再び繰り返され1509年にはアントワープ (Antwerpen), ケルン (Köln), マインツ (Mainz), シュパイアー (Spyer), ウルム (Ulm) と続いて、一度アウクスブルク (Augsburg) に戻り、その後再び Bozen, Trient, ベニス (Venedig), Padua, ローマ (Rom) へとつづき、さらにジェノア (Genua), マルセイユ (Marseille), リヨン (Lyon), パリ (Paris), アントワープ (Antwerpen) へと足を伸ばし、さらにその後で再びリスボンとこの Madeira にまで達したのであった²⁴⁾。この地においても会社は支店を設置していた。この支店には Leo Ravensburger と Hans Schmid なる人物が活躍しており、ルカス・レームが Jakob Holzhoft なる人物と共に彼らを訪ずれたことが報告されている²⁵⁾。

以上のように、スペインのサフラン (Safran) 取引とポルトガルの東インド貿易商品、さらにアフリカ北岸周辺地域の砂糖取引がフォーリン・ウェルザー会社の取引にとってとくに重要であったが、砂糖取引についてみれば、1510年頃をさかいに次第にその重要性を失ったようにも思われる。その理由は明らかでないが、1510年以降、カナリア諸島からは一片の砂糖もドイツ市場には運びこまれなかった²⁶⁾、とする指摘がなされている。

ルカス・レーム (Lukas Rehm) は上にみたように、1511年6月13日にメミンゲンに戻り、コンラートの葬儀“Besingnis von Konrad Vöhlin”，に参列するが、それ以前の1510年にはミラノ (Mailand) で Ulrich Ehinger や Felix Rehm と会い、その後にコンラートの末弟の Hans Vöhlin に会うためにスペインのサラゴッサに向っている²⁷⁾。さらにこのサラゴッサから Barcelona, Perpignan, Wien を経由して再びリヨンに入り、ここで Anton Welser と Hans Hauser とに会っている。その後ジュネーヴ、フライブルク (im Üchtland), ベルン, コンスタンツ, リンダウ (Lindau), メミンゲンと旅を重ねた後、メミンゲン (Memmingen) での葬儀に参列したのであった²⁸⁾。

コンラート・フォーリンの葬儀の後もルカス・レームの旅は続いている。再びリンダウ (Lindau) からコンスタンツ, バーデン (Baden) を抜けてベルン, フライブルク (im Üchtland) を通ってリヨンに到着している。そしてこのリヨンで、父の死によってメミンゲンに移住することになったハンス(Ⅲ)・フォーリンの会計監査を済ませ、さらにパリからアントワープへと向ったのである。当時このアントワープの支店長は Konrad Imhof であった。したがってアントワープの支店は少なくともそれ以前に設立されていたことになるが、後にみるようにその詳しい年代は明らかではない。

ルカス・レーム (Lukas Rehm) の商用旅行はその後1517年まで続いている。1511年のメミンゲンでの葬儀の後、アントワープまでの足取りは上に示した通りであるが、それ以後から、1517年に会社内部に生じた“会計処理 (Generalrechnung)”問題のため²⁹⁾彼が会社を辞職するまでの6年間の旅行日程は明らかではない。しかし彼の商用旅行を通してみることができたスペイン・南フランス地域の重要性はすでに十分明らかであろうと思う。

フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社が対スペイン・南フランス地域で扱っていた商品は、A. ヴェスターマン, R. アイリッヒの2人の研究者によって同様に指摘されているように、南ドイツ産麻布製品輸出とそのそれぞれの販売地において仕入れられる特産品、主としてスペイン各地のサフラン (Safran) の輸入が中心であった。つまりメミンゲンや近隣都市イスニーヤケ

ンブテン、ラーフェンスブルク等々からの麻布やフェスチアン (Barchent) 織布類が輸出の中心であった³⁰⁾。それらがリヨンの大市やスペイン各地、さらには遠くポルトガルや北アフリカ周辺の島々にまで運ばれたのである。

リスボンでの支店経営においてみられるように、その取引を通して、いわゆる東邦の物産が会社の取引に大きな比重を占めたであろうことは容易に想像できる。リスボンを通して取引された商品として挙げられているものは、サフラン、貴金属類、フランダース産布製品、油、ワイン、象牙、木綿、果実類、香辛料、穀物などであった。このリストには入っていないものの、上にみた砂糖取引も一時期会社にとって不可欠の重要商品であったことは間違いない。

注

- 1) Eirich, Raimund, *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 146.
- 2) Westermann, A., *Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 18.
- 3) Eirich, R., a.a.O., S. 146.
- 4) ebenda.
- 5) たとえば Barcelona に進出した南ドイツ商人のなかでまず取り上げられているのは Jörgen Besserer による支店の存在である。Westermann, A., *Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 18.
- 6) Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 7) たとえば, Häbler, Konrad, *Die überseeischen Unternehmungen der Welser und ihrer Gesellschafter*, Leipzig, Verlag von C.L. Hirschfeld, 1903, 等がある。
- 8) このパリの滞在は, フランスの国王 (Krone) との直接取引の件か, あるいはフランスでの会社の取引上の特権に関する目的をもっていた。Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 9) Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 10) ebenda.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 12) ebenda.
- 13) Schnyder の説明でも, 南ドイツ商人のサフラン仕入地は南アラゴン地方やカタルニア地方のほかに, イタリア北部のロンバルディア地方 (Lombardei) とアクイラ

- 地方 (Aquila) とが挙げられている。Schnyder, W., *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter*, I. Bd. S. 57.
- 14) Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 15) たとえば、大塚久雄著『近代欧州経済史序説』、及び『大塚久雄著作集』第2巻、岩波書店、1969年、40頁参照。
- 16) Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 17) ebenda.
- 18) ebenda.
- 19) ebenda.
- 20) ただ、リスボンにオリエントの物産が陸上げされはじめた当初から、ドイツとの取引はそのほとんどはアントワープ経由でドイツ国内に持ち込まれていた。Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 21) Eirich, R., a.a.O., S. 151. また、1510年にこのリスボンには Jakob Ott と Wolf Ott, Gabriel Stüdlin が活動しており、この Stüdlin はルカス・レームのあと支店長についた人物であった。したがってルカス・レームもリスボン支店長の時代であったのである。Eirich, R., a.a.O., S. 152.
- 22) ebenda.
- 23) Eirich, R., a.a.O., S. 152. しかしこの農場は1520年にはケルンの商人に1万1000 fl. で売却されている。またこの砂糖取引については、ラーフェンスブルクの「大ラーフェンスブルク商事会社」がスペインの Gandia に精製工場 (Zuckerraffinerie) を所有していたことが各方面から伝えられている。Schnyder, W., a.a.O., S. 59.
- 24) Eirich, R., a.a.O., S. 152.
- 25) ebenda.
- 26) ebenda.
- 27) ebenda.
- 28) ebenda.
- 29) ebenda.
- 30) ただこの布以外にも、ストラスブルクからのワインをはじめ周辺の産物 (鉄、穀物、香料など) も扱われていた。これらはメミンゲンの他の商事会社、たとえば Zangmeister などでもほぼ同様に扱われていた。Westermann, A., *Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 11. また、スペイン、ポルトガルで扱われたものの中には、Holland 産や Bretagne 産の穀物 (Korn) なども入っていた。会社はこれらも仲介したのである。Eirich, R., a.a.O., S. 149.

3 東ヨーロッパ地域

この方面には、ニュルンベルク (Nürnberg) を拠点としてさらに東の地域、つまりポーランド (Polen)、チェコスロバキア (Tschechoslowakei)、オーストリア (Österreich)、さらに北のドイツ北東地域も含まれる。この方面に存在する都市のなかでフォーリン (Vöhl) 会社の支店が設置されていたのは、上にみたように、ニュルンベルク、ウルムの支店は除いても、ウィーン (Wien)、チロルのザルツブルク (Salzburg)¹⁾、プラハ (Prag)、ライプツヒヒ (Leipzig) などであり、それぞれの支店を中心にその地域との取引が行なわれていた。

ニュルンベルクの支店が会社の経営にとっていかに重要であったかは、すでにこの都市での支店開設が遅くとも1453年であり、この方面にかぎらず会社のすべての取引先のうちでも1, 2を争う歴史をもっていたことに示されている。重要なことはこの数年後の1456年にはすでにウィーンの支店も開設され、さらにその2年後の1458年にはウィナー・ノイシュタット (Wiener Neustadt) の町での取引の事実も明らかになっていることである²⁾。つまり、この東地域の方が、歴史的には、上にみたイタリアやスペイン地域よりもはるかに早い活動を示しているのである。したがってニュルンベルクの活動はそれだけ詳細に、しかもそれだけ豊富に伝えられているとよいと思う。

ニュルンベルクの支店長として名前が最初に挙げられているのはエアハート (Erhard) (初代) である。1453年にすでに支店長としてこの都市で取引に従事していた³⁾。その後1480年代までの活動は明らかではないが、1482年に支店長となっていたのは Bernhard Walter であり⁴⁾、彼は1492年にもこの都市の支店長として記録されていることから、おそらくその間10数年をニュルンベルクで活動していた事が推測される。このワルター (Bernhard Walter) は、上にみた通り、その後コンラート (Konrad) の時代には会社の全権委任支店長 (Procuratorfaktor)⁵⁾ といいわば会社の幹部役に就任する。それだけニュルンベルク支店長及びその支店長の経歴の長さが評価されたとも思えるが、この B. ワルター (Walter) の後任には、すでに上でみた通り⁶⁾、1493年以後 Jakob Welser が数回にわたって就任し、さらに1504年には Jakob Sattler、1507年に

は Christoph Scheuerl が就任している。

こうしたニュルンベルク支店の活躍は、すでに上でみたように、1511年の頃には、ニュルンベルク最大の商品取扱い商人、としての評価を得るまでに発展していた⁷⁾。取扱った商品については、輸出品に亜麻を中心とする繊維製品であることは他地域に対してと変りないが、輸入する商品については、金属商品の比重が高くなっていることが特徴である。とくに鉱産物の取引が重要であった。R. アイリッヒ (Eirich) の説明では、鉄製品の取引については何の説明もないとされているが、しかし銀の取引が重要であったことは認めている⁸⁾。上にみたようにチロル (Tirol) の鉱山経営は、1490年以後に着手され⁹⁾、それ以後イタリアのミラノ (Mailand) やスイスのベルン (Bern) など貨幣鑄造都市に供給されていた。この取引にニュルンベルク支店が介入していた事は、コンスタンツ (Konstanz) の市参事会が1499年にフォーリン・ウエルザー会社に銀の取引のことで接触しており、その接触の理由が、金属関係に強いフォーリン (Vöhlin) 会社という会社に対する高い評価の故であったこと¹⁰⁾、によっても示されている。それ以前にコンスタンツ (Konstanz) に対して支配権を握っていたのが、かの「大ラーフェンスブルク商事会社」であったこと、しかもそれを排してフォーリン (Vöhlin) 会社が選ばれたことは、当時ニュルンベルクから数多くの金属製品がこの都市に供給されていたことと、そのニュルンベルクでのフォーリン会社の実力を明示するものといえる¹¹⁾。また、布の輸出についての記事には、1482年にニュルンベルク支店からチェコスロバキアのプラハの商人に15反 (Stück) の麻布を売却したというものがある¹²⁾。R. アイリッヒによれば、それが伝えられている最初の史実であるが、イスニー (Isny) やケンプテン (Kempten) 産の麻布やファスチアン織布がきわめて大量にウィーンやライプツヒヒに向けて輸出されていた。ウィーンやライプツヒヒとこのニュルンベルクとの関連の強さからみて、それらの多くがこの支店を経由していたことはまず間違いないところである。

オーストリア (Österreich) のウィーンの状態はどうであったろうか。すでにみた通り支店の存在は1456年に確認され、その時の支店長に Ulrich Scheir-

mair というウルムの都市貴族商人が就任していた。この人物は上にみたように、初代エアハートの妹アンナ (Anna) の夫である Hans Schermair の兄であった。つまり最初に述べたようにフォーリン会社のウィーンでの活動はかなり早い時期から開始されていたことになる。ウィーンの近郊のヴィーナール・ノイシュタット (Wiener Neustadt) でも早くから取引が行なわれ、確かではないが、この都市にも支店が存在したことをうかがわせる記述がなされている¹³⁾。プラハでも取引があり、支店も開設されていた。

ウィーンとその周辺におけるこの会社の取引で重要なものは、家畜額の取引であった。詳細な史料や数字での裏付けをもって説明できるものではないが、当時、ニュルンベルク・ウィーン方面からの食用家畜の供給はスペインやイタリアからのサフラン (Safran) にも匹敵する重要性を持っていたということが出来る。フォーリン (Vöhlín) 会社の取引は、1457年にこのウィーンで食肉屠殺業者との家畜取引を締結している¹⁴⁾にとどまるが、そのほかにもこの地域周辺の農村をまわっての仕入れ取引が会社にとってきわめて重要であったことが示されている¹⁵⁾。

北のライプチヒにおいても、ウィーンと全く同様に、南ドイツ産麻布がかなり大量に売却されていた。この都市の支店には上でみたように、ニュルンベルク支店長であった Bernhard Walter の実の弟 Hieronymus Walter が支店長として就任していたが、この人物はもともとニュルンベルクの兄のもとで経験を積んでいた人物であった¹⁶⁾。このライプチヒでは1,508年に市民権を取得し、その前の1506年に市内の Peter 通りに1個建の住宅を買い取ってもいた¹⁷⁾。かなり安定した営業を続けていたことが予想されよう。そしてその営業の柱は、メミンゲンから送られてくる麻布の販売であった。ライプチヒにおける会社関係の商人については、さらに Walter の先任者として活躍した Ezechiel Renscher の名前が知られている。上の Walter は兄のニュルンベルク支店長と同じくメミンゲン出身の商人であった。

以上のように、東と北の地域においても、麻布の販売とその販売先で仕入れられるそれぞれの特産品、たとえばニュルンベルクの鉄・金属製品やウィーン

からの家畜などの取引が中心であった。ライプツヒヒから仕入れられたものがほとんど伝えられていないが、ウルムの仕入れ商品のなかにワックス (Wacks) や穀物 (Getreide), ラード (Schmalz) などが入っており¹⁸⁾, それらの多くはこのライプツヒヒ支店を経由してきたものではないかと思われる。このウルムの支店では1505年頃にはウルムの市民 Michael Pflaum が支店長となり¹⁹⁾, メミンゲンやアウクスブルクの中心地に次ぐ重要な拠点となっていた²⁰⁾。したがってこの支店に集められ、又発送される商品の多くはほとんどその出先の支店に関連するものであったとみる事ができる。販売されていた布も麻布に限らず、ビロード布 (Samt) や絹 (Seide), アラス布 (Arras) なども含まれ、Mecheln や Leyden, アムステルダム (Amsterdam) などから仕入れられたものもあった²¹⁾。それほか、胡椒を代表とする東邦の物産である香辛料, サフラン, ショウガ, 真珠, ワックスなども扱われていた。

以上のほかには、ウィーンにむかう途上にあるザルツブルク (Salzburg) にも支店がおかれ、1508年の支店長には Adam Schweckowitz が就任していたこと、ウィーンには上でもみたルカス・レーム (Lukas Rehm) の日記によって、1501年にウィーン (Wien) の近郊の St. Antonie に立寄っていたことなどがわかっている²²⁾。また、1490年代の会社の為替業務には、ニュルンベルク, フランクフルト (Frankfurt am Main), アウクスブルク, ウルムの4つの都市が最も重要な役割を果たしていたのであったが²³⁾, それもやはりこの東・北方面との商品取引上の重要性和密接に結びついていたということがいえるであろう。

さらにこの方面での中心都市の1つであったライプツヒヒ (Leipzig) の重要性を物語るものに次のような史実がある。すでにフォーリン (Vöhlin) 家によってウェルザー (Welser) 家が主導権を握っていた1528年に、なおライプツヒヒの支店長として活躍していた Hieronymus Walter を通して、すでに上にみた当時会社と協力関係にあった Hans Ehinger が西インド諸島のサント・ドミンゴ (Saint Domingo) 島への鉱山労働者 (Bergknappen) をこのライプツヒヒで募集していたのである²⁴⁾。これらの鉱山労働者はハンブルク (Ham-

burg), アントワープ (Antwerpen) を経由してセビリヤ (Sevilla) に送られたのであったが²⁵⁾, 時代がかなり下っているとはいえ, Welser 会社の下でのライプツヒ (Leipzig) の重要性をよく示すものといえるであろう。

注

- 1) A. ヴェスターマンによれば, Linz の大市にメミンゲンの商人が多数活躍しており, 通商路としては Ulm からドナウ川の船輸送によったり, また, 陸上通商路は, Windelheim-Landsberg-München-Oetting が用いられていた。Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 12-13, 及び, Eirich, R., *Memmingsens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 146.
- 2) Eirich, R., a.a.O., S. 147.
- 3) Eirich, R., a.a.O., S. 144.
- 4) Eirich, R., a.a.O., S. 133.
- 5) ebenda.
- 6) 拙稿「中世ドイツ都市メミンゲンにおける商事会社と貿易活動」その(2), 『桜美林エコノミックス』第20号, 1988年6月, 67-68頁も参照いただきたい。
- 7) Eirich, R., a.a.O., S. 134.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 148. アルプス越え Bündner 地方の峠を越えてイタリア地方に運びこまれている金属製品の最も重要なもののなかでも, やはりこのニュルンベルクからの銀や銅, 錫, 金剛砂 (Schmirgel) が筆頭であって, そこには鉄製品のことは述べられていない。Schnyder, W., *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter*, I. Bd., S. 46-50.
- 9) A. ヴェスターマンによれば, メミンゲン出身商人のチロルでの中心地は Schwarz であった。Westermann, A., a.a.O., S. 13.
- 10) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 11) さらにヴェスターマンによれば, チェコスロバキアのボヘミア地方 (Böhmen) との銅や銀の取引がこのニュルンベルクを経由して行なわれていたのであった。Westermann, A., a.a.O., S. 11.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 147.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 144.
- 14) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 15) Eirich, R., a.a.O., S. 149. さらに A. ヴェスターマンによっても, 家畜取引が Bayern や Österreich, Ungarland にまで拡大して行なわれていた事が示されている。Westermann, A., a.a.O., S. 10. また, Bündner 地方の峠越えて, 南ドイツと

- くにニュルンベルクからの家畜類の獣皮がイタリア方面にかなり輸出されている。このこともニュルンベルクの家畜取引の状態を示すものであろう。Schnyder, W., a.a.O., S. 46.
- 16) Eirich, R., a.a.O., S. 144.
- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 153.
- 18) Eirich, a.a.O., S. 149. また、南ドイツ商人がイタリア・ロンバルド地方とジェノヴァに大量の Wachs を運びこんでいる。これらの仕入元は東部 (Osten) ヨーロッパからとなっているが、ライプツヒヒ周辺も無関係ではなかったと思われる。Schnyder, W., a.a.O., S. 46.
- 19) 1508年からは Hans Altensteig が支店長になっている。Eirich, R., a.a.O., S. 153.
- 20) メミンゲンの周辺にはそのほかカウフボイレ (Kaufbeuren) にも支店がおかれ、Hans Maier が1508年頃に支店長になっている。Eirich, R., a.a.O., S. 153. さらにウルムでは、Garnmarkt 隣の Münzhaus を使用しており、賃貸料として1505年から10年間に50 fl.を支払う契約が結ばれている。Eirich, R., a.a.O., S. 153
- 21) ebenda.
- 22) Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 23) Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 24) Eirich, R., a.a.O., S. 171, および本書, 第2章, 80ページ参照。
- 25) ebenda.

4 ライン川中・下流地域

ドイツ中部とさらにライン (Rhein) 川下流地域を含む商業圏のなかで、フォーリン (Vöhl) 会社の支店が設置されていたのは、マインツ (Mainz), ケルン (Köln), アントワープ (Antwerpen) などであった。この地域にはメミンゲン (Memmingen) —ニュルンベルク (Nürnberg) の中間に位置したノルトリンゲン (Nördlingen) の大市と、マイン (Main) 川流域のフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市という当時の重要な市場2つが存在していた。これらの大市開催都市を加えて、さらにライン川下流に位置し、16世紀以来急激に商業活動の表面に登場するアントワープ (Antwerpen) 等での活動がこの方面での会社の主要な内容となっている¹⁾。

すでに上にもみた通り、ノルトリンゲンの大市へのフォーリン (Vöhl) 会

社の登場は1469年であったが、フランクフルトの大市への登場は、1478年、いづれもフォーリン商事会社の比較的早い時代であった²⁾。このフランクフルトの大市への会社の参加に直接従事して、商品の供給と買入れに活動していたのが、マインツ (Mainz) の支店であった。そのマインツ支店の存在が史料に確認されているのは1508年、支店長はファウト (Claus Faut) である³⁾。このときには、ケルン (Köln) までの輸送用の船の調達にあたっていたことが報告されている⁴⁾。

ケルン (Köln) の支店については、上の図5-2では1474年に取引がなされていたことが示されているが、それ以外に上にみたようにエアハート (Erhard) IIの妻 Felizitas Imhofの兄の Andreas Imhofが支店長として活躍していたこと、そのほか Peter Lützenkirchnerなる人物が1483年に活躍していたことなどによって、この支店の存在が裏付けされている⁵⁾。この1483年には、フォーリン (Vöhlín) 会社はこのケルンを經由して、Bergen op Zoomの地に対して取引を行なっている⁶⁾。そしてその数年後には、フォーリン会社に所属する商人が16世紀の重要都市アントワープにおいてさえ活躍するまでになっている。つまり、おそくも1488年からこのアントワープに滞在した Ludwig Reihing (“Rührig”) である⁷⁾。彼の家族はそれ以前には Eßlingen とアウクスブルク (Augsburg) に定住していた。そして、会社にとっての重要商人である Jakob Welser がこのアントワープに登場するのは、その数年後のことであった。彼は会社の代表 (Vöhlínvertreter) としてこのアントワープに登場している⁸⁾。そのことから、フォーリン (Vöhlín) 会社のアントワープ支店の開設はおそらくこの Jakob Welser の時代になされたものであったろうと、推測されているが、その詳しい年代は明らかではない⁹⁾。

しかし、フォーリン会社のアントワープ支店は、ウェルザー (Welser) との合併後の1506年には、この都市に建物を獲得するまでに発展した。“金のバラ” (ein Hans zur Golden Rose) 館と称されたこの支店の存在は¹⁰⁾、そのまま16世紀初頭から急激に脚光をあびたリスボン (Lissabon) —アントワープの発展と密接に結びついているものである。つまり南ドイツ資本のこの方面への進出

を端的に物語るものである。そのほか1509年には後に会社の経営にタッチする Bartholomäus Welser がこのアントワープで活動しており、また1521年のアントワープ支店長として Gabriel Stüdlin が、1525年には Alexi Grimmel の名前が記録されている¹¹⁾。この Gabriel Stüdlin は、すでに1510年にはリスボンの Welser 支店長として活躍し、不確かではあるがポルトガル商人の娘と結婚し、1512年から18年までメミンゲンの“大商人ツunft”に属し、その後1521年から1526年までアントワープに活躍した人物であった¹²⁾。つまりリスボンからアントワープへの商業史上の中心移行が、この人物の活動によっても裏付けられる可能性をもっているのである。いずれにしても、フォーリン (Vöhlin) ・ウェルザー (Welser) 企業のリスボン、アントワープへの進出の早さとその力の入れ方をよく理解することができよう。

この方面において販売された商品の大部分が南ドイツ産麻織製品であったことは疑いない。詳細な販売の記録は残されていないが、フランクフルト、ノルトリンゲンのそれぞれの大都市に運びこまれた商品としてのほかに、1488年にマインツ (Mainz) 選帝侯領内での2バレン (Ballen) の麻布の粉失の事件があり¹³⁾、それが麻布取引を示す例となっている。そのほか、1488年と1494年には同じ地域内におけるビロード布 (Samt) 取引の例も報告されており、会社が同時に各種の布の販売を行っていたことを示している。

フォーリン (Vöhlin) 商事会社が布製品一般に力を入れていた事は上にもみたが、そうした布の供給元として、このライン (Rhein) 川下流及びイギリス (England) 市場が果していた役割も見逃せないであろう。オランダやイギリス産布の販売である。つまり、フォーリン (Vöhlin) 会社も、比較的遅い時期、したがって早くとも15世紀末頃から、オランダやイギリス産の布を買入れ始めており¹⁴⁾、それを各地で売却したのであった。また、スペインやポルトガルに対してオランダ産穀物 (Korn) の輸出も行っていた¹⁵⁾。16世紀初頭の取引の例である。

以上のほかに、南ドイツ、オーバー・シュワーベン (Oberschwaben) 地方からの輸出商品としては、ラーフェンスブルクなどでもかなり発達していた製

紙商品を挙げることができる。紙そのものの製造とその販売である。麻布と並ぶ大きな産業としての製紙業の発達が、このオーバー・シュワーベン一帯にみられていたからである¹⁶⁾。フォーリン (Vöhlin) 商事会社は、麻紙 (Leinwandpapier) をフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市取引に持ち込んだ最初の商人であったとされている¹⁷⁾。

以上、ライン (Rhein) 川下流地域との取引も、取引開始の時代の早さからみても、商品の量や種類の面からみてもけっして他の地域に見落りするものではないはずであるが¹⁸⁾、残念ながらそれをフォーリン (Vöhlin) 会社の具体的な取引のなかに数多く見出すことはできなかった。とくに、イギリス (England) との取引については、ただ1箇所、イギリス産の布の販売の例をみるにとどまり¹⁹⁾、ほかに何らの取引の例も見い出されてはいない。しかし、フランクフルトの大市への進出やさらにアントワープ (Antwerpen) での活躍が物語るように、フォーリン (Vöhlin) 会社がこの地域への動きに機敏に対処していたことは容易に理解できるのである。

注

- 1) A. ヴェスターマンによると、メミンゲン—フランクフルト間の通商は通常、Memmingen-Ulm-Eßlingen-Bietigheim-Elsenzthal-Einsheim-Neckergemünd-Heidelberg-Darmstadt-Frankfurt であった。Westermann, A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, Nr. 3, S. 12.
- 2) Eirich, R., *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 145. この当時、多くの南ドイツの都市の商人がこの大市の取引に参加している。たとえば Augsburg の商人は1333年, Ulm の商人は1339年, Ravensburg の商人は1353年にそれぞれこの大市にはじめて登場している。メミンゲンの商人は Lindau の商人と同じく14世紀中には登場していたことが伝えられている。Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, in *Alemannisches Jahrbuch*, 1953, S. 267-269. 及び拙稿「南ドイツ麻織業とヨーロッパ輸出市場」『桜美林エコノミックス』第6号, 1978年, 36頁参照。
- 3) Eirich, R., a. a. O., S. 145.
- 4) ebenda.
- 5) ebenda.

- 6) ebenda.
- 7) Eirich, R., a.a.O., S. 165.
- 8) Eirich, R., a.a.O., S. 145.
- 9) ebenda.
- 10) ebenda.
- 11) Eirich, R., a.a.O., S. 163 及び 154.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 154.
- 13) Eirich, R., a.a.O., S. 148.
- 14) ebenda.
- 15) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 16) たとえばラーフェンスブルクの製紙業は、ドイツ最古の製紙用施設 (Papiermühle) が1324年に設置されたなど、ドイツの製紙業の指導的地位にあった。Dreher, Alfons, *Geschichte der Reichsstadt Ravensburg*, Anton H. Konrad Verlag, Weil-Benhorn, 1972, II. Bd. S. 510. 及び Westermann, A., a.a.O., S. 11. さらに南ドイツの製紙業が発展する以前にはイタリア産の紙がアルプス越えでドイツやスイスに持ち込まれていた。それは14世紀初頭から行なわれ、南ドイツで製紙業が開始された後でも継続されていた。Schnyder, W., *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter*, I. Bd. S. 61.
- 17) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 18) もともと南ドイツの中小都市の麻織業と商業の発展のきっかけは、すでにみたようにライン川下流地域、ベルギー・オランダやイギリス地域等々からの布の輸入と販売とであった。それははやくも12世紀にまで逆のぼれるのである。拙稿「南ドイツの麻織業とヨーロッパ輸出市場」『桜美林エコノミックス』第6号, 1978年, 35頁参照。
- 19) Eirich, R., a.a.O., S. 148.

第6節 フォーリン・ウェルザー商事会社の社会経済史的背景

1498年の合併をはさんでその前後におよぶフォーリン・ウェルザー商事会社の時代的背景には、15世紀後半から16世紀初頭にかけての、いわば中世末期から近世初頭にかけてのヨーロッパ商業史上の一大転換の時代を求めることができると思う。とすれば、フォーリン (Vöhlin), ウェルザー (Welser) それぞ

れの商事会社が活動の根拠地とした南ドイツの経済社会が、中世末期から近世にかけてどのような動向を示し、そしてどのような推移をたどったかは、少なくともこの一商事会社の活動のなかにおいても示されていなければならない。

いわゆる西南ドイツ麻織業圏、あるいはボーデン・ゼー (Bodensee) 湖畔を中核とする麻織業経済圏は、かのフッガー (Fugger) 家の始祖の Hans Fugger が麻織匠であったことにも示されるように、この地域に栽培される亜麻、大麻を材料とする麻布織業を生産的基礎としていた。15世紀中頃に登場してきたフォーリン (Vöhlin) 商事会社の主たる営業活動もそうした地元の生産活動に基礎をおく販売活動と、その見返りとしてのヨーロッパ各地の商品取引であったことは間違いない。それはこの地方に散在した各都市都市に発達した多くの商事会社の例によってもはっきりと示されているものである。

ところで、こうした商品取引と並行して、フォーリン (Vöhlin) 商事会社の各商人が力を注いだものに、土地への投資、つまり不動産取得と貨幣取引があった。すでに上にみたように、フォーリン (Vöhlin) 会社のそれぞれの時代を背負う代表的商人が、それぞれかなりの不動産の取得のために多額の資金を投入していたし、さらに15世紀末葉から16世紀にかけては、会社は貨幣・為替取引にも傾倒していった。イタリア地域での例をみても、1488年にはローマ (Rom) への為替取引を行なっている。この時のローマ法王庁への送金業務がフォーリン (Vöhlin) 商事会社にとって法王庁にかかわる最初の送金業務とされているが¹⁾、それ以後90年代に例のチロル (Tirol) 鉱山業への進出がなされたのであった。したがってこの1490年代になって会社の支店が置かれている重要都市間の振替送金業務が活発化したことは、すでに上にみた通りである²⁾。そして、15世紀末葉から16世紀の初頭にかけてのリスボン (Lissabon)、さらにはアントワープ (Antwerpen) の発展にもなう会社の進出によって、この方面に多額の出資がなされたであろうことは疑いない。アントワープの支店は、すでにバスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) の第1回のリスボン帰港以前の1490年代末にはほぼ開設されていた可能性は強いし、リスボン支店は1503年の開設であった。商品取引以上に多額の出資がこの地域になされていたことは、その数

年後の東インドへのドイツ商人による直接取引の開始にも示されている。それは、商品売買取引以上に投資による利益追求がかなり一般化していた事を示すものであろう。上にもみた通り、フォーリン・ウェルザー会社とポルトガル国王との取引に関する特権的契約の締結にみられる両者の接近も³⁾おそらく1503年頃になされていたスペイン・Valencia 地方との貨幣振替業務活動の進行の事実⁴⁾と合せて考えれば、国王に対しても何らかの貨幣取引が行なわれた可能性をうかがうことはできる。

フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 会社の貨幣取引にさいして、アウクスブルク (Augsburg) の国際商業上の地位の高さも重要であった。当時のアウクスブルクが国際的な貨幣取引の中心地となっていたからである⁵⁾。その意味から考えれば、1498年の両社の合併後、本店をアウクスブルクに移した理由も明らかとなるであろう。そして、貨幣あるいは為替取引の顧客として重要な役割を果たしたものは、法王、国王、あるいはその他の諸侯⁶⁾であったことも間違いない。たとえばメミンゲン (Memmingen) の近隣地域であるヴェルテンベルク (Württemberg) 侯に対して、フォーリン (Vöhlin) 会社は1488年に教会説 (Gebühren) の送金業務を請負っている⁷⁾し、さらに1496年にはバルトロモイズ・マイ (Bartolomäus May) がコンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) と共にミラノ (Mailand) に滞在しているが、それは上にもみたように皇帝マキシミリアンの戴冠祝典のためでもあったが、この時にミラノの領主 (Herzog) からスイス人への年金支給の業務にも携わったともみられているからである。その件でバルトロモイズ・マイはスイスのベルン (Bern) に登場し、きわめて重要な役割を果たした⁸⁾、と記されている。

さらにフォーリン (Vöhlin) 商事会社の営業分野には、軍隊への傭兵募集業務 (Truppengestaltung) も入っており、具体的な内容は明らかではないが、それによってかなりの利益をあげたはずであったとみられている⁹⁾。

1500年代に入ると、フォーリン (Vöhlin)・ウェルザー (Welser) 商事会社の封建諸侯との結びつき、とくに貨幣貸出はますます増加する。たとえば1500年には、アントン・ウェルザー (Anton Welser) とコンラート・フォーリン

(Konrad Vöhl) が4,000フローリン (fl.) を皇帝の財務長官 (Kanzler) Johannes Waldner なる人物に貸出している¹⁰⁾。R. アイリッヒ (Eirich) によれば、当時こうした貸出を求める封建諸侯が列をなしていたという。そうした例は、1507年のブランデンブルク (Brandenburg) の辺境伯 (Marktgraf) のローマへの送金に対する手形貸付、又、1511年にはメミンゲン周辺の土地領主 Truchseß Jörg von Waldburg への1,000フローリン (fl.) の貸付にもみるることができるのである¹¹⁾。

以上のような封建領主に対する貨幣貸付業務は、すでにあまねく知られているカール (Karl) V 世への選挙資金援助において、かのフッガー (Fugger) 家に劣らない貸付をウェルザー (Welser) 家がなしたことにも示されている¹²⁾。これらはこの時代の典型とすることができるであろう。

以上のように、フォーリン・ウェルザー商事会社は、15世紀末期から16世紀にかけての西ヨーロッパ商業史上の一大転換、つまり東インドへの直接取引の開始と西インドへの段階的な進出という大きな転換の歴史をその時代的背景に擁していた。それは会社のリスボンやアントワープへの進出、北アフリカ沿岸の島々への進出などにみる事ができる。ただ残念ながら、当時イタリアのベニス (Venedig) との取引がリスボンの台頭によってどの程度衰退したか、についてはみることができなかった。R. アイリッヒによって、リスボンの台頭以後、ベニスはまたたく間にその地位を交代した、の表現はなされているものの、その後のドイツ商館 (Fondaco dei Tedeschi) の衰退の状態などには何ら明らかな説明はなされていない。

そうした外的な背景は同時に、フォーリン・ウェルザー商事会社の営業において、従来の商品取引に加えて、貨幣・手形取引の増加傾向としてみとめることができるはずである。もともと、フォーリン (Vöhl) 会社とウェルザー (Wesler) 会社の合併そのものが、アウクスブルクに本店をおくウェルザー (Welser) 会社の営業にいわば組み込まれた形態であったとも言えるからである。フォーリン商事会社のウェルザーとの合併以前の時代には数多くみられた土地・不動産への投資、つまり封建地主化は、ウェルザー (Welser) との合併

後はそれほど多くなったとは思えないが、やはり継続されていたことは疑いない¹³⁾。

1511年のコンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) の死後、会社の営業はしだいにウェルザー (Welser) 商人の主導となったが、それは16世紀のフッガー (Fugger) とならぶ世界的企業にまで継続されていく。しかし、後のフッガー企業にもみるように、その企業としての発展はわずかに数世代の歴史をみるにすぎず、経局、そのまれなる巨大な資本蓄積もそれを後代に発展させることなく姿を消すことになるのである。

最後にフォーリン・ウェルザー会社の発展はそれぞれ時代を代表する大商人の活動に多くを負っていたのであるが、そうした人的な結合に多くを依存する組織が常にかかえていた問題、という例を、上に述べたルカス・レーム (Lukas Rehm) の退職にかかわる事例で詳しくみたいと思う。ルカス・レームは1517年頃迄商用の旅を続けていたが、この1517年に生じた会社幹部間の意見の食い違い、つまり会計処理方針 (Generalrechnung) をめぐる会社上層部の意見対立によって、彼は、Andreas Rehm, Hans Rehm, Ulrich Honold, Jakob Welser らと共に会社を脱退することになったのである¹⁴⁾。Jakob Welser は脱退後ニュルンベルク (Nürnberg) に新しく Welser 会社を設立し¹⁵⁾、ルカス・レーム (Lukas Rehm) もまた Ulrich Honold, Jerg Meiting, さらにルカスの2人の兄弟と共に独自の会社を設立するにいたっている¹⁶⁾。そして、ウェルザー (Welser) 会社に出資されていた彼の出資金9,440フローリン (fl.) は、その後4回にわたるフランクフルトの大市での支払いを通して、全額彼に払い戻されたと記されている¹⁷⁾。

以上のように、ルカス・レーム (Lukas Rehm) のウェルザー (Welser) 会社の脱退は、Anton Welser, Bartholomäus Welser, Peter Haintzel, Hans Haintzel, Larziß Lauginger, Simon Seitz, Hans Vöhlin などとの会社経営方針をめぐる対立を直接の原因として行なわれたわけで¹⁸⁾、これによってウェルザー (Welser) 会社が資金面でも人材面でも大きな損害を被ったことは間違いない。つまりここにもみるように、当時の会社の存続は、そこに活動する商人

の活動とその商人間の結びつきだけに大きく依存する、組織としてはきわめて不安定なものであったといえることができるのである。

コンラート・フォーリン (Konrad Vöhlin) とアントン・ウェルザー (Anton Welser) という2人の代表的人物の死後、ウェルザー (Welser) 商人の主導で営業された会社のその後の発展の歴史は、A. ヴェスターマン, R. アイリッヒの2人の研究のいずれによっても跡づけられてはいない。16世紀になお各地で活躍する Welser 企業との系譜の問題は今後の課題としなければならないが、15世紀から16世紀にかけて中世都市メミンゲン (Memmingen) に存在した数多くの商事会社のなかで、このフォーリン (Vöhlin) 商事会社は、アウクスブルクを中心とするウェルザー (Welser) 企業との合併を通しての発展のなかに、当時のドイツの商業史上の1つの典型を求めることができるのである¹⁹⁾。

注

- 1) Eirich, R., *Memmingsens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, S. 145.
- 2) たとえば1510年にローマ法王は、4,000 Dukatenの手形 (Wechsel) による送金をこのフォーリン・ウェルザー会社を通して行なっている。Eirich, R., a.a.O., S. 135.
- 3) Eirich, R., a.a.O., S. 151.
- 4) ebenda.
- 5) 中世末期には手形取引 (Wechselgeschäft) はすべての都市で実施されていたわけではなかった。ごく大規模な都市だけに限定され、またその都市の政策とも結びついていた。たとえばメミンゲンは1490年代に手形取引を閉め出す方針をとっている。このためフォーリン会社にとってはとくにニュルンベルク、ウルム、アウクスブルクが重要となったのである。Eirich, R., a.a.O., S. 134及び150.
- 6) Eirich, R., a.a.O., S. 149.
- 7) ebenda.
- 8) ebenda.
- 9) これはアイリッヒが、フォーリン会社の研究者 Nübling の説として紹介しているもので、これについてのアイリッヒの説明はなされていない。Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 10) Eirich, R., a.a.O., S. 153.
- 11) ebenda.
- 12) Eirich, R., a.a.O., S. 150.
- 13) コンラート・フォーリンの不動産への投資やその子のハンス (Ⅲ) の不動産取得

- は決してそれ以前に劣るものではない。拙稿「中世ドイツ都市メミンゲンにおける商事会社と貿易活動」(その2), 『桜美林エコノミックス』第20号, 70-75頁参照。
- 14) Eirich, R., a.a.O., S. 152.
- 15) その Welser 会社は, メミンゲンにも支店を開設したが, その規模はアウクスブルクのものとの Welser とは比較にならない小規模なものであった。Eirich, R., a.a.O., S. 152.
- 16) Eirich, R., a.a.O., S. 153.
- 17) ebenda.
- 18) 1508年の会社の役員 (Gesellschafter) は, Anton Welser, Marx Pfister, Konrad Vöhlin, Ludwig Reihing, Wolf Pfister, Jakob Welser, Hans Pfister, Konrad Imhof, Anton Lauginger, Peter Haintzel, Hans Lauginger, Naziß Lauginger, Ulrich Honold, Hans Haintzel, Wilhelm Haintzel, Andreas Rehm, Bartholomäus Welser, Simon Seitz の18名であった。Eirich, R., a.a.O., S. 154.
- 19) このフォーリン・ウェルザー商事会社の会社としての形態がどのようなものであったか, には何ら触れてこなかったが, この南ドイツの各地の都市に一般的であった, 同族会社 (Familienfirmen) としての企業という A. ヴェスターマンの指摘だけを挙げておきたい。当然ながらそこには, 従業員 (Angestellte) と出資社員 (Geschäftsteilhaber) の区別はあり, 会社の代表的商人の多くは後者に属していた。また会社 (フォーリン) の商号の存在とその図形もアイリッヒによって紹介されているが, 株式会社への先験的形態として注目された近隣都市ラーフェンスブルクの「大ラーフェンスブルク商事会社」との企業形態の比較等については, 今後の課題とするつもりである。Westermann A., Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1920, S. 19.

主要参考文献

- Abel, Wilhelm, Zur Entwicklung des Sozialprodukts in Deutschland im 16. Jahrhundert, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 173, 1961, S. 448-489.
- , *Agrarkrisen und Agrarkonjunktur in Mitteleuropa vom 13. bis zum 19. Jahrhundert*, Hamburg und Berlin, 1966. (寺尾誠訳『農業恐慌と景気循環』未来社, 1972年.)
- , *Massenarmut und Hungerkrisen im vorindustriellen Deutschland*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1972.
- , *Massenarmut und Hungerkrisen im vorindustriellen Europa*, Verlag Paul Parey, Hamburg und Berlin, 1974.
- Ammann, Hektor, Karten zur Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte (VSWG)*, XIX. Jg., S. 269ff.
- , Genfer Handelsbücher des 15. Jahrhunderts, in *Anzeiger für Schweizer Geschichte*, 1920, S. 12ff.
- , *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft, Ein Beitrag zur Handelsgeschichte des 15. Jahrhunderts*, Fehr'sche Buchhandlung, St. Gallen, 1928.
- , Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, in *Hansische Geschichtsblätter*, 72. Jahrgang, Böhlauverlag, Münster, Köln, S. 1ff.
- , Zur Geschichte der wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Oberdeutschland und dem deutschen Nordosten im Mittelalter, in *Schlesische Geschichtsblätter*, 1977, S. 49ff.
- , *Die Wirtschaftsstellung St. Gallens im Mittelalter*, Druck von W. Kohlhammer, Stuttgart Fehr'sche Buchhandlung, St. Gallen, 1928.
- , Die wirtschaftliche Bedeutung der Schweiz im Mittelalter, in *Historische Aufsätze Aloys Schulte zum 70. Geburtstag*, Druck und Verlag von L. Schwann, Düsseldorf, 1927, S. 112ff.
- , Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz, in *Zeitschrift für Schweizerische Geschichte*, 23. Jg., 1943, Zürich, S. 329ff.
- , Die Bevölkerung von Stadt und Landschaft Basel am Ausgang des Mittelalters, in *Basler Zeitschrift für Geschichte und Altertumskunde*, 49. Bd., Verlag der Historischen und Antiquarischen Gesellschaft Universitätsbibliothek, Basel,

- 1950, S. 25ff.
- , Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, in *Alemannisches Jahrbuch*, 1953, S. 251ff.
- , Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, XIII. Jg., 1954, S. 150ff.
- , Wirtschaftsbeziehungen zwischen Oberdeutschland und Polen im Mittelalter, in *VSWG*, 48. Bd., 1961, S. 432-443.
- , Der Verkehr über den Pass von Jougne nach dem Zollregister von 1462, in *Mémoires et documents publiés parla socié histoire et d'archéologie de Genève* T. XL (Genève 1961) Mélanes offrts áM, Paul-E Martin, S. 223ff.
- , *Die wirtschaftliche Stellung der Reichsstadt Nürnberg im Spätmittelalter*, Selbstverlag des Vereins für die Stadt Nürnberg, 1970.
- , Deutsch-Spanische Wirtschaftsbeziehungen bis zum Ende des 15. Jahrhunderts, in *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1970, S. 132ff.
- Anglés, Higinio, Austausch deutscher und spanischer Musiker im 15. und 16. Jahrhundert, in *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, Spanische Forschungen der Görresgesellschaft, 16. Bd., 1960, S. 166ff.
- Aubin, Gustav, Die Leineweberzeichen in Zittau, Bautzen und Görlitz, Darstellung und Urkunden, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 104. Bd., Jena, 1915, S. 577ff.
- , Die Berufe der Stadt Bautzen in Handel und Gewerbe vom 15. bis 18. Jahrhundert, in *VSWG.*, XV. Bd.
- , Aus der Frühzeit des deutschen Kapitalismus, in *Zeitschrift für das Gesamte Handelsrecht und Konkursrecht*, 84. Bd., Verlag von Ferdinand Enke, 1921, S. 422-458.
- , Der Einfluß der Reformation in der Geschichte der deutschen Wirtschaft, in *Hallische Universitätsreden*, 44. Bd., Max Niemeyer Verlag, Halle. 1929.
- , Die Wirtschaftsnot des deutschen Ostens, in *Hallische Universitätsreden* 48. Bd., 1930.
- , Leinenerzeugung und Leinenabsatz im östlichen Mitteldeutschland zur Zeit der Zunftkäufe, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart, 1940.
- , Bartolomäus Viatis, Ein Nürnberger Großkaufmann vor der Dreißigjährigen Kriege, in *VSWG.*, 33. Bd., 1940.
- Aubin, Hermann, Die Anfänge der großen schlesischen Leineweberei und-handlung,

- in *VSWG.*, 35. Bd., 1942.
- , *Das westfälische Leinengewerbe in Rahmen der deutschen und europäischen Leinwanderzeugung bis zum Ausbruch des Industriezeitalters*, Vortragsreihe der Gesellschaft für westfälische Wirtschaftsgeschichte, Heft 11, Dortmund, 1964, S. 5ff.
- , Die Stückwerker von Nürnberg bis ins 17. Jahrhundert, in *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, Wiesbaden 1965.
- (hrsg.), *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1965.
- Baasch, Ernst, Hamburgs Seeschifffahrt und Warenhandel vom Ende des 16. bis zur Mitte des 17. Jahrhunderts, in *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte*, 9. Bd., 1894, S. 295-420.
- Bauer, Clemens, Die europäische politische Situation von 1559 und ihre finanziellen Hintergründe, in *Historisches Jahrbuch im Auftrage der Görres-Gesellschaft*, 53. Bd., 1933.
- , *Unternehmung und Unternehmungsformen im Spätmittelalter und in der beginnenden Neuzeit*, Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1936.
- , Die wirtschaftlichen Machtgrundlagen Karls V., in *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 15. Bd., 1960, hrsg., v. Johannes Vin'cke, Münster, 1960, S. 219ff.
- , Conrad Peutinger und der Durchbruch des Neuen Ökonomischen Denkens in der Wende zur Neuzeit, in *Clemens Bauer Gesammelte Aufsätze zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, 1965, Herder Verlag, Freiburg, Basel, Wien, S. 253ff.
- Bauer, Lothar, Die italienischen Kaufleute und ihre Stellung im protestantischen Nürnberg am Ende des 16. Jahrhunderts, in *Jahrbuch für Frändische Landesforschung*, 22. Bd., 1962.
- Bayer, Günther, *Memmingen in Historischen Bildern*, Verlag Memminger Zeitung, 1983.
- Below, Gustav von, Die Schädigung der Rheinfischerei durch die Niederländer in der zweiten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1896, 4. Bd., S. 119-125.
- , Zur Geschichte der Handelsbeziehungen zwischen Süddeutschland und Italien, in *Historische Zeitschrift*, 53. Bd., 1902, München, S. 215ff.
- , Die Frage des Rückgangs der wirtschaftlichen Verhältnisse Deutschlands vor

- dem Drißigjährigen Krieg, in *VSWG.*, VII. Bd., 1909.
- Beutin, Ludwig, Zur Entstehung des deutschen Konsultswesens im 16. bis zur Mitte des 17. Jahrhunderts, in *VSWG.*, XXI. Bd., 1928, S. 438-448.
- , Deutscher Leinenhandel in Genua im 17. und 18. Jahrhundert, in *VSWG.*, 24. Bd., 1931, S. 157-168.
- , Der wirtschaftliche Niedergang Venedigs im 16. und 17. Jahrhundert, in *Hansische Geschichtsblätter*, 76. Jg., 1958, S. 42-72.
- Bechtel, H., *Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, Deutschlands, 1967.
- Blitz, Rudolph C, Mercantilist Policies and the Pattern of World Trade, 1500~1750, in *The Journal of Economic History*, Vol. 27 1967, pp.39-55.
- Bodensee Chronik*, 17. Jg., Nr. 3, 1928, Die Leinenweberei und Barchentweberei in Konstanz und die Exportgesellschaft der Muntprats, S. 11-12.
- Bohnsack, Almut, *Spinnen und Weben, Entwicklung von Technik und Arbeit im Textilgewerbe*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Hamburg, 1981.
- Boll, Walter, *Das Handelshaus der Reutinger zu Regensburg: Ein Spiegel süddeutschen Rechts-, Handels- und Wirtschaftslebens im ausgehenden 14. Jahrhundert*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1976.
- Bowden, Peter J., Wool Supply and Woollen Industry, in *The Economic History Review*, 1956~57, Vol. IX., pp.44-58.
- , *The Wool Trade in Tudor and Stuart England*, Frank Co & Co. LTD., 1971.
- Bog, Ingomar, *Der Aussenhandel Ostmitteleuropas 1450~1650*, Böhlau Verlag, Köln Wien, 1971.
- Borah, Woodrow, *Early Colonial Trade and Navigation between Mexico and Peru*, University of California Press, Berdeley and Los Angeles, 1954.
- Braun, Uli und Walter, *Eine Stunde Zeit für Memmingen*, Verlag der Memminger Zeitung, 1982.
- Brading, D.A., Cross, Harry E., Colonial Silber Mining: Mexico and Peru, in *The Hispanic American Historical Review*, Vol. 52, 1972.
- Branstein, Philippe, Venedig und der Türke 1450~1570, in *Die wirtschaftlichen Auswirkungen der Türkenkriege*, v. Othmar Pickl, Graz, 1971.
- , Wirtschaftliche Beziehungen zwischen Nürnberg und Italien im Spätmittelalter, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnberg* 1. Bd., Im Selbstverlag des Stadtrats zu Nürnberg, 1967.
- Brentano Lujo, Über den grundherrlichen Charakter des hausindustriellen Leinengewerbes in Schlesien, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1893,

1. Bd., Freiburg.
- Buszello, Horst, Köln und England. 1468~1509, in *Mitteilungen aus dem Stadtarchiv*, Köln, 1971.
- Bückling, Gerhard, *Die Bozener Märkte bis zum Dreißigjährigen Kriege*, Verlag von Duncker & Humblot, Leipzig, 1907.
- Büttner, Heinrich, Die Bündner Alpenpässe im frühen Mittelalter, in *Geschichte, Wirtschaft, Gesellschaft*, Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte, Duncker & Humblot, Berlin, 1965, S. 242ff.
- Carande, Ramón, Zum Problem einer Wirtschaftsgeschichte Spaniens, in *Historische Zeitschrift*, 193 Bd., 1961.
- Carus-Wilson, E.M., The Origins and early Development of the Merchant Adventurers Organization in London as shown in their own Medieval Records, in *The Economic History Review*, Vol. IV, 1932, 34, pp. 147-176.
- , Trends in the Export of English Woollens in the 14. Century, in *The Economic History Review*, 1950~1951, pp. 162-179.
- Cobb, Gwendolin B., Supply and Transportation for the Potosí Mines 1545~1640, in *The Hispanic American Historical Review*, Vol. 29, 1949.
- Daenell, E., Zu den deutschen Handelsunternehmungen in Amerika im 16. Jahrhundert, in *Historische Vierteljahrschrift*, hrsg. v. Gerhard Seelinger, XIII Jg., 1910, Leipzig, S. 183ff.
- Dertsch, Richard, *Die Urkunden der Stadt Kaufbeuren 1240~1500*, Verlag der Schwäbischen Forschungsgemeinschaft, Augsburg, 1955.
- Dreher, Alfons, *Das Patriziat der Reichsstadt Ravensburg von den Anfängen bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts*, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1966.
- , *Geschichte der Reichsstadt Ravensburg und ihre Landschaft von den Anfängen bis zur Mediatisierung 1802*, Anton H. Konrad Verlag Weißenhorn, 1972.
- Dietrich, Richard, Untersuchungen zum Frühkapitalismus im Mitteldeutschen Erzbergbau und Metallhandel, in *Jahrbuch für die Geschichte Mittel- und Ostdeutschlands*, hrsg. v. Friedrichneicke-Institut der Freien Universität Berlin, Bd., VII, 1958 Bd., VIII, 1959.
- Dietz, Alexander, *Frankfurter Handelsgeschichte*, Druck von Gebrüder Knauer, Frankfurt am Main, 1921.

- Ehrenberg, Richard., Aus der Hamburgischen Handelsgeschichte, in *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte*, 9. Bd., 1894, S. 1-40.
- , *Hamburg und England im Zeitalter der Königin Elisabeth*, Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1896.
- , *Das Zeitalter der Fugger, Geldkapital und Creditverkehr im 16. Jahrhundert*, Bd., I, II, Georg Olms Verlagbuchhandlung, Hildesheim, 1963.
- Eirich, Raimund, Allgäuer Kaufleute im Fernhandel mit Sensen im ausgehenden Mittelalter, Sonderdruck aus *Allgäuer Geschichtsfreund, Blätter für Heimatforschung und Heimatpflege* Nr. 81, Verlag für Heimatpflege, Kempten S. 105ff.
- , *Die Imhof in dem schwäbischen Städten im ausgehenden Mittelalter*, Eirich-Verlag, Ottobeuren.
- , *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Kommissionsverlag Anton H. Konrad Verlag, Ottobeuren, 1971.
- , Bernhard Walter (1430~1504) und seine Familie, Sonderdruck aus *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg* 74. Bd., Nürnberg, 1987, S. 77ff.
- Eitel, Peter, *Die oberschwäbischen Reichsstädte im Zeitalter der Zunftherrschaft*, Müller & Graft, Stuttgart, 1970.
- , Geschichte der Stadt Ravensburg im Überblick, in *Der Kreis Ravensburg*, hrsg. v. Oskar Sailer, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart und Aalen, 1976, S. 92ff.
- , *Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft*, Ravensburger Stadtgeschichte(13), hrsg. v. Ulmer Volksbank Ravensburg, 1984.
- Ember, Gy, Zur Geschichte des Aussenhandels Ungarns im XV. Jahrhundert, in *Etudes Historiques* 1960, Budapest.
- , Ungarn Außenhandel mit dem Westen um die Mitte des XV. Jahrhunderts, in *Der Außenhandel Ostmitteleuropas 1450~1650*, Böhlau Verlag, Köln Wien, 1971.
- Erceg, Ivan, Dubrovnik als Vermittler im Groß- und Fernhandel zwischen dem Osten und dem Westen im 15. und 16. Jahrhundert, in *Der Außenhandel Ostmitteleuropas 1450~1650*, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1971.
- Eulenburg, Franz, Drei Jahrhunderte städtischen Gewerbewesens, Zur Gewerbestatistik Alt-Breslau 1470~1790, in *VSWG.*, II. Bd., Verlag von C.L. Hirschenfeld, 1904, S. 254ff.
- , Die Herkunft der deutschen Wirtschaftsführer, in *Schmollers Jahrbuch*, 1954,

S. 77ff.

Eisele, K.F., YBne im Allgäu in *Isny 1365~1965, 600 Jahre Freie Reichsstadt*, hrsg. v. Stadt Isny.

Falke, J., Oberdeutschlands Handelsbeziehungen zu Südeuropa im Anfang des 16. Jahrhunderts, in *Zeitschrift für Deutsche Kulturgeschichte*, N. Jg., 1859, Nürnberg, S. 601ff.

Feger, Otto, Peter Rüster, *Das Konstanzer Wirtschafts- und Gewerberecht zur Zeit der Reformation*, Kommissions-Verlag Jan Thorbecke, Konstanz, 1961.

Fisher, F.J., Commercial Trends and Policy in Sixteenth-Century England, in *The Economic History Review*, Vol. X, 1939/1940.

—, The Sixteenth and Seventeenth Centuries, The Dark Ages in English Economic History, in *Economica*, 1957.

Fischer, Gerhart, *Aus zwei Jahrhunderten Leipziger Handelsgeschichte 1470~1650*, hrsg. v. Rat der Stadt Leipzig und der Industrie- und Handelskammer, Leipzig, 1929.

Fischer, Wofram, *Beiträge zu Wirtschaftswachstum und Wirtschaftsstruktur im 16. und 19. Jahrhundert*, Verlag von Duncker & Humblot, Berlin 1971.

Fitzler, Hedwig, Überblick über die portugiesischen Überseehandelsgesellschaften des 15.-18. Jahrhunderts, in *VSWG.*, 24. Bd., 1931, S. 282-298.

Frantz, Trudel, *Beiträge zur Geschichte des deutschen Handels mit Nord, Ost- und Südosteuropa vom 16.-18. Jahrhundert*, Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Wirtschafts- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Universität Köln, 1936.

Frahne Curt, *Die Textilindustrie im Wirtschaftsleben Schlesiens*, Verlag der H. Laupp'schen Buchhandlung, Tübingen, 1905.

Friede, Juan, Das Venezuelageschäft der Welser, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 4. Bd., 1967, S. 162-175.

Furger, Fridolin, *Zum Verlagssystem als Organisationsform des Frühkapitalismus im Textilgewerbe*, *VSWG.*, Beihefte XI. Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1927.

Geyrhalter, Eugen, Kaufbeurer Geschlechter, in *Kaufbeurer Geschichtsblätter*, 9. Bd., 1981-83, S. 350ff.

Glauser, Fritz, Der internationale Gotthardtransit im Lichte des Luzerner Zentner-

- zolls von 1493 bis 1505, in *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, 18. Jg., 1968, S. 177-245.
- , Handel mit Entlebucher Käse und Butter vom 16. bis 19. Jahrhundert, in *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, 21. Jg., 1971.
- Goldmann, Alfred, Münz- und Marktrecht im mittelalterlichen Kaufbeuer, in *Kaufbeurer Geschichtsblätter*, 7. Bd., 1975/1977, Nr. 7, S. 191ff., Nr. 8, S. 218ff.
- Gothein, Eberhard, Zur Geschichte der Rheinschiffahrt, in *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, XII. Jg., 1895, Verlag der Fr. Lintz'schen Buchhandlung, Trier, S. 231-256.
- Gramulla, Susanna, Kölner Kaufleute im Handel mit dem Ostseeraum am Ende des 15. und im 16. Jahrhundert, in *Mitteilungen aus dem Stadtarchiv*, Köln, 1971.
- Habermann, Wolfgang und Schlotmann, Heinz, Der Getreidehandel in Deutschland im 14. und 15. Jahrhundert I, II, in *Scripta Mercaturae*, Schripta Mercaturae Verlag, München, 1977/2, 1978/2, 1979/2.
- Hallerstein, Helmut Frhr. Haller v., Grösse und Quellen des Vermögens Hundert Nürnberger Bürger um 1500, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnberg*, Bd., I, Im Selbstverlag des Stadtrats zu Nürnberg 1967.
- Hamilton, Earl J., The Decline of Spain, in *The Economic History Review*, Vol. VIII, 1937/38.
- Haring, Clarence Henry, *Trade and Navigation between Spain and the Indies*, Cambridge Harvard University Press, London, 1918.
- Hartung, J., Die augsburgische Vermögenssteuer und die Entwicklung der Besitzverhältnisse im 16. Jahrhundert, in *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 19. Bd., 1895, S. 169-185.
- , Die Belastung des augsburgischen Großkapitals durch die Vermögenssteuer des 16. Jahrhunderts, in *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 19. Bd., 1895, S. 99-124.
- Hartung, J., *The Spanish Empire in America*, Oxford University Press, 1947.
- , Akten zur deutschen Wirtschaftsgeschichte im 16. 17. und 18. Jahrhundert, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 4. Bd., 1896, S. 224-236.
- Haßler, Ing. Friedrich, *Der Ausgang der Augsburger Handelsgesellschaft, David Haug, Hans Langnauer und Mitverwandte 1574~1606*, Abhandlungen zur Geschichte der Stadt Augsburg, Heft 1, Selbstverlag der Stadt Augsburg, 1928.
- Häbler, Konrad, *Die wirtschaftliche Blüte Spaniens im 16. Jahrhundert und ihr Verfall*, Hermann Heyfelder, R. Gaertners Verlagsbuchhandlung Hermann Hey-

- felder, Berlin 1888.
- , Zur Geschichte des spanischen Kolonialhandels im 16. und 17. Jahrhundert, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, VII. Jg., S. 373-437.
- , Die Fugger und der spanische Gewürzhandel, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, 19. Bd., 1892, S. 25ff.
- , Der Hansisch-Spanische Konflikt von 1419 und die älteren Spanischen Bestände, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1894, S. 47-93.
- , Die finanzdecrete Philipp's II und die Fugger, in *Deutsche Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 1984, S. 276-300.
- , Welser und Ehinger in Venezuela, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, 21. Jg., 1894, S. 66-86.
- , Die Anfänge der Sklaverei in Amerika, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 4. Bd., 1896, S. 176-223.
- , Die Geschichte der Fugger'schen Handlung in Spanien, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Ergänzungsheft I., 1897, Weimar.
- , Die Stellung der Fugger zum Kirchenstreite des 16. Jahrhunderts, in *Historischen Vierteljahrschrift*, 1. Jg., 1898, S. 473-510.
- , Das Zollbuch der Deutschen in Barcelona 1425~1440 und der deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhundert, in *Württembergische Vierteljahrschrift für Landesgeschichte*, Druck von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1901, S. 111-160, S. 331-363, 1902, S. 1-35, S. 352-417.
- , *Die überseeischen Unternehmungen der Welser und ihrer Gesellschafter*, Leipzig, 1903.
- Häne, Johannes, Leinwandhandel und Leinwandindustrie im alten St. Gallen, in *Zwei Abhandlungen zur Kultur- und Wirtschaftsgeschichte der Stadt St. Gallen*, Fehr'sche Buchhandlung, St. Gallen, 1932.
- Häpke, Rudolf, Die Erforschung der hansischen Spanienfahrt, in *Hansische Geschichtsblätter*, 49. Jg., 1924, Selbstverlag des Vereins, Lübeck, S. 147ff.
- Hees, Karl, Ver, Oberdeutscher Handel nach Lyon am Anfang des 16. Jahrhunderts, in *Historisches Jahrbuch*, Verlag J.P. Bachem GmbH, Köln, 55. Bd., S. 75ff.
- , Die oberdeutschen Kaufleute in Lyon im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts, in *VSWG.*, 27. Bd., Verlag von W. Kohlhammer 1934, S. 235-244.
- Heitz, Gerhard, *Die Entwicklung des ländischen Leinenproduktion Sachsens 1470~1555*, AkademieVerlag Berlin, 1961.
- Heil, B., *Die deutschen Städte und Bürger im Mittelalter*, Verlag von B.G. Teubner,

- Leipzig, 1906.
- Helbook, A., Zur Frage der germanischen Wirtschaftskultur, in *VSWG.*, 22. Bd., 1929, S. 17ff.
- Helfferich, Karl, Die geschichtliche Entwicklung der Münzsysteme, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 9. Bd., Jena, 1895, S. 801ff.
- Helmer, Heinrich, *Die Glashütte zu Hall in Tirol und die Augsburgische Kaufmannsfamilie der Höchstetter*, Firma W. & I.M. Salzer, München, 1959.
- Hengstler Albert, *Bürgerlisten der Reichsstadt Ravensburg*, hrsg. v. der Stadtverwaltung Ravensburg, 1959.
- Henning, Friedrich Wilhelm, Die zunehmende wirtschaftliche und soziale Differenzierung in einer obersächsischen Gewerbeexportstadt (Zwickau) bis zum 16. Jahrhundert, in *Scripta Mercaturae*, 1961, S. 23-56.
- , Spanien in der Weltwirtschaft des 16. Jahrhunderts, in *Scripta Mercaturae*, 1969/2, S. 1-37.
- , Handelsordnungen des Mittelalters und der frühen Neuzeit als wirtschaftspolitische Instrumente, in *Scripta Mercaturae*, 1970/2, S. 41-64.
- , Die Handelsfunktionen Breslaus in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in *Scripta Mercaturae*, 1972/2, S. 105-123.
- , Der Ochsenhandel aus dem Gebieten nördlich der Karpaten im 16. Jahrhundert, in *Scripta Mercaturae*, 1973/1, S. 23-50.
- Heyd, Wilhelm, Das Haus der deutschen Kaufleute in Venedig, in *Historische Zeitschrift*, 32. Bd., 1874, München, S. 193ff.
- , *Beiträge zur Geschichte des Levanthandels im XII. Jahrhundert*, Festschrift zur vierten Säcular-Feier der Eberhard-Karls-Universität zu Tübingen, 1877.
- , *Geschichte des Levanthandels im Mittelalter*, Bd. I, II, Verlag der J.G. Cotta'schen Buchhandlung, Stuttgart, 1879.
- , Der Verkehr süddeutscher Städte mit Genua während des Mittelalters, in *Forschungen zur Deutschen Geschichte*, 24. Jg., 1884, Göttingen, S. 215ff.
- , *Die große Ravensburger Gesellschaft, Beiträge zur Geschichte des Deutschen Handels*, Verlag der J.G. Cotta'schen Buchhandlung, Stuttgart, 1890.
- , Schwaben auf den Messen von Genf und Lyon, in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, N.F., 1, Stuttgart, 1892, S. 373ff.
- Hildebrand, B., Vergangenheit und Gegenwart der Deutschen Leinenindustrie, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 13. Jg., 1869, S. 215-251.
- Hildebrandt, Reinhard, Wirtschaftsentwicklung und Konzentration im 16. Jahrhundert

- ert, in *Scripta Mercaturae*, 1970/1, S. 25-50.
- , Augsburger und Nürnberger Kupferhandel 1500-1619, in *Zeitschrift für Wirtschaft- und Sozialwissenschaften*, (Schmollers Jahrbuch für Wirtschafts- und Sozialwissenschaften), 92. Jg., Duncker & Humblot, Berlin, 1972, S. 1ff.
- Die Bedeutung Antwerpens als Bösenplatz 1579, in *Scripta Mercaturae*, 1974/2.
- Hofmann, Carl, *Die Hausweberei in Oberfranken*, Verlag von Gustav Fischer, Jena, 1927.
- Hohls, Hermann, *Der mittelalterliche Leinwandhandel in Norddeutschland*, Inaugural-Dissertation Rechts- und Staatswissenschaftliche Fakultät Vereinigten Friedrichs-Universität Halle, Halle, 1924.
- , Der Leinwandhandel in Norddeutschland vom Mittelalter bis zum 17. Jahrhundert, in *Hansische Geschichtsblätter*, 51. Jg., 1926, S. 116-158.
- Holenstein, Th., *Recht, Gericht und Wirtschaftliche Verhältnisse in den St. Gallischen Stiftslanden und im Toggenburg beim Ausgang des Mittelalters*, hrsg. v. Historischen Verein des Kantons St. Gallen, Verlag der Fehr'schen Buchhandlung, 1934.
- Holmes, G.A., Florentine Merchants in England 1346~1436, in *The Economic History Review*, 1960~61, Vol. XIII. pp.193-208.
- Houtte, J.A. Van, Quantitative Quellen zur Geschichte des Antwerpener Handel im 15. und 16. Jahrhundert, in *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, hrsg. v. Hermann Aubin, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1965, S. 194ff.
- , Stadt und Land in der Geschichte des flandrischen Gewerbes im Spätmittelalter und in der Neuzeit, *Wirtschaft, Geschichte und Wirtschaftsgeschichte, Festschrift zum 65. Geburtstag von Friedrich Lütge*, 1966, S. 90ff.
- Huber, Max, Das Textilwesen Ulms im Mittelalter, in *Schwäbische Donauzeitung vom* 30. 3, 1957, Seite 2-4.
- Hüffer, Hermann J., Deutsch-Spanische Beziehungen unter Kaiser Karl V., *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 14. Bd., hrsg. v. Johannes Vincke, Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung, Münster, 1959, S. 183.
- Hümmerich, Franz, *Die erste Deutsche Handelsfahrt nach Indien 1505/06*, München und Berlin, 1922.

今西正雄「ドイツ中世の社会経済史」Ⅰ、Ⅱ、『同志社経済学』10, 11巻, 1961年。

今西正雄「ドイツ中世中期の歴史像」『同志社経済学』11巻, 1961年。

今西正雄「ドイツ中世後期の様相」Ⅰ,Ⅱ,『同志社経済学』12巻,1962年。

伊藤 栄『西洋中世都市とギルドの研究』弘文堂,昭和43年。

Jahn, Georg, Der Verlag als Unternehmungsform und Betriebssystem im ostmittel-deutschen Leinengewerbe des 16. und 17. Jahrhunderts, in *VSWG*, 34. Bd., W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1941, S. 158ff.

Jansen, Max, *Die Anfänge der Fugger bis 1494*, Verlag von Duncker & Humblot, Leipzig, 1907.

Kadletz, Theodor, Linz und Hollanda, die ersten deutschen Siedler in Amerika und ihre Nachkommen 1535~1935, in *Jahrbuch für auslanddeutsche Sippenkunde*, 1936.

Kaltenstadler, Wilhelm, Handel und Schifffahrt im Mittelmeer während des Mittelalters, in *Scripta Mercaturae*, 1971/2, S. 53ff.

Kahn, Rudolf, *Die Leinenweberei auf der Schwäbischen Alb*, Verlag von Gustav Fischer, Jena, 1924.

Karr, Grete, *Die Uracher Leinenweberei und die Leinwandhandlungskompagnie*, Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1930.

Kammerer, Immanuel, *Isny im Allgäu*, Im Verlag des Heimatpflegers von Schwaben, Kempten, 1956.

Kellenbenz, Hermann, Spanien, die nördlichen Niederlande und der skandinavisch-baltische Raum in der Weltwirtschaft und Politik um 1600, in *VSWG*, 41. Bd., 1955, S. 289-332.

—, Der Pfeffermarkt um 1600 und die Hansestädte, in *Hansische Geschichtsblätter*, 74. Jg., 1956, S. 28-49.

—, Die unternehmerische Betätigung der verschiedenen Städte während des Übergangs zur Neuzeit, in *VSWG*, 44. Bd., 1957, S. 1ff.

—, Unternehmertum im Süddeutschen Raum zu Beginn der Neuzeit, in *Gemeinsames Erbe, Perspektiven europäischer Geschichte*, hrsg. v. Regierungsdirektor Karl Rüdinger, Bayerischer Schulbuch-Verlag, 1959, S. 105ff.

—, Ein Französischer Reisebericht über Nürnberg und Franken vom ausgehenden 16. Jahrhundert, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg* 49. Bd., 1959.

—, Phasen des Hanseatische Nordeuropäischen Südamerikahandel, in *Hansische Geschichtsblätter*, 78. Jg., 1960, S. 87-120.

—, Die westeuropäische Konkurrenz in der Nordmeerfahrt bis ins 17. Jahrhundert.

- ert, in *VSWG.*, 1960.
- , Briefe über Pfeffer und Kupfer, in *Geschichte, Wirtschaft, Gesellschaft, Festschrift für Clemens Bauer zum 75. Geburtstag*, hrsg. v. Hugo Ott, Duncker & Humblot Berlin, S. 203ff.
- , *Sephardum an der Unteren Elbe*, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1958.
- , Nürnberger Handel um 1540, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 50. Bd., 1960, Nürnberg, S. 299ff.
- , Jakob Rehlinger, ein Augsburger Kaufmann in Venedig, in *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, Wiesbaden, 1965.
- , Die Grimaldi und das Haus Habsburg im frühen Jahrhundert, in *VSWG.*, 1961.
- , Einige Aspekte der frühen Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Nordostens von Brasilien, in *Jahrbuch für Geschichte Lateinamerikas*, 1. Bd., 1964.
- , Der italienische Großkaufmann und die Renaissance, in *VSWG.*, 45. Bd., 1968.
- , Die Beziehungen Nürnbergs zur Iberischen Halbinsel besonders im 15. und in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnbergs*, 1. Bd., Im Selbstverlag des Stadtrats, Nürnberg, 1967, S. 456-493.
- , Die wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Antwerpen und Brasilien in der ersten Hälfte des 17. Jahrhunderts, in *VSWG.*, 55. Bd., 1968, S. 449-463.
- (hrsg.), *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, Böhlau Verlag Köln Wien, 1970.
- , Wirtschaftsgeschichtliche Aspekte der Überseeischen Expansion Portugals, in *Scripta Mercaturae*, 1970/2, S. 1-38.
- , Buchhaltung der Fuggerzeit, in *VSWG.*, 58. Jg., 1971.
- , Südosteuropa in Rahmen der europäischen Gesamtwirtschaft, in *Die wirtschaftlichen Auswirkungen der Türkenkriege*, hrsg. v. Othmar Pickl, 1971.
- , Wirtschaftsleben im Zeitalter der Reformation, in *Die Geschichte des einseverarbeitenden Gewerbes in Nürnberg* hrsg. v. Rainer Stahlschmidt, Nürnberger Werkstücke zur Stadt- und Landesgeschichte, 4. Bd., 1971.
- , Nürnberger Frauhändler in Spanien, in *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, Böhlau Verlag Köln, Wien, 1970, S. 197ff.
- , Die fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel vom 15. Jahrhundert bis zum Ende des 16. Jahrhunderts, in *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, Böhlau Verlag Köln Wien, 1970, S. 265ff.

- , *Das Medr'sche Handelsbuch und die Welser'schen Nachträge*, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1974.
- , *The Rise of the European Economy, 1500~1750*, Weidenfeld and Nicolson, 1976.
- , *Deutsche Wirtschaftsgeschichte, Bd., I, II*, Verlag C.H. Beck, München, 1977.
- , *Wirtschaftswachstum, Energie und Verkehr vom Mittelalter bis ins 19. Jahrhundert*, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 1978.
- , *Sechzehntes und siebzehntes Jahrhundert*, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 1979.
- Kern Ernst, Studien zur Geschichte des Augsburger Kaufmannshauses der Höchstetter, in *Archiv für Kulturgeschichte*, 26. Bd., Verlag und Druck von B.G. Teubner, Leipzig und Berlin, 1936, S. 162ff.
- Keutgen, F., Der Großhandel im Mittelalter, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1901, S. 67ff.
- Kirchgässner, Bernhard, Zur Neuordnung der Währungsräume Südwestdeutschlands und der angrenzenden Eidgenossenschaft 1350~1500, in *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, Franzsteiner Verlag GmbH., Wiesbaden, 1965, S. 312ff.
- Klaiber, Ludwig, *Beiträge zur Wirtschaftspolitik oberschwäbischer Reichsstädte im ausgehenden Mittelalter*, 12. Beihefte der VSWG, Stuttgart, 1927.
- Klaveren Jacob van, Die historische Erscheinung der Korruption I, II, III, in ihrem Zusammenhang mit der Staats- und Gesellschaftsstruktur betrachtet, in *VSWG.*, 44. Bd., S. 289-324, 1957, 45. Bd., S. 432-504, 1958, 46. Bd., S. 204-231 1959.
- , *Europäische Wirtschaftsgeschichte Spaniens im 16. und 17. Jahrhundert*, Gustav Fischer Verlag, 1960.
- Klemm, Friedrich, *Zur Kulturgeschichte der Technik*, hrsg. v. Deutschen Museum, Druck Gugath & Sohn, München, 1982.
- Klier, Richard, Der schlesische und polnische Transithandel durch Böhmen nach Nürnberg in den Jahren 1540 bis 1576, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., 1965, S. 195-228.
- , Der Konkurrenzkampf zwischen dem Böhmischem und den Idrianischen Quecksilber in der ersten Hälfte des 16. Jahrhundert, in *Bohemia Jahrbuch des Collegium Carolinum* 8. Bd., 1967, S. 82-111.
- Klváts, Frans, Handelsverbindungen zwischen Köln und Preßburg (Pozsony) im Spätmittelalter, in *Mitteilung aus dem Stadtarchiv von Köln*, Köln, 1914, 14.

- Bd., S. 1-33.
- Kohler, Kurt, *Handelsakten der Ulmer Gesellschaft Färber-Ehinger um 1495*, Verlag Wilhelm Schlecht'sche Buchdruckerei, Böbling, 1968.
- Konetzke, Richard, Der Weltgeschichtliche Moment der Entdeckung Amerikas, in *Historische Zeitschrift*, 182. Bd., München, 1956.
- Krag, Wilhelm, *Die Paumgartner von Nürnberg und Augsburg, Ein Beitrag zur Handelsgeschichte des XV. und XVI. Jahrhunderts*, Verlag von Duncker & Humblot, München und Leipzig, 1919.
- Kramm, Heinrich, Landschaftlicher Aufbau und Verschiebungen des deutschen Großhandels am Beginn der Neuzeit, gemessen an den Familienverbindungen des Großbürgertums, in *VSWG.*, XXK. Jg., 1936, S. 1ff.
- , Zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte von Augsburg und München, in *VSWG.*, 32. Bd., 1939, S. 251ff.
- Kunnert, Heinrich, Nürnberger Montanunternehmer in der Steiermark, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., Nürnberg, 1965.
- Kunze, Arno, *Die Verlagsbeziehungen des Nürnberger Handelskapitals zur sächsisch-böhmischen Leinwand-Produktionsgebiete im 16. und 17. Jahrhundert*, Dissertation der Rechts- und Staatswissenschaftlichen Fakultät, Halle, 1924.
- , *Die nordböhmisch-sächsische Leinwand und der Nürnberger Großhandel mit besonderer Berücksichtigung des Reichenberger Gebietes*, Verlag Gebrüder Stiepel GmbH., Reichberg, 1926.
- , Das oberdeutsche Handelskapital und die Sächsische Leinwand im 16. Jahrhundert, in *Meißnisch=Sächsische Forschungen*, hrsg. v. Woldemar Lippert, Buchdruckerei der Wilhelm und Bertha v. Baensch Stiftung, Dresden, 1929, S. 109ff.
- , Die Baumwollversorgung der Chemnitzer Barchentweberei im 16. Jahrhundert, in *Mitteilung des Vereins für Chemnitzer Geschichte*, XXVI, Selbstverlag des Vereins, 1930, S. 27ff.
- , *Der Frühkapitalismus in Chemnitz, Beiträge zur Heimatgeschichte von Karl-Marx Stadt*, 7, hrsg. v. Rat der Karl-Marx-Stadt, Stadtarchiv, 1958.
- Kuske, Bruno, Die Handelsgeschäfte der Brüder Veckinhusen, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1922, S. 187ff.
- Kömmerring-Fitzler, Hedwig, Der Nürnberger Kaufmann Georg Pock in Portugiesisch-Indien und in Edelsteinland VIJAYANAGARA, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 55. Bd., Selbstverlag des Vereins für Ges-

- chichte der Stadt Nürnberg, 1968, S. 137ff.
- 梶山 力「バーゼル市を中心とする欧州中世の商業路」『社会経済史学』第9巻-3号, 1939年, 41ページ以下。
- 川久保公夫「中世ドイツの麻織物生産とその商品経済化過程」大阪市立大『経済学年報』第9集, 1958年, 41ページ以下。
- , 「ドイツ初期資本主義時代の綿織業とその経営形態」『経済学雑誌』第40巻第4号, 1959年, 1ページ以下。
- , 「ドイツ『初期資本主義』と麻・綿織業の経済構造の特質」『経済学雑誌』第39号第5号, 1958年, 1ページ以下。
- , 「手工業者としてのドイツ麻織匠の歴史」大阪市立大『経済学年報』第11集, 1959年。
- , 「西南ドイツ都市毛織物工業の性格」『経済学雑誌』第33巻, 1~2号, 117ページ以下。
- , 「繊維産業における商人資本と商品生産者」『経済学雑誌』第43巻第1号, 1960年, 23~56ページ。
- , 「近世初期のドイツ繊維産業」『社会経済史大系』Ⅳ, 近世前期Ⅰ, 弘文堂, 1951年。
- , 「中世末期ドイツの繊維産業の経済的特質と都市経済」『社会経済史学』Vol. 24, No. 5~6, 1959年, 31ページ以下。
- , 『ドイツ初期資本主義の経済構造』法律文化社, 昭和35年。
- 北村次一「西南ドイツ都市の手工業規制」『社会経済史大系』Ⅲ, 中世後期, 弘文堂, 1951年, 221ページ以下。
- , 「オーストリア水銀業における初期独占」『社会経済史学』第25巻, 1959年。
- , 「アウクスブルク初期資本家の水銀独占」神戸大学『経済学研究』Vol. 7, 1960年。
- , 『初期資本主義の基本構造』ミネルヴァ書房, 昭和36年。
- , 『ドイツ企業家史研究』法律文化社。
- , 「ドイツ初期資本主義の歴史的前提」『経済学論究』1963年7月, 99~122ページ。
- Lahnstein, Peter, *Schwäbisches Leben in alter Zeit*, Paul List Verlag, München, 1983.
- Lamprecht, Karl, *Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter*, Scientia Verlag Aalen, 1969.
- Layer, Adolf, Aus der Handelsgeschichte, in *Ostallgäu* hrsg. v. Aegidius Kolb, Ewald Kohlder, Allgäuer Zeitungsverlag, Kempten, 1984, S. 597ff.
- Lerner, Franz, Die Auswirkungen der Türkenkriege auf die Reichsstadt Frankfurt am Main, in *Die wirtschaftlichen Auswirkungen der Türkenkriege*, hrsg. v. Othmar

- Pickl, Im Selbstverlag der Lehrkanzel für Wirtschafts- und Sozialgeschichte der Universität Graz, Graz, 1971.
- Liebermann, Jens-Rüdiger, Zur oberdeutschen Geldgeschichte der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberreheins*, 120. Bd., 1972, Karlsruhe, S. 269ff.
- Liesegang, Carl, Deutsche Berg- und Hüttenleute in Süd- und Mittelamerika, in *Ibero-Amerikanisches Forschungsinstitut*, 19. Bd., 1949, S. 7ff.
- Lloyd, T.H., *The English Wool Trade in the Middle Ages*, Cambridge University Press, London, 1977.
- Loeve, Victor, Zur Geschichte des hausindustriellen Leinengewerbes in Schlesien, Der Weberzeins, in *Zeitschrift des Vereins für Geschichte Schlesiens*, 59. Bd., 1925.
- Lösche, Dietrich, *Zur Geschichte der Entwicklung der Produktionsverhältnisse in der Leinen- und Barchentproduktion oberdeutscher Städte, von 1450 bis 1750*, Humboldt-Universität zu Berlin Wirtschaftswissenschaftliche Fakultät, Institut für Wirtschaftsgeschichte/Forschungsseminar von Prof. Kuczynski Arbeitbericht Nr. 3.
- Lütge, Friedrich, Die wirtschaftliche Lage Deutschlands vor Ausbruch des Dreißigjährigen Krieges, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 170. Bd., 1958, S. 43-99.
- , Strukturelle und konjunkturelle Wandlungen in der deutschen Wirtschaft vor Ausbruch des Dreißigjährigen Krieges, in *Sitzungsberichte Bayerische Akademie der Wissenschaften*, 1958, S. 5-28.
- , Strukturwandlungen im ostdeutschen und osteuropäischen Fernhandel des 14. bis 16. Jahrhunderts, in *Bayerischen Akademie der Wissenschaften Philosophisch-Historische Klasse*, Heft 1. Verlag der Bayerischen Akademie, München, 1964, S. 1-56.
- , Der Untergang der Nürnberger Heiltumsmesse, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 178. Bd., 1965, S. 133ff.
- , Der Handel Nürnbergs nach dem Osten im 15./16. Jahrhundert, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnbergs*, hrsg. v. Stadtarchiv Nürnberg Bd. 1, Im Selbstverlag des Stadtrats zu Nürnberg, Nürnberg, 1967, S. 318-376.
- , *Wirtschaftliche und soziale Probleme der gewerblichen Entwicklung im 15.-16. Jahrhundert*, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 1968.
- , *Deutsche Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, 3. Auflage, 1979.

- Mack, Heinrich, Paris, Stefan, Ein Beitrag zur Geschichte der Beziehungen zwischen Frankreich der Hanse und den Niederlanden gegen Ausgang des 16. Jahrhunderts, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1897, S. 91-150.
- Maczak, Antoni, Zusammenhänge zwischen Fernhandel und ungleichmässiger Entwicklung polnischer Wirtschaftsgebiete im 16. und 17. Jahrhundert, in *Jahrbuch der Wirtschaftsgeschichte*, 1971.
- Malowist, M., Poland, Russia and Western Trade in the 15th and 16th Centuries, in *Past & Present*, 13. No, 1958, pp. 26-41.
- Marschall, Hubart, Der Handel der Stadt Wels im 16. Jahrhundert bis zum Bauernkrieg 1626, in *Jahrbuch des städtischen Museums zu Wels*, 1935.
- Maschke, Erich, Verfassung und soziale Kräfte in der deutschen Städte des späten Mittelalters, in *VSWG.*, 46. Bd., S. 19ff.
- Mayer, Josef, Die große Ravensburger Handelsgesellschaft, 1380~1530, in *Bodensee Chronik*, Konstanz, 17. Jg., 1928, Nr. 21, S. 82ff., Nr. 22, S. 86ff.
- Mauerer, A., Ulrich Imholz, Ein Beitrag zur Wirtschaftsgeschichte der Stadt Konstanz aus der Zeit nach dem Konzil, in *Schrift des Vereins für Geschichte des Bodensees und seiner Umgebung*, 44. Heft, 1915, Kommissionsverlag von Joh. Thom. Stettner, S. 93ff.
- Meilinger, Johannes, *Der Warenhandel der Augsburger Handelsgesellschaft Anton Haug, Hans Langenauer, Ulrich Link und Mitverwandt, 1532~1562*, Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde bei der Philosophischen Fakultät der Universität Leipzig, Druck von C. Schulze & Col, GmbH, 1911.
- Mickwitz, Gunnar, Luxus-oder Massenware im spätmittelalterlichen Tuchfernhandel? in *VSWG.*, 32. Bd., 1939, S. 245ff.
- Unsere Stadt Memmingen*, hrsg. v. Landeszentrale für Heimatdienst Verlag Bild & Druck GmbH, München, 1963.
- Mollwo, Carl, Aus einem Kölner Aktenstück über den Besitz der Welser auf den kanarischen Inseln im 16. Jahrhundert, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, 23. Jg., 1896.
- Mone, Franz, Joseph, Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, 4. Bd., Druck und Verlag der G. Braun'schen Hofbuchhandlung, Karlsruhe, 1853.
- , Der süddeutsche Handel mit Vendig vom 13-15. Jahrhundert, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, 5. Bd., Karlsruhe, 1854, S. 1ff.
- , Preise der Colonialwaren und Südfrüchte im 16. und 17. Jahrhundert, in

- Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, 17. Bd., 1865.
- Musäus, Joachim, *Die Leinenindustrie der Niederlausitz in Vergangenheit und Gegenwart*, Staatswissenschaftliche Dissatation zu Universität Halle, Halle, 1922.
- Müller, Johannes, Der Zusammenbruch des Welserischen Handelshauses im Jahr 1614, in *VSWG.*, 1. Bd., 1903, S. 196-234.
- , Die Ehinger von Konstanz, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, N.F., XX. Bd., Heidelberg, 1905, S. 19ff.
- , Das Rodwesen Bayerns und Tirols im Spätmittelalter und zu Beginn der Neuzeit, in *VSWG.*, 3. Bd., 1905, S. 361ff.
- , Geleitswesen und Güterverkehr zwischen Nürnberg und Frankfurt am Main im 15. Jahrhundert, in *VSWG.*, 1907, 5. Bd., Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart, S. 173ff.
- , Die Hauptwege des Nürnbergischen Handels im Spätmittelalter, in *Archiv für Kultur-Geschichte*, 5. Bd., Verlag von Alexander Duncker, Berlin, 1907, S. 1ff.
- , Der Umfang und die Haupttrouten des Nürnberger Handelsgebietes im Mittelalter, in *VSWG.*, VI. Bd., 1908, S. 1-38.
- , Die Handelspolitik Nürnbergs im Spätmittelalter, in *Jahrbücher für National-ökonomie und Statistik*, III Folge 38. Bd., 1909.
- , Der Anteil der Familien Ehinger-Güttingen von Konstanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welser, in *VSWG.*, 22. Bd., 1929, S. 373ff.
- Müller, Karl Otto, *Die oberschwäbischen Reichsstädte, Ihre Entstehung und ältere Verfassung*, Darstellungen zur Württembergischen Geschichte (8), Druck und Verlag von W. Kohlhammer Stuttgart, 1912.
- , *Oberschwäbische Stadtrechte I, Die älteren Stadtrecht von Leutkirch und Isny*, Druck und Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1914.
- , *Oberschwäbische Stadtrechte II, Die älteren Stadtrechte der Reichsstadt Ravensburg*, Druck und Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1924.
- , *Quellen zur Handelsgeschichte der Paumgartner von Augsburg 1480~1570*, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1955.
- Verzeichnis der Veröffentlichungen von Dr. Karl Otto Müller, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, XIII. Jg., 1954, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, S. 3ff.

ージ以下。

- , 「12世紀におけるフランドル地方の経済変革」『社会経済史学』Vol. 17, 1951年, 第5号, 1～23ページ。
- , 『独逸中世史の研究』日本評論社, 昭和18年。
- まつだあきら「バウムガルトナー家企業の展開過程」『乃留米大学商学部創立10周年記念論文集』1960年。
- 松田智雄「フッガー時代(15・16世紀)における南ドイツ」『社会経済史学』第10巻, 昭和16年, 249ページ以下。
- , 「南ドイツ農村麻織物業の類型的特質」『社会経済史学』第11巻, 昭和17年, 156ページ以下。
- , 『ドイツ資本主義の基礎研究』岩波書店, 1967年。
- 宮下孝吉「中世後期におけるオーストリア商業と都市の対外政策」『社会経済史学』第13巻, 昭和18年。
- , 『ヨーロッパにおける都市の成立』創文社, 昭和28年。
- , 「中世後期および近世初期におけるオーストリアの鉄及び塩業」『社会経済史学』第24巻, 1958年。
- , 「16世紀におけるイスパニアの交通事情」関西大学『商学論集』第12巻, 1968年。
- , 「16世紀におけるイスパニアの西インド貿易」関西大学『商学論集』第12巻, 1968年。
- , 「16世紀におけるイスパニアの産業」同志社大学『同志社商学』Vol. 20, 1968年。
- , 「16世紀イスパニアにおける価格革命と財政」関西大学『商学論集』第13巻, 1969年。
- 宮田美智也「『フッガー家の時代』の南ドイツ商人資本について」大阪市立大学『経営研究』第119号, 1972年, 25ページ以下。

Naude, Wilhelm, Deutsche Städtische Getreidehandelspolitik vom 15. -17. Jahrhundert mit besonderer Berücksichtigung Stettins und Hamburgs, in *Staats- und Sozialwissenschaftliche Forschungen*, hrsg. v. Gustav Schmoller, Leipzig, Verlag von Duncker & Humblot, 1889.

Newton, Arthur Percival, *The European Nations in the West Indies 1493~1688*, A&C Black Ltd., London, 1933.

Nirrnheim, H., Ein hansisches Warenverzeichnis aus dem Jahre 1480, in *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte* XV. Bd., 1910.

Nordmann, Claus, Der Einfluß des oberdeutschen und italienischen Kapitals auf Lübeck und den Ostseeraum in der Zeit von 1370~1550, in *Mitteilungen des*

Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg, 35. Bd., J.L. Schrag Verlag, 1937, S. 123ff.

Oohlau, Jürgen U., Neue Quellen zur Familiengeschichte der Spengler, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 52. Bd., 1963/64.

Ostwal, Paul, Nürnberger Kaufleute im Lande des Deutschen Ordens, in *Deutsche Geschichtsblätter, Monatsschrift für Erforschung deutscher Vergangenheit auf landesgeschichtlicher Grundlage*, XV. Bd., 1913.

Otte, Enrique, Die Expedition des Diego Ingenios zur Perleninsel 1528, in *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 14. Bd., hrsg. v. Johannes Vincke, 1959, S. 19ff.

—, Die Welser in Santo Domingo, in *Homenaje A Johannes Vincke*, Vol. II, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid, 1962, S. 475ff.

—, Das Genuesische Unternehmertum und Amerika unter den Katholischen Königen, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 2. Bd., 1965, S. 30-70.

—, Die Negersklavenlizenz der Laurend de Gorrevod, in *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 22. Bd., hrsg. v. Johannes Vincke, Aschendorfsche Verlagsbuchhandlung, Münster & Westfalen, 1965.

—, Träger und Formen der Wirtschaftlichen Erschliessung Lateinamerikas im 16. Jahrhundert, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 4. Bd., 1967, S. 226ff.

—, Die Europäischen Siedler und die Probleme der Neuen Welt, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 6. Bd., 1969, S. 1-40.

大塚久雄「フッガー時代の南独逸における会社企業一会社形態発展史の一断章」東京大学『経済学論集』第2巻第4号, 63ページ以下。

—, 『株式会社発生史論』上下巻, 中央公論社, 1954年及び『大塚久雄著作集』第1巻 岩波書店, 1969年。

鬼塚信彦「14世紀フロレンスの世界貿易の一考察」『社会経済史学』第7巻第2号, 昭和12年, 21ページ以下。

Pach, S.P., Die Getreideversorgung der ungarischen Städte vom XV. bis XVII. Jahrhundert, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 179. Bd., Gustav Fischer Verlag, Stuttgart 1966, S. 140-159.

- , Zur Geschichte der internationalen Handelswege und des Handelskapitals vom 15. bis 17. Jahrhundert, in *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, Akademie-Verlag, Berlin, 1969/III, S. 179-189.
- Pach, Zsigmond Pál, The Rolle of East-Central Europe in international Trade, in *Etudes Historique*, 1970, S. 217ff.
- Panhorst, Karl H., Das Verhältnis der Ehinger zu den Welsern in den ersten deutschen Unternehmungen in Amerika, in *VSWG.*, XX. Bd., 1928, S. 174ff.
- , Der erste Kolonisor in Amerika, in *VSWG.*, XX. Bd., 1928, S. 408ff.
- Peyer, Hans Conrad, *Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520*, Bd. I, Bd. II, Kommissionsverlag Zollikofer & Co. AG., 1960.
- Pfeiffer, Gehard, Die Privilegien der Französischen Könige für die Oberdeutschen Kaufleute in Lyon, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., Selbstverlag des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg, 1965, S. 150-194.
- , Die Bemühungen der oberdeutschen Kaufleute um die Priviilegierung ihres Handels in Lyon, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnbergs*, 1. Bd., Im Selbstverlag des Stadtrats zu Nürnberg, 1967, S. 407ff.
- (hrsg. v.), *Nürnberg-Geschichte einer europäischen Stadt*, Verlag C.H. Beck, 1971, München.
- Pickl, Othmar, Die Ursachen der sozialen und wirtschaftlichen Umbrüche des 14./15. Jahrhunderts, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Steiermark*, 14. Sonderband, Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte der Steiermark und Kärntens, Graz, 1967.
- , Handel und Wandel am Hofzaun des Reiches um 1550, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Steiermark*, 16. Bd., Verlag des Historischen Vereins für Steiermark, Graz, 1968, S. 172ff.
- (hrsg.), *Die wirtschaftlichen Auswirkungen der Türkenkriege*, Im Selbstverlag der Lehrkanzel für Wirtschafts- und Sozialgeschichte der Universität Graz, Graz, 1971.
- , Die Auswirkungen der Türkenkriege auf den Handel zwischen Ungarn und Italien im 16. Jahrhundert, in *Die wirtschaftlichen Auswirkungen der Türkenkriege*, Graz, 1971, S. 71-129.
- , Routen, Umfang und Organisation des innereuropäischen Handels mit Schlachtvieh im 16. Jahrhundert, in *Festschrift Hermann Wieflecker*, hrsg. v. Ale-

- xander Novotny, Im Selbstverlag des Historischen Instituts der Universität Graz, Graz, 1973, S. 143ff.
- Pilz, Kurt, Nürnberg und die Niederlande, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 43. Bd., 1952, S. 1-153.
- , Fernlieferungen von Nürnberger Kunstwerken und Kunsthandwerklichen Erzeugnissen 1350~1580, in *Scripta Mercaturae*, 1968/2, S. 39-66.
- Pirenne, Henri, The Place of the Netherlands in the Economic History of the Medieval Europe, in *the Economic History Review*, edited by E. Lipson, vol. II, 1929~1930, pp.20-40.
- Pitz, Ernst, Wirtschaftliche und soziale Probleme der gewerblichen Entwicklung im 15./16. Jahrhundert nach hansisch-niederdeutschen Quellen, in *Wirtschaftliche und soziale Probleme der gewerblichen Entwicklung im 15., 16. und 19. Jahrhundert*, hrsg. v. Friedrich Lütge, 1968, S. 16-43.
- Pohl, Hans, Zur Geschichte des Adligen Unternehmers im Spanischen Amerika, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 2. Bd., 1965, S. 218-244.
- , Die Zuckereinfuhr nach Antwerpen durch portugiesische Kaufleute während des 80 jährigen Krieges, in *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, 4. Bd., 1967, S. 348-373.
- , Das Textilgewerbe in Hispanoamerika während der Kolonialzeit, in *VSWG.*, 56. Bd., 1969.
- , Köln und Antwerpen um 1500, in *Mitteilungen aus dem Stadtarchiv von Köln*, hrsg. v. Hugo Stehkämper, 60. Heft, Verlag von Paul Meubner, Köln, 1971, S. 469ff.
- Poppe, Robert, Die Augsburgs Handelsgesellschaft Österreicher, 1590~1618, in *Abhandlungen zur Geschichte der Stadt Augsburg*, 2. Heft, Selbstverlag der Stadt Augsburg, B. Schmid'sche Buchhandlung, 1928, S. 5ff.
- Potthoff, Heinz, Die Rabensberger Leinenindustrie und ihre Tochtergewerbe, in *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 34. Jg., 1910.
- Pölnitz, Götz, Freiherrn von, Jakob Fugger und der Streit um den Nachlass des Kardinals Melchior von Brixen, in *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken*, XXX. Bd., 1940, S. 223-294.
- , Fugger und Medici, in *Historische Zeitschrift*, 166. Bd., 1942.
- , Anton Fugger und die Römische Königswahl Ferdinands I, in *Zeitschrift für*

- bayerische Landesgeschichte*, 16. Bd., 1951/52.
- , *Fugger und Hanse, Ein Hundertjähriges Eeinigen um Ostsee und Nordsee*, J.C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1953.
- Pölcher, Bertold, Die Kaufbeurer Patrizierfamilie, in *Kaufbeurer Geschichtsblätter*, Bd. 7 (1975~77), Nr. 8, S. 233ff, Nr. 9, S. 256ff.
- Prickler, Harald, Das Volumen des westlichen ungarischen Außenhandels vom 16. Jahrhundert bis 1700, in *Die wirtschaftliche Auswirkungen der Türkenkriege*, Graz, 1971, S. 131-158.
- Quelle, O., Süddeutscher Glashandel nach der Iberischen Halbinsel und Amerika, in *Iberoamerikanisches Archiv*, 10. Jg., 1936/37.
- Ranke, E. v., Die wirtschaftlichen Beziehungen Kölns zu Frankfurt am Main, Süddeutschland und Italien im 16. und 17. Jahrhundert, 1500~1650, in *VSWG.*, XI. Bd., Verlag von W. Kohlhammer, Berlin, 1924, S. 54-94.
- , Kölns binnendeutscher Verkehr im 16. und 17. Jahrhundert, in *Hansischer Geschichtsblätter*, 49. Jg., Druck von Max Schmidt-Römhild, Lübeck, 1924, S. 64ff.
- Ratekin, Mervýn, The Early Sugar Industry in Espanóla, in *The Hispanic American Historinal Review*, vol. 34, 1954.
- Rauers, F., Zur Geschichte der alten Handelsstraßen in Deutschland, in *Dr. A. Petermanns Mitteilungen aus Justus Ferthes's Geographischer Anstalt*, 52. Bd., Gotha, Justus Perthes, 1906, S. 49ff.
- Ravensburg in Geschichte und Gegenwart*, hrsg. v. Stadtbücherei Ravensburg, 1968.
- Reincke, Heinrich, Machtpolitik und Weltwirtschaftspläne Kaiser Karls IV, in *Hansischen Geschichtsblätter*, 1924.
- Lukas Rehm von Hubert Freiherrn von Welser, in *Lebensbilder aus dem Bayerischen Schwaben*, hrsg. v. Götz Freiherrn von Pölnitz, 6. Bd., Max Hueber Verlag, München, 1958, S. 166ff.
- Riemersma, Jelle C., Oceanic Expansion Force and Enterprise in the Creation of Oceanic Commerce, in *The Journal of Economic History*, vol. X, 1950.
- Roth, Helmut, Handel und Gewerbe vom 6. bis 8. Jahrhundert östlich des Rheins, in *VSWG.*, 58. Bd., 1971.
- Rottenkolber, Josef, *Geschichte des Allgäus*, Bergverlag Rudolf Rother, München.
- Rörig, Fritz, *Das Einkaufsbüchlein der Nürnberg-Lübecker Mulich's auf der Frank-*

- furter Fastenmesse des Jahres 1495*, Ferdinand Hirt in Breslau, 1931.
- Rudolf Hans Ulrich, *Die Reichsstadt Ravensburg und die Reformation*, Ravensburger Stadtgeschichte (12), hrsg. v. Ulmer Volksbank Ravensburg, 1982.
- Rummel, Heinrich und Andreas, Die Anfänge der Nürnberger Buchdruckerkunst, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 29. Bd., 1928, S. 301-334.
- Salter, F.R., The Hanse, Cologne and the Crisis of 1468, in *The Economic History Review*, vol. III, 1931/32, pp.93-101.
- Samsonowicz, Henryk, Über Fragen des Landhandels Polens mit Westeuropa im 15. und 16. Jahrhundert, in *Neue Hansische Studien*, 1970.
- Saxer, E., *Das Zollwesen der Stadt Basel bis zum Anfang des 16. Jahrhunderts*, Beihefte zur Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Verlag von W. Kohlhammer, 1923.
- Sayous, Andre E., Partnerships in the Trade between Spain and America and also in the Spanish Colonies in the sixteenth Century, in *Journal of Economic and Business History*, 1929, pp.232.
- Scammell, G.V., English Merchant Shipping at the End of the Middle Ages, in *The Economic History Review*, vol. XIII, 1961, pp.327-341.
- , Ships and Shipping in Early Modern Europe, in *Historical Journal*, vol. XI, 1968.
- , The New Worlds and Europe in the Sixteenth Century, in *The Historical Journal*, vol. XIII, 1969.
- Schaube, Adolf, Die Anfänge der venezianischen Galeerenfahrten nach der Nordsee, in *Historische Zeitschrift*, 101. Bd., Druck und Verlag von R. Oldenbourg, München und Berlin, 1908, S. 28ff.
- Schaper, Christa, Die Hirschvogel von Nürnberg und ihre Faktoren in Lissabon und Sevilla, in *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1970, S. 176ff.
- Schäfer, Dietrich, Deutschland und England im Welthandel des 16. Jahrhunderts, in *Sonderdruck aus den Preußischen Jahrbüchern*, Verlag von Hermann Walter, Berlin, 83. Bd., 1896, S. 268ff.
- , Das Zeitalter der Entdeckungen und die Hanse, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1897
- , Zur Orientierung über die Sundzollregister, in *Hansische Geschichtsblätter*, K.

- Bd., 1900.
- , Die Sundzoll-Listen, in *Hansische Geschichtsblätter*, Bd., XV, 1908, S. 1-33.
- Schäfer, Ernst, Internationaler Schiffsverkehr in Sevilla auf Grund einer Spanischen Schiffsfahrtsstatistik vom Ende des 16. Jahrhunderts, in *Hansische Geschichtsblätter*, 59. Jg., 1934, S. 143-176.
- , Spaniens Koloniale Warenausfuhr nach einer Preisliste des 16. Jahrhunderts, in *Ibero-Amerikanisches Archiv*, II. Jg., 1937/38, S. 312-332.
- , Der Verkehr Spaniens mit und in seinen Amerikanischen Kolonien, in *Ibero-Amerikanisches Archiv*, II. Jg., 1937/38, S. 435-455.
- Scheibe, Ernst, *Studien zur Nürnberger Waffenindustrie von 1450-1550*, Inaugural-Dissertation von der Philosophischen Fakultät Rheinischen Friedrich-Wilhelms Universität zu Bonn, 1908.
- Schelling, Alfred, *Urkundenbuch zur St. Gallischen Handel- und Industriegeschichte 816-1426*, hrsg. v. Kaufmännischen Directorium in St. Gallen, Druck der Buchdruckerei Zollikofer & Cie, St. Gallen, 1922.
- Schenk, Hans, Die Beziehungen zwischen Nürnberg und Prag von 1450-1500, in *Der Außenhandel Ostmitteleuropas 1450-1650*, hrsg. v. Ingomer Bog, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1971.
- Schierenberg, Heinz, *Blüte und Verfall der Lippischen Leinenindustrie*, Dissertation von der Universität Münster, Druck der Meyerschen Hofbuchdruckerei, Detmold, 1914.
- Schiffauer, Georg, Ein Sohn des Kolumbus in Nürnberg, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., 1965.
- Schildhauer, Johannes, Hafenzollregister des Ostseebereiches als Quellen zur Hansischen Geschichte, in *Hansische Geschichtsblätter*, 86, Bd., 1968, S. 63-76.
- , Zur Verlagerung des See- und Handelsverkehrs im nordeuropäischen Raum während des 15. und 16. Jahrhunderts, in *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, Akademie-Verlag, Berlin, 1968, S. 187-211.
- , Der Seehandel Danzigs im 16. Jahrhundert und die Verlagerung des Warenverkehrs im Nord- und Mitteleuropäischen Raum, in *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1970, Akademie-Verlag, Teil III, Berlin.
- Schleese, Kurt, Die Handelsbeziehungen Oberdeutschlands insbesondere Nürnbergs zu Posen im Ausgang des Mittelalters, in *Zeitschrift der Historischen Gesellschaft für die Provinz Posen*, 29. Jg., Eigentum der Historischen Gesellschaft, Posen, 1915, S. 171-260.

- Schramm, Percy Ernst, *Der Deutsche Anteil an der Kolonialgeschichte bis zur Gründung eigener Kolonien*, Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Göttinger Beiträge zur Kolonialgeschichte von H. Plischke und P.E. Schramm, 1944.
- , Deutschland und Übersee, in *Der Deutsche Handel mit den anderen Kontinenten*, insbesondere Afrika von Karl V. bis zu Bismarck, Georg Westermann Verlag, S. 15ff. und 83ff.
- Schremmer, Eckart, *Die Wirtschaft Bayerns vom hohen Mittelalter bis zum Beginn der Industrialisierung*. Bergbau, Gewerbe, Handel, Verlag, C.H. Beck, München, 1970.
- Schreyer, Gerd, *Ravensburger Stadtgeschichte* (6), (7), hrsg. v. Ulmer Volksbank Ravensburg, 1976, 1977.
- Schuhmann, Helmut, Das Bürgerrecht der Stadt Kaufbeuren, Satzungen und Ordnungen, in *Kaufbeurer Geschichtsblätter*, 6. Bd., 1971-74, S. 5ff.
- Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*, Band I, II, Verlag von Duncker & Humblot, Leipzig, 1900.
- , Wer war um 1430 der reichste Bürger in Schwaben und in der Schweiz?, in *Deutsche Geschichtsblätter*, 1. Bd., 1900, 9. Heft, S. 16ff.
- , Zur Geschichte der Ravensburger Gesellschaft, in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, XI. Jg., Druck von W. Kohlhammer, Stuttgart, 1902, S. 36-42.
- , Zur Handels- und Verkehrsgeschichte Süd-westdeutschlands im Mittelalter, in *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 27. Jg., 1903, S. 254ff.
- , *Die Fugger in Rom, 1493-1523*, Verlag von Duncker & Humblot, Leipzig, 1904.
- , *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart und Berlin, Band I, II, III, 1923.
- , Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530, in *Schmollers Jahrbuch*, 48. Bd., 1924, S. 213ff.
- Schultheiß, Werner, Die Entdeckung Amerikas und Nürnberg, in *Jahrbücher für Fränkische Landesforschung*, hrsg. v. Institut für Fränkische Landesforschung an der Universität Erlangen, 15. Bd., 1955.
- , Aus der Geschichte des Nürnberger Spielzeugs, in *Mitteilungen des Vereins*

- für *Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., 1965.
- Schumann, Otto, *Die Landeshuter Leinenindustrie in Vergangenheit und Gegenwart*, Verlag von Gustav Fischer, Jena, 1928.
- Schnyder, Werner, *Handel und Verkehr über die Bündner Pässe im Mittelalter zwischen Deutschland, der Schweiz und Oberitalien*, Bd. I,II, Schulthess Polygraphischer Verlag, Zürich, 1973, 1975.
- Seeger, Hans-Joachim, *Westfalens Handel und Gewerbe vom 9. bis 14. Jahrhundert*, Verlag von Karl Culltus, Berlin, 1926.
- Sievekling, H., Der Kaufmann im Mittelalter, in *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft*, München und Leipzig, 52. Jg., 1928.
- Simonsfeld, Henry, Ein venezianischer Reisebericht über Süddeutschland, die Ostschweiz und Oberitalien aus dem Jahre 1492, in *Zeitschrift für Kulturgeschichte*, hrsg. v. Georg Steinhausen, 2. Bd., 1985, Weimar, S. 241ff.
- Simsch, Adelheid, *Die Handelsbeziehungen zwischen Nürnberg und Posen im europäischen Wirtschaftsverkehr des 15. und 16. Jahrhunderts*, Im Kommission bei Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1970, S. 1-223.
- Simsch, Adelheid, Die Handelsbeziehungen zwischen Nürnberg und Posen im 15. und 16. Jahrhundert, in *Der Außenhandel Ostmitteleuropas 1450-1650*, hrsg. v. Ingomar Bog, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1971.
- Smith, Robert, S., Seville and the Atlantic: Cycles in Spanish Colonial Trade, in *The Journal of Economic History*, vol. XXII, 1962.
- Steinhausen, Georg, *Der Kaufmann in der deutschen Vergangenheit*, Bücherei des Verbandes Deutscher Handlungsgebülfen zu Leipzig, Jena, 1912.
- , *Der Kaufmann in der deutschen Vergangenheit*, Eugen Diesersches Verlag, Jena, 1924.
- Steinmeyer, Heinrich, *Die Entstehung und Entwicklung der Nördlinger Pfingstmesse im Spätmittelalter mit einem Ausblick bis ins 19. Jahrhundert*, Buchdruckerei Georg Wagner, Nördlingen, 1960.
- Stieda, Wilhelm, Über die Quellen der Handelsstatistik im Mittelalter, in *Abhandlungen der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften*, Verlag der Königlichen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1902.
- , Hansich-Venezianische Handelsbeziehungen im 15. Jahrhundert, Druck der Uni-Buchdruckerei von Adler's, Erben Rostock, 1894, S. 181ff.
- Stolz, Otto, Die Verkehrsverbindungen des oberen Rhein- und Donaugebietes um die Mitte des 16. Jahrhunderts, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*,

- NF., XXXVII. Bd., Carl Winters Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1922, S. 60ff.
- Strieder, Jakob, Die Süddeutschen Kaufleute und die Flandrische Bildteppichindustrie des 15. und 16. Jahrhunderts, in *Der Belfried, Eine Monatsschrift für Geschichte und Gegenwart der Belgischen Lande*, 2. Jg., Im Insel-Verlag, Leipzig, 1918, S. 302ff.
- , Levantinische Handelsfahrten deutscher Kaufleute des 16. Jahrhunderts, in *Merreskunde Sammlung Volkstümlicher Verträge zum Verständnis der Nationalen Bedeutung von Meer und Seeweg*, 13. Jg., Gedruckt bei E.S. Mittler & Sohn, Berlin, S. 1ff.
- , *Aus Antwerpener Notariatsarchiven*, Quellen zur Deutschen Wirtschaftsgeschichte des 16. Jahrhunderts, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, Berlin und Leipzig, 1930.
- Stromer, Wolfgang von, Organisation und Struktur Deutscher Unternehmen in der Zeit bis zum Dreissigjährigen Krieg, in *Tradition*, 13. Jg., 1968, S. 794ff.
- , *Oberdeutsche Hochfinanz, 1350-1450*, I, II, III, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1970.
- , Oberdeutsche Unternehmen im Handel mit der Iberischen Halbinsel im 14. und 15. Jahrhundert, in *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1970, S. 156ff.
- , Das Zusammenspiel Oberdeutscher und Florentiner Geldleute bei der Finanzierung von König Reprechts Itallienzug 1401/02, in *Öffentliche Finanzen und privates Kapital im späten Mittelalter und in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, Gustav Fischer Verlag, 1971, S. 50ff.
- , Die oberdeutschen Geld- und Wechselmärkte, in *Schripta Mercaturae*, 1976/1.
- Stützle, M., Die Grundlag wirtschaftlicher Stärke war im Mittelalter der Leinwandhandel, in *Wirtschaftsanzeiger*, 11, März, Isny im Allgäu, 1983.
- Theiss, Konrad, *Der Kreis Biberach*, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1973.
- , *Der Kreis Wangen, Verlag Heimat und Wirtschaft, Stuttgart*.
- (hrsg.), *Der Kreis Ravensburg*, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1976.
- Thimme, Hermann, Der Handel Kölns am Ende des 16. Jahrhunderts und die internationale Zusammensetzung der Kölner Kaufmannschaft, in *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, XXXI. Heft, Verlagsbuchhandlung von Jacob Linz, Trier, 1912, S. 389-483

- Tremel, Ferdinand, Die oberdeutschen Kaufleute in der Steiermark im 15. und 16. Jahrhundert, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Steiermark*, XI. Jg. Im Selbstverlag des Historischen Vereins für Steiermark, Graz, 1949, S. 13-35.
- , Die Fugger und Welser in Salzburg und die Fuggerstraße über die Tauern, in *Scripta Mercaturae*, 1972/2 S. 72-104.
- , Ein steirischer Kupfer- und Edelmetallbergbau, in *VSWG.*, 32. Bd., 1939.
- Trudel, Verena, *Schweizerische Leinenstickereien des Mittelalters und der Renaissance*, Verlag Paul Haupt, Bern, 1954.
- 田中善治郎「中世ヴェネツィアの海上商業とその組織」『社会経済史学』第12巻, 昭和18年。
- Der Stadtkreis Ulm*, Amtliche Kreisbeschreibung, hrsg. v. Landesarchivdirektion Baden-Württemberg, Süddeutsche Verlagsgesellschaft GmbH, 1977.
- Unger, Eike Eberhard, Nürnbergs Handel mit Hamburg im 16. und Beginnenden 17. Jahrhundert, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 54. Bd., Selbstverlag des Vereins für Geschichte Stadt Nürnberg, 1966, S. 1ff.
- Unger, Manfred, Die Leipziger Messe und Niederlande im 16. und 18. Jahrhundert, in *Hansische Geschichtsblätter*, 81. Jg., 1963, S. 20ff.
- Uscher, Abbott Payson, *The History of the Grain Trade in France 1400-1710*, Octagon Books, New York, 1973.
- Veit, Ludwig, *Handel und Wandel mit aller Welt aus Nürnbergs großer Zeit*, Prestel Verlag, München, 1960.
- Verlinden, Charles, Italian Influence in Iberian Colonization, in *The Hispanic American Historical Review*, vol. 33, 1953.
- Vincke, Johannes, Zu den Anfängen der deutsch-spanischen Kultur- und Wirtschaftsbeziehungen, in *Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 14. Bd., hrsg. v. Johannes Vincke, 1959.
- , Deutsch-spanische Kultur- und Wirtschaftsbeziehungen, in *Sonderdruck aus Spanische Forschungen der Görresgesellschaft, Erste Reihe Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 14. Bd., Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung, Münster Westfalen, 1959, S. 111ff.
- , Die Spanischen Forschungen der Görres-Gesellschaft, in *Sonderdruck aus dem Historischen Jahrbuch der Görresgesellschaft*, Köln, 55. Bd., Heft 2/3.
- Vives, Jaime, Vicens, *An Economic History of Spain*, Princeton University Press,

- Princeton, New Jersey, 1969.
- Vlachović, Jozéf, Produktion und Handel mit ungarischen Kupfer im 16. und im ersten Viertel des 17. Jahrhundert, in *Außenhandel Ostmitteleuropas, 1450~1650*, Böhlau Verlag, Köln Wien, 1971.
- Vogel, Fmanuel Hugo, Der Giralverkehr in den oberitalienischen und den deutschen Handelszentren bis zum ausgehenden Mittelalter, in *VSWG.*, 31. Bd., 1938, S. 1ff.
- Washburn, Wilcomb, E., The Meaning of Discovery in the Fifteenth and Sixteenth Centuries, in *The American Historical Review*, vol. LXVIII, 1962.
- Weber, Lotte, Die Anfänge des deutschen Leinengewerbes bis zum Ausgang des 14. Jahrhunderts, in *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins*, 50. Bd., 1917, S. 177ff.
- Weczarka, Hugo, *Hansische Handelsstraßen, Atlas*, Böhlau Verlag, Köln, Graz, 1962.
- , *Hansische Handelsstraßen*, Böhlau Verlag, Köln, Graz, 1967.
- Weber, Max *Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter nach südeuropäischen Quellen*, Verlag von Ferdinand Enke, 1889.
- Weitnauer, Alfred, *Allgäuer Chronik*, Verlag für Heimatpflege, Kempten, 1969.
- Welser, Freiherrn Johann Michael, Nachrichten über Philippine Welser, in *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben und Neuburg*, 14. Jg., Augsburg, 1887.
- Welser, Hubert Freiherrn v., Bartholomäus Welser V., in *Lebensbilder aus dem Bayerischen Schwaben*, hrsg. v. Götz Freiherrn von Pölnitz, Bd. 4, Max Hueber Verlag, München, 1955, S. 120ff.
- Werner, Theoder Gustav, Das fremde Kapital im Annaberger Bergbau und Metallhandel des 16. Jahrhundert, in *Neues Archiv für Sächsische Geschichte und Altertumskunde*, 57. Bd., 1936, und 58. Bd., 1937.
- , Europäisches Kapital in Ibero-amerikanischen Montanunternehmungen des 16. Jahrhundert, in *VSWG.*, 48. Bd., 1961, S. 18ff.
- , Das Kaupferhüttenwerk des Hans Tetzl aus Nürnberg auf Kuba, in *VSWG.*, 48. Bd., 1961, S. 444-465.
- , Nürnbergs Erzeugung und Ausfuhr wissenschaftlicher Geräte im Zeitalter der Entdeckungen, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd., Nürnberg, 1965, S. 69-149.

- , Repräsentanten der Augsburger Fugger und Nürnberger Imhof, in *VSWG.*, 52. Bd., 1965, S. 1ff.
- , Die Beteiligung der Nürnberger Welser und Augsburger Fugger an der Eroberung des Rio de La Plata und der Gründung Buenos Aires, in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte Nürnbergs*, 1. Bd., 1967, S. 494–592.
- , Zur Geschichte Tetzelscher Hammerwerke bei Nürnberg und des Kupferhüttenwerks Hans Tetzels auf Kuba, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 55. Bd., 1967.
- , Batholomäus Welser, in *Scripta Mercaturae*, 1967/1, S. 71ff.
- , Unternehmerwerkstätten im europäischen Textilgewerbe des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, Vorstufen des Fabrikwesens, in *Scripta Mercaturae*, 1970/2, S. 83ff, 1971/1, S. 75ff, 1971/2, S. 75ff.
- , Die Anfänge der deutschen Zuckerindustrie und die Augsburger Zuckerraffinerie von 1583, in *Scripta Mercaturae*, 1975/1.
- , Das kaufmännische Nachrichtenswesen im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit und sein Einfluß auf die Entstehung der handschriftlichen Zeitung, in *Scripta Mercaturae*, 1975/2.
- Westermann, Ascan, Die Zahlungseinstellung der Handelsgesellschaft der Gebrüder Zangmeister zu Memmingen 1560, in *VSWG.*, VI. Bd., 1908, S. 460ff.
- , Die Geistlichkeit des Kapitals Ottobeuren, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1. Jg., 1912, Nr. 3, S. 19ff, Nr. 4, S. 25ff.
- , Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingsens im ausgehenden Mittelalter, Teil 1, in *Memminger Geschichtsblätter*, 2. Jg., 1913, Nr. 1, S. 5ff, Nr. 2, S. 14ff, Nr. 3, S. 17ff,
- , Der Memminger Königszins, in *Memminger Geschichtsblätter*, 2. Jg., Nr. 4, 1913, S. 25ff, Nr. 5, S. 33ff.
- , Memminger Weinhandel und Weinausschank im 15. und im 16. Jahrhundert, in *Memminger Geschichtsblätter*, 2. Jg., 1913, Nr. 7, S. 51ff, Nr. 8, S. 57ff.
- , Geschichte der Zangmeisterischen Mess-Stiftung in Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 2. Jg., 1913, Nr. 8, S. 61ff, Nr. 9, S. 65ff, Nr. 10, S. 73ff.
- , Das Memminger Bleichwesen in der reichsstädtischen Zeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 3. Jg., 1914, Nr. 8, S. 59ff, Dezember, Nachtrag, S. 25ff.
- , Zur Geschichte der Memminger Weberzunft und ihrer Errzeugnisse im 15. und 16. ahrhundert, in *VSWG.*, 12. Bd., 1914, S. 385–403 und S. 567–592.
- , Memminger Handel und Handelsgesellschaften um die Wende vom Mittelalter

- zur Neuzeit, in *Memminger Geschichtsblätter*, 6. Jg., 1920, Nr. 2, S. 9ff., Nr. 3, S. 17ff.
- , Zur Memminger Geschlechtergeschichte, die Sättelin, in *Memminger Geschichtsblätter*, 6. Jg., 1920, Nr. 4 S. 24ff, und Nr. 5, S. 32ff.
- , Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingsens im ausgehenden Mittelalter, Teil 2, in *Memminger Geschichtsblätter*, 7. Jg., 1921, Nr. 4, S. 25ff.
- , Die Besserer-Gesellschaft zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 6. Jg., 1920, Nr. 7, S. 53ff., und 7. Jg., 1921, Nr. 1, S. 3ff.
- , Die Bevölkerungsverhältnisse Memmingsens im ausgehenden Mittelalter, Teil 3, in *Memminger Geschichtsblätter*, 8. Jg., 1922, Nr. 2, S. 10ff, Nr. 3, S. 17ff. Nr. 4, S. 25ff.
- , Die Haintzel zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 8. Jg., 1922, Nr. 5, S. 30ff.
- , Die Vöhlin zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 9. Jg., 1923, Nr. 5, S. 33ff, Nr. 6, S. 41ff.
- , Das Haus der Elefantnapotheke, in *Memminger Geschichtsblätter*, 10. Jg., Nr. 3, 1924, S. 17ff.
- , Zur Memminger Handelsgeschichte, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1924, Nr. 3, S. 18ff.
- , Ein Memminger Sensehandel von 1454, in *Memminger Geschichtsblätter*, 1924, Nr. 3, S. 18ff.
- , Besprechung des Werkes von Aloys Schulte über die Große Ravensburger Handelsgesellschaft, in *Schwäbischer Erzähler*, Memmingen, 1924, S. 133ff.
- , Das Bürgerrecht der Reichsstadt Memmingen vornehmlich im Mittelalter, in *Memminger Geschichtsblätter*, 12. Jg., 1926, Nr. 1, S. 1ff. Nr. 2, S. 9ff.
- , Zangmeister als Memminger Krämer und Großkaufleute, in *Memminger Geschichtsblätter*, 13. Jg., 1927, Nr. 4, S. 27ff, Nr. 5, S. 35ff.
- , Bernhard Strigel als reichsstädtischer Bürger, in *Memminger Geschichtsblätter*, 14. Jg., 1928, Nr. 2, S. 13ff.
- , Das Geschlecht der Leutkircher und seine Beziehungen zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 15. Jg., 1929, S. 25ff.
- , Der Pfarrer Markus Zangmeister und sein Streit mit Lindau, in *Memminger Geschichtsblätter*, 16. Jg., 1930, Nr. 4, S. 25ff, Nr. 5, S. 33ff.
- , Die Besserer zu Memmingen, in *Memminger Geschichtsblätter*, 18. Jg., 1932, Nr. 4, S. 25ff, Nr. 5, S. 33ff.

- , Geschlechterfolge der Memminger Zangmeister-Linie, in *Memminger Geschichtsblätter*, 20. Jg., 1935, Nr. 2, S. 9ff.
- , Untersuchungen zur Steben-haberchronik in der Memminger Stadtbibliothek, in *Memminger Geschichtsblätter*, 20. Jg., 1935, Nr. 3, S. 17ff.
- , Die Memminger Ammänner und Bürgermeister, in *Memminger Geschichtsblätter*, 20. Jg., 1935, Nr. 4, S. 25ff.
- , Schwäbisches Schriftum, Sippenkundliche Erwerbungen der Memminger Stadtbibliothek, in *Memminger Geschichtsblätter*, 22. Jg., 1937, Nr. 3, S. 21ff.
- , Nachrichten über mittelalterliche Memminger Geschlechter, in *Memminger Geschichtsblätter*, 22. Jg., 1937, Nr. 3, S. 17ff, Nr. 4, S. 27ff, 23. Jg., 1938, Nr. 1, S. 4ff, 24. Jg., 1939, Nr. 1, S. 5ff., 1951, 1952/53, 1954/55, 1957.
- Widmoser, Eduard, Philippine Welser, in *Lebensbilder aus dem Bayerischen Schwaben*, hrsg. v. Götz Freiherrn von Pölnitz, Bd., 2, Max Hueber Verlag, München, 1953, S. 227ff.
- Wielandt, Fritz, Leinwandgewerbe am Bodensee, in *Das Bodenseebuch*, 1936, S. 22ff.
- Wieland, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, I. II. Bd., Verlag der Verlagsanstalt Merk & Co. Kom. Ges, Konstanz, 1953.
- Wiese, Heinz, Die Fleischversorgung der nordwesteuropäischen Großstädte vom XV. bis XIX. Jahrhundert unter besonderer Berücksichtigung des interterritorialen Rinderhandels, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 179. Bd., 1966, S. 125-139.
- Winter, Georg, Zur Geschichte des Zinsfußes im Mittelalter, in *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 4. Bd., 1896, S. 161-175.
- Winterfeld, Luise, v., *Die Dortmunder Wandschneider-Gesellschaft, Quellen und Untersuchungen zur Geschichte des Tuchhandels in Dortmund*, Im Verlage des Historischen Vereins, Dortmund, 1922.
- Witthöft, Harald, *Umriss einer historischen Matrologie zum Nutzen der Wirtschafts- und Sozialgeschichtlichen Forschung*, Bd., 1, 2, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1979.
- Witzel, Georg, Gewerbegeschichtliche Studien zur niederländischen Einwanderung in Deutschland im 16. Jahrhundert, in *Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, XXIX. Jg., 1910.
- Wolff, Philippe, English Cloth in Toulouse 1380-1450, in *The Economic History Review*, 50. Bd., 1949, pp. 260-294.
- Wunder, Gerd, Bartolomé Flores, ein früher Nürnberger Amerikafahrer, in *Mitte-*

- ilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 48. Bd., 1958.
- 山瀬善一「中世末期及び近世初期の南フランス商業史についての二題」『社会経済史学』
vol. 23, 1958年。
- , 『南フランスの中世社会経済史研究』有斐閣, 昭和43年。
- Zeller, Kreszentia, *So war's einmal im Allgäu*, Verlag für Heimatpflege, Kempten,
1976.
- Zipperer, Gustav Adolf, *Nördlingen, Lebenslauf einer schwäbischen Stadt*, Verlag F.
Steinmeier, Nördlingen, 1979.
- Zorn, Wolfgang, Beiträge zur Biographie des ostdeutschen Unternehmertums, in
Tadition, 4. Jg., 1959, Heft 4.
- , Zur Geschichte der schwäbischen Wirtschaft 1368-1969, in *Sechs Jahrhunderte
schwäbische Wirtschaft*, hrsg. v. Wolfgang Zorn, Leonhard Hillenbrand, Augs-
burg, S. 1ff.
- (hrsg.), *Handbuch der Deutschen Wirtschafts-und Sozialgeschichte*, Bd., I, II,
Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1976.
- Zycha, A., Über die Anfänge der kapitalistischen Ständebildung in Deutschland, in
VSWG., Verlag von W. Kohlhammer, Stuttgart 1938, S. 105ff.

あとがき

ボーデン湖を中心とした周辺地域の中小都市の多くにそれぞれ商事会社が発達し、数多くの商人が巨額の財をなすまでに活躍できたことは、当時のヨーロッパの通商が全般的にかなりの活況を呈していたことを物語るものである。それだけでなくこれら中小都市の商人ですら当時の商業世界のほとんど全域にあまねくその活動の足跡を印していることは、当時のヨーロッパ経済・商業活動が決して単なる「都市の時代」としての範疇におさまるものではなかったことを示している。

乏しい史料のなかでの研究ではあったが、西南ドイツ麻織物経済圏における具体的な商業活動の史実は、それらの活動の中心となったこの地域の中小都市とその商事会社・商人活動の歴史の中におぼろげながらも跡づけることができたと思う。さらにそれらの歴史を通して、ヨーロッパ中世・近世商業史の移行期における具体的な変動の姿を部分的とはいえ、そこに追究することができたと思う。指摘したい点は、歴史に登場する巨商のいずれもが、商営業のかたわら多分に封建領主・土地領主化する趨勢を示したことと、さらにこの麻織物経済圏全体が、当時のヨーロッパ世界の中心であった地中海世界の方により強力に組み込まれていたことである。それらの事例は、本文中に数多く見出すことができると思う。

研究の途上において、1985年に訪ね歩いたこの研究対象地域であるカウフボイレンやメミンゲン、ケンプトン、イスニー、等々の古文書館や図書館に当時の商業活動に関する文献を見出し、あるいはわが国学会にはほとんど紹介されていなかった歴史研究家の山のような研究業績を偶然にも探しあてることができたことは、この研究の成果とは言い難いにしても、研究者の一人として言い尽くせない喜びとなっている。

今後に残されている課題は数多くあるが、例えば上に見たコンスタンツ、ザ

ンクト・ガレン、ラーフェンスブルク、メミンゲンをこえて、イスニー、カウフボイレン、ケンプテン、等々の中小都市の歴史にはまだほとんど手がつけられていないと言わなければならない。さらに、上に述べた麻織物生産と麻織物商業に関するそれぞれの都市内における具体的な経済活動及び経営活動についても数多くの問題が残されたままである。それぞれの都市が麻織物生産に具体的にどのように関わり、どのような規模で、さらにどのような生産形態で行なっていたか、について深く論証することは残念ながらできなかった。生産者に対する商人支配の形態としての問屋制前貸形態(Verlagssystem)の存在そのものについても、その一般的存在の指摘は多くの文献に見ることはあってもその具体的な運営について個々の都市内外に跡づけることはできなかった。また、麻織匠の存在とその手工業経営の具体的な経営の実状、例えば徒弟(Lehrlinge)や職人(Geselle)、親方(Meister)による麻織物生産に関する具体的な活動や都市の麻織匠組合の組織上の問題、徒弟の受け入れや職人の雇用、さらに現在のドイツになお伝統的に維持されている徒弟教育上の問題等々も触れないままに残された課題である。ただこれらの分野については本文中にも指摘した通り、この地域の中小都市の経済政策を扱った Ludwig Klaiber の著作 Beiträge zur Wirtschaftspolitik oberschwäbischer Reichsstädte im ausgehenden Mittelalter, 12. Beihefte der VSWG, 1927, に詳しい記述があることを示しておきたい。いずれにしても、麻織物生産そのものに関するよりも各都市における麻織物商業、麻織物商人、麻織物を扱う商事会社の研究の方に比重をおいたことをご了解いただきたいと思う。

研究の途上で訪れたラーフェンスブルクに今なお存在するフンピス家の建物を、既に600年を経た今日も町全体で保っている姿や、その歴史的事実を町の誇りとして歴史資料用テキストを繰り返し発行してきている都市の文化政策と、それに資金を提供し続ける地元銀行その他の企業の協力の姿を見ることができ、そこにドイツの歴史と文化を尊重する国民性を確認することができた。人口数千人の町でありながら今なお高い学歴と見識を持った古文書研究家(Stadtarchivar)を擁して、訪れる研究家に数多くの便宜をはかっている町が決して少

なくないのである。

本研究はもともと、文献整理等の都合上、各都市ごとあるいは商事会社ごとに少しずつ発表してきたものを一つにまとめたものである。学界ではすでに半世紀以上も前に開拓された課題であるが、麻織物貿易史に関しては未開拓の部分が残されたままであったと思う。過ぎ去った時間の長さ比べて研究の進み具合の遅さに、自分の不勉強を恥じる以外にないが、本研究がいく分なりともそこに残されていた未開拓部分の開拓に貢献できるとすれば、これに過ぎる喜びはない。今後一層のご教示、ご叱正をお願いするしだいである。

■ 著者略歴

岩井清治(いわい きよはる)

1942年3月 長野県駒ヶ根市に生まれる

1969年3月 明治大学大学院商学研究科博士課程所定単位取得修了

1972年10月～76年3月 ドイツ連邦共和国(西ドイツ)フライブルク
大学在籍

1985年6月～9月 文部省短期在外研修(西ドイツ)

現 在 桜美林大学経済学部教授, 千葉短期大学講師

主要著書・論文 『西ヨーロッパ貿易風土論』(白桃書房)「16世紀後半
における新大陸向スペイン輸出商品とヨーロッパ生
産地」(『桜美林エコノミックス』)「共同体理念と共
同体規制のヨーロッパ的風土」(桜美林大学『国際文
化研究所報告』)「西ドイツの都市社会規制と風土的
基盤」(経営行動研究所『経営行動』)「ドイツ職業教
育制度—その歴史と意義—」(経営行動研究所『経
営行動』)

翻 訳 ルートヴィヒ・クライバー著『中世都市の経済規制』(1)
(2)(3)(4)(5)(6), (以上いずれも『桜美林エコノミックス』掲載)

■ 中世南ドイツ麻織物貿易史の研究

(検印省略)

■ 発行日—————1993年3月26日 初版発行

■ 著 者—————岩井清治

■ 発行者—————大矢順一郎

■ 印刷者—————田中輝男

■ 発行所—————株式会社 白桃書房

〒101 東京都千代田区外神田5-1-15

電 話 (03)3836-4781(代)

F A X (03)3836-9370

振 替 東京 0-20192

■ 印刷・製本—————田中活版/渡辺製本

■ 図書コード—————ISBN4-561-66071-2 C3063

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©Kiyoharu Iwai 1993 Printed in Japan